

# 『朱子語類』卷一四〜一八 訳注(四)

宇佐美文理・小笠智章・焦堃・孫路易・中純夫・福谷彬

『朱子語類』卷一五「大学」二(86〜156条)

86条

致知誠意、是學者兩箇關。致知乃夢與覺之關、誠意乃惡與善之關。透得致知之關則覺、不然則夢。透得誠意之關則善、不然則惡。致知誠意以上、工夫較省、逐旋開去、至於治國平天下、地步愈闊、却須要照顧得到。 人傑

〔校勘〕

- 「致知誠意、是學者兩箇關」 成化本、万曆本、呂留良本、朝鮮古写本、朝鮮整版本、和刻本は「是」を「乃」に作る。劉氏伝経堂叢書本は「是」に作る。
- 「學者兩箇關」 朝鮮古写本は「箇」を「个」に作る。
- 「地步愈闊」万曆本、和刻本は「闊」を「濶」に作る。

〔訳〕

致知と誠意とは、学ぶ者にとっても二つの関門である。致知とは夢と覚との関門であり、誠意とは悪と善との関門に他ならない。致知という関門を突破すれば覚であり、さもなければ夢である。誠意という関門を突破すれば善であり、さもなければ悪である。致知誠意以上は、実践工夫は比較的、手もかからず、一つ一つと展開していった、治國平天下にまで至れば、その範囲はますます広くなっていくので、そこでは周到に注意を払う必要が有る。 萬人傑録

〔注〕

- (1)「致知乃夢與覺之關、誠意乃惡與善之關」 前条参照。
- (2)「致知誠意以上、工夫較省」 本条冒頭に「致知誠意、是學者兩箇關」とあるように、致知と誠意は八条目の中でも最も重要な工夫として位置付けられている。従って致知誠意以降(＝正心乃至平天下)は致知誠意に比べると工夫の重要度は軽い、という位置づけになるはずである。因って「致知誠意以上」の「以上」は「以下」とあるべきところ。卷一四、一五条「大學重處都在前面。後面工夫漸

漸輕了、只是措磨在。」本卷、一一五条「意識則心正。誠意最是一  
段中緊要工夫。下面一節輕一節。」同、一二二条「大學於格物・誠意、  
都煅煉成了。到得正心・修身處、只是行將去、都易了。」本卷、  
八五条「過得此二關、上面工夫却一節易如一節了。」

(3) 「逐旋」 逐一。本卷四条、一二二条、四七条に既出。

(4) 「至於治國平天下、地步愈闊」 前条に「到得平天下處、尚有些  
工夫。只爲天下濶、須著如此點檢。」なお本卷一四一条に「凡自家身  
心上、皆須體驗得一箇是非。若講論文字、應接事物、各各體驗、漸  
漸推廣、地步自然寬闊。」とある。「地步」は、範圍、余地、スペース。  
『語類』卷二、九八条、甘節録(一〇三)「潘子善問。如何可治河決之患。  
曰。漢人之策、令兩旁不立城邑、不置民居、存留些地步與他、不與  
他爭、放教他寬、教他水散漫、或流從這邊、或流從那邊、不似而今  
作堤去圩他。」

(5) 「却須要照顧得到」「照顧」は氣にかける、留意する。前条の「點  
檢」と同方向の意。

87条

知至意識、是凡聖界分關隘。未過此關、雖有小善、猶是黑中之白。  
已過此關、雖有小過、亦是白中之黑。過得此關、正好著力進步也。

道夫

〔校勘〕

○「正好著力進步也」 成化本、万曆本、朝鮮古写本、朝鮮整版本、  
和刻本は「著」を「着」に作る。

○「凡聖界分關隘」「已過此關」「過得此關」 万曆本と和刻本は三出  
する「關」のうち、前一者は「關」に作り、後二者は「関」に作る。

〔訳〕

「知は至り意は誠に」とは、凡聖の分かれ目の難関である。この難  
関を通過していない間は、少々の善が有ったとしても、それは黒一面  
の中の白点のようなものである。既にこの難関を通過したのだとすれ  
ば、たとえ些細な過ちが有ったとしても、それはやはり白一面の中の  
黒点のようなものである。この関門を通過すれば、まさに尽力して歩  
みを進めていくべきなのである。 楊道夫録

〔注〕

(1) 「知至意識、是凡聖界分」 本卷八四一条「大學物格知至處、便是  
凡聖之關。」「界分」は境界、分岐点。

(2) 「關隘」 險阻な要害、難関處、重大な関鍵處。『南齊書』卷三八「蕭  
景先」「惠朗依山築城、斷塞關隘、討天蓋黨與。」

(3) 「小善」 少しばかりの善行。『易經』「繫辭下伝」「善不積不足以  
成名、惡不積不足以滅身。小人以小善為無益而弗為也、以小惡為無  
傷而弗去也。」

(4) 「黑中之白」「白中之黑」 本卷八四一条の「白地上黑點」「黑地上

白點」を参照。『語類』卷三一、一七条、楊道夫録（Ⅲ）「且以屋  
喻之。三月不違者、心常在内、雖間或有出時、然終是在外不穩便、  
纔出即便入。蓋心安於内、所以為主。日月至焉者、心常在外、雖間  
或有人時、然終是在内不安、纔入即便出。蓋心安於外、所以為賓。  
日至者、一日一至此。月至者、一月一至此、自外而至也。不違者、  
心常存、日月至者、有時而存。此無他、知有至未至、意有誠未誠。  
知至矣、雖驅使為不善、亦不為。知未至、雖軋勒使不為、此意終迸  
出來。故貴於見得透、則心意勉循循、自不能已矣。…又曰。三月  
不違之違、猶白中之黑。日月至焉之至、猶黑中之白。」（参考）『論語』  
「雍也」「子曰。回也、其心三月不違仁。其餘、則日月至焉而已矣。」

(5) 「小過」 些細な過ち、罪科。『易経』「小過」「小過、亨、利貞。  
彖曰小過、小者過而亨也。」程伝「蓋為小者過、又為小事過、又為  
過之小。」『韓非子』「七術」「公孫鞅之法也重輕罪。重罪者、人之所  
難犯也。而小過者、人之所易去也。使人去其所易、無難其所難、此  
治之道。夫小過不生、大罪不至、是人無罪而亂不生也。」

(6) 「正好」「正好」は「…するのにちょうどよい」「まさに…すべ  
きである」卷一四、三五条に既出。

(7) 「著力進歩也」「著力」は尽力する、努力する、力を込める。本  
卷二三条に既出。

88条

大學所謂知至意誠者、必須知至、然後能誠其意也。今之學者只說操存、

而不知講明義理、則此心憤憤、何事於操存也。某嘗謂誠意一節、正是  
聖凡分別關隘去處。若能誠意、則是透得此關。透此關後、滔滔然自在  
去為君子。不然、則崎嶇反側、不免為小人之歸也。

致知所以先於誠意者如何。曰。致知者、須是知得盡、尤要親切。尋  
常只將知至之作盡字說、近來看得合作切至之至。知之者切、然後貫  
通得誠意底意思。如程先生所謂真知者是也。 謨

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一五は本条を収録しない。

○「滔滔然」 万曆本、和刻本は「滔滔」を「滔々」に作る。

○「崎嶇反側」 成化本、万曆本、和刻本は「崎」を「崎」に作る。

〔訳〕

「『大學』に謂う「知は至り意は誠に」とは、必ずや知が至るのを待つ  
て、然る後にその意を誠にすることができるのである。今の学ぶ者が、  
ただ操存を説くだけで、義理を講じ明らかにするということを知らな  
ければ、この心は乱れてしまうから、どうして操存に従事することな  
どできようか。私は以前から思っているのだが、誠意の一節は、まさ  
しく聖と凡との分かれ目の難関箇所なのである。もし意を誠にするこ  
とができれば、それはつまりこの関門を突破したことなのである。こ  
の関門を突破した後は、滔滔と水が流れゆく如くに、思いのままに君  
子となることができるのである。逆にこの関門を突破しなければ、（そ  
の前途は）険しく不安定で、結局は小人で終わることを免れないので

ある。」

「致知が誠意に先立つのは、どうしたわけでしょう。」先生「致知とは、是非とも知り尽くさねばならないのであって、最も懇切であるべきものだ。通常は知至の至を「尽」の字に解して説明するが、最近では切至の至と見なすべきだと思ふようになった。知ることが切実であつてこそ、誠意の趣旨にも貫通することができるのだ。程先生の所謂真知が、これに当たるのだ。周諱録

〔注〕

(1)「操存」『孟子』「告子」上「孔子曰。操則存、舍則亡。出入無時、莫知其郷。惟心之謂與。」朱注「程子曰。…操之道、敬以直内而已。」右の程子の語や以下の引用にも見られるように、操存は心を收斂することであり、涵養や敬と結びつく概念である。『語類』卷一一三、一六条、黄義剛録(Ⅶ 15)「操存只是教你收斂、教那心莫胡思亂想。」『語類』卷九、一一条、曾祖道録(Ⅰ 15)「操存涵養、則不可不緊。進學致知、則不可不寬。」誠意と操存の結びつきについては以下を参照。『語類』卷一八、九条、楊道夫録(Ⅱ 39)「叔文問。正心誠意、莫須操存否。曰。也須見得後、方始操得。不然、只恁空守、亦不濟事。」なお操存に先立つて窮理致知が為されるべきであるという点に関しては以下を参照。『語類』卷五、三四条、廖謙録(Ⅰ 8)「古人學問、便要窮理知至、直是下工夫消磨惡去、善自然漸次可復。操存是後面事、不是善惡時事。」

(2)「講明義理」義理について講じて明らかにする。『河南程氏遺書』

卷一八、二七条(Ⅱ 8)「窮理亦多端。或讀書、講明義理、或論古今人物、別其是非、或應接事物而處其當、皆窮理也。」

(3)「憤憤」乱れるさま『莊子』「大宗師」「彼又惡能憤憤然為世俗之禮、以觀衆人之耳目哉。」成玄英疏「憤憤、猶煩亂也。」『後漢書』列伝五九「何進」「讓等詰進曰。天下憤憤、亦非獨我曹罪也。」李賢注「説文曰、憤憤、亂也。」

(4)「誠意一節、正是聖凡分別關隘去處」本卷八四条「大學物格知至處、便是凡聖之關。」八七条「知至意誠、是凡聖界分關隘。」「去處」は「ところ」「場所」の意。卷一四、六条に既出。

(5)「滔滔」流れて返ることのないさま。『論語』微子「滔滔者、天下皆是也。」(朱註「滔滔、流而不反之意。」)。卷一四、一五四条に既出。

(6)「崎嶇反側」険しく不安定な様。「崎嶇」は険しい、難解、晦澁。『語類』卷九、七〇条、甘節録(Ⅰ 15)「道理有面前底道理、平易自在説出來底。便説、説得出來崎嶇底、便不好。」また卷一四、三九条「問大學。曰。看聖賢説話、所謂坦然若大路然。緣後來人説得崎嶇、所以聖賢意思難見。」「は不安、不安定な様。」

(7)「小人之歸」『韓昌黎文集』卷一二、五箴「游箴」「余少之時、將求多能。蚤夜以孜孜。余今之時既飽而嬉、蚤夜以無為。嗚呼。余乎其無知乎。君子之棄而小人之歸乎。」

(8)「尋常只將知至之至作盡字説」『大学章句』経、朱注「知至者、吾心之所知無不盡也。」本卷七〇条「知至、則心之知識無不盡。」七七条「鄭仲履問。某觀大學知至、見得是乾知道理。曰。何用説乾知。只理會自家知底無不盡、便了。」「將」は文言の「以」と同じで「くを」。

(9)「近來看得合作切至之至」本卷、七五条「致知未至、譬如一箇

89条

鐵片、亦割得物事、只是不如磨得芒刃十分利了、一錘便破。若知得切了、事事物物至面前、莫不迎刃而解。」「語類」卷一八、六条、黄卓録(Ⅱ39)「致知、是推極吾之知識、無不切至。切字亦未精、只是一箇盡字底道理。見得盡、方是真實。如言喫酒解醉、喫飯解飽、毒藥解殺人。須是喫酒、方見得解醉人。喫飯、方見得解飽人。不曾喫底、見人說道是解醉解飽、他也是解醉解飽、只是見得不親切。見得親切時、須是如伊川所謂曾經虎傷者一般。」「合」は「すべきである。」「切至」は懇切である。切実である。

(10)「如程先生所謂真知者」『河南程氏遺書』卷二上、二四条(16)「真知與常知異。常見一田夫、曾被虎傷、有人說虎傷人、衆莫不驚、獨田夫色動異於衆。若虎能傷人、雖三尺童子、莫不知之。然未嘗真知。真知須如田夫乃是。故人知不善而猶為不善、是亦未嘗真知。若真知、決不為矣。」

〔校勘〕  
○「過此一關」「又曰過此一關」「過得此關」万曆本と和刻本は三出する「關」のうち、前二者は「關」に作り、後二者は「関」に作る。  
○「方子」朝鮮古写本は、この下に「関祖録上一條同 以下論誠意」の小注有り。

〔参考〕

本条は『語類』卷一一七、一〇条、訓周謨(Ⅶ389～10)「問。未知學問、知有人欲、不知有天理。」云々の後半にも収録されている。本条との文字の異同は以下の二点である。(一)「若能誠意、則是透得此關、透此關後」を卷一一七は「若能誠意、則是透得此關後」に作る。(二)「近來看得合作切至之至」の「合」を卷一一七は「合是」に作る。

〔訳〕  
誠意を論じて言われた。「この一関門を通過して、それでこそ人であって、賊ではないのだ。」又言われた。「この一関門を通過して、それでこそ(その先へと)進んでいけるのだ。」(原注)「一本に云う。この一関門を通過して、それでこそ道理も堅固なものとなるのだ。」  
方子

〔注〕  
(1)「過此一關、方是人、不是賊。」本卷八五条「誠意是人鬼關。」ここでの「賊」は「ひとでなし」程の意か。『春秋左氏伝』昭公十四年、伝「殺人不忌為賊。」  
(2)「方是人」「方會進」「方牢固」「方是…」「方…」は「はじめて」「そ

れでこそ」「方是：」は卷一四、一六条に既出、「方：」は卷一四、一四三条に既出。

90条

鍾唐傑問意識。曰。意識只是要情願做工夫。若非情願、亦強不得。未過此一關、猶有七分是小人。蓋卿

〔校勘〕

○諸本異同なし。

〔訳〕

鍾唐傑が「意が誠になる」について尋ねた。先生「意が誠になるというのは、実践工夫を行いたいと心から願うようになることだ。もし（当人が）心から願うのでなければ、（他人が）強いることはやはりできないのだ。この一関門を通過しないうちは、その人物は七割方はまだ小人なのだ。 龔蓋卿録

〔注〕

- (1) 「鍾唐傑」『朱子実紀』卷八、朱子門人「鍾唐傑、袁州萍鄉人。』『考亭淵源録』卷二〇「鍾唐傑、宜春萍陽人。』『朱子門人』頁331。
- (2) 「情願」願望。願う。心から願望する。『語類』卷二二、四四条、周明作録（II 516）「禮之用、和為貴。見君父自然用嚴敬、皆是人情

願、非由抑勒矯拂、是人心固有之同然者、不待安排、便是和。才出勉強、便不是和。』『語類』卷二二、五九条、葉賀孫録（II 518）「臣子入朝、自然極其恭敬、也自和。這不待勉強如此、是他情願如此、便自和。君君臣臣、父父子子、兄兄弟弟、夫婦朋友各得其位、自然和。』『語類』卷三五、一〇三条、輔廣録（III 931）「興於詩、立於禮、成於樂。聖人做出這一件事來、使學者聞之、自然歡喜、情願上這一條路去。」

(3) 「七分是小人」七割方は小人である。君子三分に小人七分の意。『語類』卷三四、一八条、呂燾録（III 859）「遷善便是有六七分是、二三分不是。自家却見得那二三分是處、即遷而就之、要教十分是著。」

91条

意識心正、過得此關、義理方穩。不然、七分是小人在。又曰。意不誠底、是私過。心不正底、是公過。方子

〔校勘〕

○諸本異同なし

〔訳〕

「意は誠に心は正し」というこの関門を通過すれば、義理ははじめて（その人にとって）穩実なものとなる。さもなければ、（その人は）七割方は小人である。又言われた。「意が誠でないのは、私意に根ざ

す過ちである。心が正しくないのは、公における過ちである。」李方子録

〔注〕

(1) 「七分是小人在」前条参照。「在」は文言の「焉」と同じで断定の語氣を表す句末の助詞。卷一四、一五条に既出。

(2) 「意不誠底は私過、心不正底は公過」『語類』卷一六、一三一条、甘節録(II 33)「誠意、是眞實好善惡惡、無夾雜。又曰。意不誠、是私意上錯了。心不正、是公道上錯了。」「語類」卷一九、二三条、訓陳芝(VII 275)「又曰。人之心不正、只是好惡昏了他。孟子言。平旦之氣、其好惡與人相近者幾希。蓋平旦之時、得夜間息得許久、其心便明、則好惡公。好則人之所當好、惡則人之所當惡、而無私意於其間。過此時、則喜怒哀樂紛擾於前、則必有以動其氣、動其氣則必動其心。是枯之反覆、而夜不能存矣。雖得夜間稍息、而此心不能自明、是終不能善也。」

92条

深自省察以致其知、痛加剪落以誠其意。 升卿 致知誠意

〔校勘〕

○諸本異同なし。

〔訳〕

深く省察してその知を致し、厳しく(悪を)払拭してその意を誠にする。 黄升卿 致知誠意

〔注〕

(1) 「深自省察」「深自」は、深く。

(2) 「痛加」厳しく加える。『語類』卷四、四一条、沈僩録(IG)「故上知生知之資、是氣清明純粹、而無一毫昏濁、所以生知安行、不待學而能、如堯舜是也。其次則亞於生知、必學而後知、必行而後至。又其次者、資稟既偏、又有所蔽、須是痛加工夫、人一己百、人十己千、然後方能及亞於生知者。及進而不已、則成功一也。」「語類」卷六三、八三条、輔廣録(IV 1538)「廣云。到此已兩月、蒙先生教誨、不一而足。近來靜坐時、收斂得心意稍定、讀書時亦覺頗有意味。但廣老矣、望先生痛加教誨。」「禪林僧宝伝」卷二九「雲居仏印元禪師」  
「願痛加磨勵、使還舊觀。」

(3) 「剪落」「剪落」は取り除く、取り払う、払拭する。八五条に「誠意是善惡關。」、八六条に「誠意乃惡與善之關。」とあり、また『大學章句』経、朱注に「誠、實也。意者、心之所發也。實其心之所發、欲其一於善而無自欺也。」とあるように、誠意とは意中の悪を払拭して純善ならしめることである。

93条

知與意皆出於心。知是知覺處、意是發念處。 閔祖

〔校勘〕

○諸本異同なし。

〔訳〕

知と意はいずれも心から出てくるものである。知とは知覚するところであり、意とは念慮が発したところである。 李閔祖録

〔注〕

(1)「知與意皆出於心」心と意の関係については『大学章句』経、朱注「意者、心之所發也」を参照。心と知の関係については以下を参照。『語類』卷五、二四條、陳淳録(1)「問。心之發處是氣否。曰。也只是知覺。」

94条

致知、無毫釐之不盡。守其所止、無須臾之或離。致知、如一事只知得三分、這三分知得者是真實、那七分不知者是虛偽。為善、須十分知善之可好、若知得九分、而一分未盡、只此一分未盡、便是鶴突苟且之根。少間說便為惡也不妨、便是意不誠。所以貴致知、窮到極處謂之致。或

得於小而失於大、或得於始而失於終、或得於此而失於彼、或得於己而失於人、極有深淺。惟致知、則無一事之不盡、無一物之不知。以心驗之、以身體之。逐一理會過、方堅實。 憫

〔校勘〕

○諸本異同なし。

〔訳〕

知を致すには、ほんのわずかでも尽くさぬところがないようにする。その止まるところを守るには、ほんのわずかな間でも（そこから）離れることがないようにする。知を致す場合、ある一事について、ただその三割のみを知り得たとすれば、その知り得た三割は真実だが、残り七割の知らないところは虚偽である。善を為すには、善の好むべきことを是非とも十分に知るべきなのであって、もしも九割がたは知つて、まだ尽くしていないところが一割有るのだとすれば、ただその尽くしていない一割が、曖昧やおざなりを招く病根となるのだ。そしてやがては、悪を為したって構わない、と言うようになるのであって、それは取りも直さず意が誠ではないのである。それ故に致知を重視するのであって、極処まで窮めたることを、致と言うのである。小は得ても大は失う、始めは得ても終わりは失う、此は得ても彼は失う、己は得ても人は失う等、（知るといふことのあり方には）極めて深淺がある。ただ知を致してこそ、一事として尽くさぬものはなく、一物として知らぬものはないのである。「心によって検証し、身によって体



認する。」そうして逐一取り組んでいってこそ、はじめて（知は）堅  
実なものとなるのだ。 沈憫録

〔注〕

(1)「致知、無毫釐之不盡」『大学章句』経、朱注「致、推極也。知、  
猶識也。推極吾之知識、欲其所知無不盡也。」同上「知至者、吾心  
之所知無不盡也。」

(2)「守其所止」致知と知止の関係については以下を参照。『大学章  
句』経、朱注「物格知至、則知所止矣。意識以下、則皆得所止之序也。」

卷一五、一三九条「格物致知、是求知其所止。誠意正心修身齊家治  
國平天下、是求得其所止。物格知至、是知所止。意識正心修身齊家治  
國治天下平、是得其所止。」

(3)「鵲突」 「糊塗」の音転。ほんやりしてあいまいな様。三浦國雄『朱  
子集』頁四二五。卷一四、四二条、一二四條、一四四條に既出。

(4)「苟且」 かりそめに、おざなりに、いい加減に。

(5)「少間」 しばらくして。卷一四、二七条などに既出。

(6)「便為惡不妨」 「便」は「たとえ」でも。「不妨」は構わない、  
さしつかえない。卷一四、二九条に既出。

(7)「便是意不誠」 善の好むべきことを知りながら悪を為すのは自  
らを欺くことであり、不誠意である。『大学章句』伝六章「所謂誠  
其意者、毋自欺也。如惡惡臭、如好好色、此之謂自謙。故君子必慎  
其獨也。」

(8)「以心驗之、以身體之」 宋の楊時（号龜山）の語。『龜山集』卷

一二、「語録」語仲素曰。某嘗有數句教學者讀書之法云。以身體之、  
以心驗之、從容默會於幽閒靜一之中、超然自得於書言象意之表。此  
蓋某所為者如此。『龜山集』卷二七、雜著「勸學」志學之士、當知  
天下無不可為之理、無不可見之道。思之宜深、無使心支而易昏。守  
之宜篤、無使力淺而易奪。要當以身體之、以心驗之、則天地之心日  
陳露於目前、而古人之大體已在我矣。不然是未免苟卿所謂口耳之學、  
非所望於吾友也。』『語類』卷一一三、一三條、訓廖德明(Ⅶ 274)「問。  
龜山之學云、以身體之、以心驗之、從容自得於燕閒靜一之中。李先  
生學於龜山、其源流是如此。曰。龜山只是要閑散、然却讀書。尹和  
靖便不讀書。」

95条

説為學次第、曰。本末精粗、雖有先後、然一齊用做去。且如致知格  
物而後誠意、不成説自家物未格、知未至、且未要誠意、須待格了知了、  
却去誠意。安有此理。聖人亦只説大綱自然底次序是如此。拈著底、須  
是逐一旋旋做將去始得。

常説田子方説文侯聽樂處、亦有病。不成只去明官、不去明音。亦須  
略去理會始得。不能明音、又安能明官。或以官為商、以角為徵、自家  
緣何知得。

且如籩豆之事、則有司存、非謂都不用理會籩豆、但比似容貌、顔色、  
辭氣為差緩耳。

又如官名、在孔子有甚緊要處。聖人一聽得郟子會、便要學。蓋聖

人之學、本末精粗、無一不備、但不可輕本而重末也。

今人間坐過了多少日子、凡事都不肯去理會。且如儀禮一節、自家立朝不曉得禮、臨事有多少利害。 雉

〔校勘〕

○「拈著底」 成化本、万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「著」を「着」に作る。

○「亦須略去理會始得」 成化本、万曆本、和刻本は「略」を「畧」に作る。

○「為差緩耳」 成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「耳」を「爾」に作る。

○「蓋聖人之學」 万曆本、和刻本は「蓋」を「盍」に作る。

○「不可輕本而重末也」 成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「也」を「耳」に作る。

○「今人間坐」 成化本、万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「間」を「閑」に作る。

〔訳〕

為学の順序次第について言われた。「本末精粗に依じて先後は有るとはいえ、しかしながら同時にやっっていくべきなのだ。たとえば致知格物して然る後に誠意を行うわけだが、まさか「自分はまだ物に格つておらず知が至っていないから、とりあえずはまだ意を誠にすることはないでにおいて、格りおわり知りおわるのを待つてから、誠意に取

り組むことにしよう。」等と言ったりするだろうか。どうしてそんな道理が有ろうか。聖人もただ、大綱の自然な次序がこのようなものであることを述べたに過ぎないのだ。自分の取り上げたものは、是非とも逐一徐々にやっけていってこそよいのだ。

私はいつも言うのだが、文侯が音楽を聴くことに関して田子方が述べた言葉には、やはり問題がある。まさか、ただ官僚のことだけに通曉して音楽のことには通曉しない、などということがあろうか。音楽のことにだつてやはり、是非とも少しはたしなんでおいてこそよいのだ。音楽のことに通曉することができなければ、どうして官僚のことに通曉することができよう。宮を商に間違えたり、角をち徴に間違えたりする者がいたとしても、自分は何によってそのことを知り得ようか。

たとえば「籩豆に関する事柄には、(それを専門の職掌とする)有司が存在する」と言う場合でも、籩豆の事は全然取り組まなくてもよいと言っているのではなく、ただ、容貌・顔色・辞氣の三事に比べれば、やや重要度が低い、と言っているに過ぎないのだ。

また官名にしても、孔子にとって一体何ほどの重要性が有ったろうか。にもかかわらず聖人(＝孔子)は、(官名については)郷子が詳しいと聞きつけるや、すぐに学びに行こうとしたのだ。思うに聖人の学問には本来、本末精粗、一つとして備わらないものはないのであつて、ただ本を軽んじて末を重んずるようなことがあつてはならない、というまでのことだ。

今の人は、漫然と坐つては多くの日々を過ごしながら、何事にも全

く敢えて取り組もうとはしない。たとえば儀礼上のこまごまとした一節についても、自身が官僚として朝廷に仕えながら、礼に通曉していなかったとしたら、いざ事に臨んで、(そのことが) いかにも多くの弊害をもたらすことであろう。 吳雉録

〔注〕

(1) 「本末精粗、雖有先後」 『大学章句』 經「物有本末、事有終始、知所先後、則近道矣。」

(2) 「一齊」 一齊に、同時に。本卷二二条に既出。

(3) 「不成」 まさか…ではあるまい。卷一四、二四条に既出。

(4) 「須待格了知了、却去誠意」 「去…」は「…しようとする」三浦國雄『朱子語類抄』(頁五〇) は「心理的な方向をあらわす助字」とする。

(5) 「拈著底」 自分の取り上げたものを。「拈」は「つまむ」「取り上げる」『語類』卷五、五三条、程端蒙録(Ⅰ89)「心・性・理、拈著一箇、則都貫穿、惟觀其所指處輕重如何。」

(6) 「須是逐一旋旋做將去始得」 「旋旋」は徐々に、少しずつ。本卷二二条に既出。「做將去」は行っていく。「…將去」は「…していく」の意。「須(是) …始得」は「ぜひとも…して、いそいそ」「ぜひとも…すべきである」卷一四、二二条に既出。

(7) 「田子方說文侯聽樂處」 『戰國策』卷二二、魏策「魏文侯與田子方飲酒而稱樂。文侯曰。鍾聲不比乎。左高。田子方笑。文侯曰。奚笑。子方曰。臣聞之、君明則樂官、不明則樂音。今君審於聲、臣恐君之

聾於官也。文侯曰。善、敬聞命。』『資治通鑑』卷一、周紀、殷烈王二十三年(前四〇三)「文侯與田子方飲、文侯曰。鍾聲不比乎。左高。田子方笑。文侯曰。何笑。子方曰。臣聞之、君明樂官、不明樂音、今君審於音、臣恐其聾於官也。文侯曰。善。』(胡三省注)「不比、言不和也。…明樂官、知其才不才。明樂音、知其和不利。』『戰國策』

は「君明らかなれば則ち官を樂しみ、明らかならざれば則ち音を樂しむ」とするが、『資治通鑑』は胡三省注によれば「君は樂官に明らかにして、樂音に明らかならず」と読む。そして朱熹は後者に從っている。語類卷三五、四七条、黃義剛録(Ⅲ 518)「田子方謂魏文侯曰。君明樂官、不明樂音。此說固好。但某思之、人君若不曉得那樂、却如何知得那人可任不可任。這也須曉得、方解去任那人、方不被他謾。如籩豆之類、若不曉、如何解任那有司。若籩裏盛有汁底物事、豆裏盛乾底物事、自是不曉、也須著曉始得、但所重者是上面三事耳。』『語類』卷一一八、四八条、訓周明作(Ⅶ 320)「又如田子方說君明樂官、不明樂音、他說得不是。若不曉得音、如何明得官。次第被他易官為商也得。所以中庸先說箇博學之、孟子曰。博學而詳說之。且看孔子雖曰生知、事去問人、若問禮問喪於老聃之類甚多。只如官名不曉得、莫也無害。聖人亦汲汲去問鄰子。蓋是我不知底、須是去問人始得。」なお『語類』卷一三五、三四条、楊道夫録(Ⅷ 324)にも『資治通鑑』とほぼ同文の引用が見られる。

(8) 「以宮為商、以角為徵」 きゅう宮しよう商かく角ち微う羽の五音階(五音)に因る議論。『孟子』「離婁」上「孟子曰。離婁之明、公輸子之巧、不以規矩、不能成方員。師曠之聰、不以六律、不能正

五音。」趙岐注「五音、宮商角徵羽也。」

96条

(9)「且如籩豆之事、則有司存」『論語』「泰伯」「曾子有疾、孟敬子

問之。曾子曰。鳥之將死、其鳴也哀。人之將死、其言也善。君子

所貴乎道者三。動容貌、斯遠暴慢矣。正顏色、斯近信矣。出辭氣、

斯遠鄙倍矣。籩豆之事、則有司存。」朱注「貴、猶重也。容貌、舉

一身而言。暴、粗厲也。慢、放肆也。信、實也。正顏色而近信、則

非色莊也。辭、言語。氣、聲氣也。鄙、凡陋也。倍、與背同、謂背

理也。籩、竹豆。豆、木豆。言道雖無所不在、然君子所重者、在此

三事而已。是皆脩身之要、為政之本、學者所當操存省察、而不可有

造次顛沛之違者也。若夫籩豆之事、器數之末、道之全體固無不該、

然其分則有司之守、而非君子之所重矣。」「程子曰。動容貌、舉一

身而言也。周旋中禮、暴慢斯遠矣。正顏色則不安、斯近信矣。出辭氣、

正由中出、斯遠鄙倍。三者正身而不外求、故曰籩豆之事則有司存。」

(10)「但比似容貌、顔色、辭氣為差緩耳」「似」は「於」と同じ。

(11)「郷子」『春秋左氏伝』昭公十七年「秋、郷子來朝、公与之宴。

昭子問焉、曰。少皞氏鳥名官、何故也。郷子曰。吾祖也。我知之。

…仲尼聞之、見於郷子而学之。既而告人曰。吾聞之、天子失官、学

在四夷、猶信。」

(12)「過了多少日子」「多少」は「いかばかり」現代語の「多麼」。

中国語の「多少」は邦語のそれとは異なり、むしろ多い方を思わせる。

田中謙二、頁一〇九。「日子」は日、日々。

(13)「有多少利害」「利害」は弊害。

呉仁甫問。誠意在致知格物後、如何。曰。源頭只在致知。知至之後、

如從上面放水來、已自迅流湍決、只是臨時又要略撥剔、莫令壅滯爾。

銖

〔校勘〕

○「如從上面放水來」万曆本、呂留良本、和刻本は「上面」を「面上」

に作る。底本の校注に「面上、質疑倒、據陳本乙」とある。賀瑞麟「朱

子語類記疑」には「面上二字疑倒」とある。賀瑞麟校刻劉氏伝経堂叢

書本の底本は呂留良本であり、賀瑞麟は呂本における「面上」を「上面」

に改めたのである。なお底本校注にいう陳本とは成化九年陳煒刻本、

即ち成化本のことを指す。

○「只是臨時」万曆本、劉氏伝経堂叢書本、和刻本は「只」を「以」

に作る。底本の校注に「據陳本改」とある。

○「又要略撥剔」成化本、万曆本、和刻本は「略略」を「畧畧」

に作る。

〔訳〕

呉仁甫がお尋ねした。「誠意が致知格物の後にくるのは、どうした

わけでしょう。」先生「根本は専ら致知にあるのだ。知至るの後は、

上から水を流すようなもので、急流が早瀬を決壊してしまえば、

あとはただ時に臨んでいささか（土砂を）えぐり出してやるよう

にして、(水流が)堰き止められないようにするのみである。 銖

〔注〕

(1)「呉仁甫」『考亭淵源録』卷二三、考亭門人無記述文字者は、「呉仁父」の名前のみを掲載している。『朱子門人』頁八九「呉仁父」

参照。

(2)「誠意在致知格物後」本卷八八条参照。

(3)「源頭」 根源、根本。

(4)「已自迅流湍決」「已自」は既に。「迅流」は急流。「湍決」は早瀬が決壊して一方向に流れていくこと。『孟子』「告子」上「告子曰。性、猶湍水也、決諸東方則東流、決諸西方則西流。人性之無分於善不善也、猶水之無分於東西也。」

(5)「略略撥剔」「略略」はいささか、少しばかり。「撥剔」は摘抉する。えぐり出す。

97条

問。誠意莫只是意之所發、制之於初否。曰。若說制、便不得。須是先致知、格物、方始得。人莫不有知、但不能致其知耳。致其知者、自裏面看出、推到無窮盡處、自外面看入來、推到無去處、方始得了、意方可誠。致知、格物は源頭上工夫。看來知至便自心正、不用誠意兩字也得。然無此又不得、譬如過水相似、無橋則過不得。意有未誠、也須著力、不應道知已至、不用力。

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷十五は本条を収録しない。

○「源頭」成化本、万曆本、朝鮮整版本、和刻本は「源」を「原」に作る。

○「也須著力」万曆本、和刻本は「著」を「着」に作る。

〔訳〕

問うた。「誠意というのはただ、意が発する当初に、これを制御することなのでしょうか。」答えた。「制限するというならそれは間違っている。必ずやまず知を致し物に至り、初めて正しい手順になるのだ。人に知を備えていない者はいない。ただその知を致すことができなただけだ。知を致すのは、中より(理を)見出し、極限まで推し進めていき、また外より(理を)見つけていき、突き当たりまで推し進めていくことなのであり、それで初めて正しいやり方なのであり、初めて意を誠にすることができるのだ。致知、格物はもともと根源的な修養だ。思うに知が至ったら心が自ずと正しくなるのであり、「誠意」の二文字がなくても大丈夫のはず。しかしこれはなくてはならず、川を渡ると同じで、橋がなければ誰も渡れない。意がまだ誠になつていない所にも力を入れなければならないのであり、知が至ったら力を入れなくても良いというべきではない。」記録者名欠

〔注〕

(1) 「意之所發、制之於初」「制」とは制御する、コントロールするとの意。『語類』卷一七、四二条、輔廣録(Ⅱ 38)「或問。宰萬物、是主宰之宰、宰制之宰。曰。主便是宰、宰便是制。」

(2) 「須是先致知格物、方始得」「須是…方始得」は「須(是)…始得」と同じで、「ぜひとも…して、それでこそよい。」「ぜひとも…せねばならぬ。」卷一四、一二条および卷一五、六七条を参照。「方始」は「初めて」。

(3) 「致其知者、自裏面看出、推到無窮盡處、自外面看入來、推到無去處」朱子が補った『大学』の闕文(『大学章句』伝五章)に「是以大學始教、必使學者即凡天下之物、莫不因其已知之理而益窮之、以求至乎其極。至於用力之久、而一旦豁然貫通焉、則衆物之表裏精粗無不到、而吾心之全體大用無不明矣。」とあり、物事の表面と裏面、精微な所と大雑把な所にある理をすべて把握し尽くすことを説いている。さらに『大学或問』に「昔者聖人蓋有憂之、是以於其始教、為之小學；及其進乎大學、則又使之即夫事物之中、因其所知之理、推而究之、以各造乎其極、則吾之知識亦得以周遍精切而無不盡也；必其表裏精粗無所不盡、而又益推其類以通之、至於一日脫然而貫通焉」とあり、すでに把握している「理」から「推」して行くことを強調している。

(4) 「致知、格物は源頭上工夫」本卷九六条を参照。

(5) 「看來」見たところでは、思うに。

98条

知若至、則意無不誠。若知之至、欲著此物亦留不住、東西南北中央皆著不得。若是不誠之人、亦不肯盡去、亦要留些子在。 泳 知至、意誠

〔校勘〕

○「欲著此物」成化本、万曆本、和刻本は「著」を「着」に作る。朝鮮古写本は「雖欲着此物」に作る。

○「皆著不得」成化本、万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「著」を「着」に作る。

○「知至、意誠」朝鮮古写本にこの四文字なし。

〔訳〕

知が至ったら、意が誠にならないようなことはありえない。もし知が至ったら、このようなもの(私欲)を(心に)附着させようとしても留めることができず、(心の)東、西、南、北、中央のいずれにも附着させることができない。もし誠でない人間ならば、(これを)悉く除去しようともせず、(私欲の)幾分かを引き留めようともする。 湯泳録 本条からは知至、意誠について

〔注〕

(1) 「著」「着」と同じで、つける、くつつける。

(2)「留不住」しつかりとある場所に留まらせることができない。「住」は前の動作がしつかりと確実に遂行されることを示す。

(3)「亦要留些子在」「些子」は「いささか」、「すこし」の意。「在」は断定の語気を示す句末の助字。卷一四、一五条に既出。

99条

問。知至到意識之間、意自不聯屬。須是別識得天理人欲分明、盡去人欲、全是天理、方誠。曰。固是。這事不易言。須是格物精熟、方到此。居常無事、天理實然、有纖毫私欲、便能識破他、自來點檢慣了。譬有賊來、便識得、便捉得他。不曾用工底、與賊同眠同食也不知。大雅

〔校勘〕

○「纖毫」成化本は「毫」を「豪」に作る。

〔訳〕

問うた。「知至」と「意識」との間は、その趣旨が（自動的に）連続しているわけではありません。必ず天理と人欲とをはっきりと弁別し、人欲をすべて除去し、天理しか残らないようにして初めて意が誠になるのです。答えた。「その通りだ。この事柄は簡単に説明できない。必ずや格物に精通し熟練してから、はじめてこのような境地に到達できるのだ。日常生活でなにこともない時に、天理の存在をありありと実感し、ほんの少しでも私欲が生まれたら、すぐこれを見破ることが

できるのは、普段から自らの心を細かくチェックすることに慣れていくからだ。たとえば賊がやって来たら、すぐこれを見破り、すぐ捕まえることができるようなものだ。（普段から）修養の努力を重ねていない人は、賊と一緒に食事をし、一緒に寝てもまったく気づかない。」  
余大雅録

〔注〕

(1)「意自不聯屬」「知至」と「意識」の文意が自動的に連続連動するわけではない。知が至ることによって、自動的に「意識」という地歩に到達できるわけではないから、知が至った後にもしも人欲を去る工夫を怠れば、そこで工夫が断絶してしまう。『朱子語類考文解義』「謂知既至而又須用去人欲工夫、然後方可誠意。是兩節自連。若曰、知才至則意便誠、是不相連屬也。」なお意の聯屬に関しては以下を参照。卷一四、二九条「讀大學、且逐段捫。看這段時、似得無後面底。看第二段、却思量前段、令文意聯屬、却不妨。」

(2)「居常」ふだん。日常。『後漢書』「崔瑗伝」「瑗愛士好賓客、盛修肴膳、單極滋味、不問餘產、居常蔬食菜羹而已。」

(3)「天理實然」「實然」は確実に存在すること。その存在がありありと実感できること。『語類』卷六三、一三〇条、陳淳録(IV 150)問。南軒、鬼神、一言以蔽之、誠而已。此語如何。曰。誠是實然之理。鬼神亦只是實理。若無這理、則便無鬼神、無萬物、都無所該載了。なお『朱子語類考文解義』には「天理實然、謂天理真實而無偽」とある。

(4)「有纖毫私欲、便能識破他」「便」は「すぐに」「たちどころに」の意。後文「譬有賊來、便識得、便捉得他」の二つの「便」も同義。

(5)「自來」かねてから、ずっと前から。

(6)「點檢」一つ一つあたってみて調べる。こまかに調べる。ここ

では、すでに体得している道理を逐一確認するとの意。『語類』巻九、

三七条、葉賀孫録 (I 153 - 154)「學者須常存此心、漸將義理只管

去灌溉。若卒乍未有進、即且把見成在底道理將去看認。認來認去、

更莫放着、便只是自家底。緣這道理、不是外來物事、只是自家本來

合有底、只是常常要點檢。如人一家中、合有許多家計、也須常點認過。」

(7)「慣了」ある行為を繰り返すことによりそれを行なうことに慣れて指す。

(8)「譬有賊來」誠意を賊を追い払う比喻で説明するものとしては、本卷八九条、一一五条等を参照。

100条

周震亨問知至、意識、云。有知其如此、而行又不如此者、是如何。曰。此只是知之未至。問。必待行之皆是、而後驗其知至歟。曰。不必如此說。而今說與公是知之未至、公不信、且去就格物、窮理上做工夫。窮來窮去、末後自家真箇見得此理是善與是惡、自心甘意肯不去做、此方是意識。若猶有一毫疑貳底心、便是知未至、意未誠、久後依舊去做。然學者未能使得會恁地、須且致其知、工夫積累、方會知至。

〔校勘〕

○「真箇見得」朝鮮古写本は「箇」を「个」に作る。

○「是善與是惡」成化本は「與」を「哉」に作る。朝鮮古写本は「與」を「彼」に作る。

○「一毫」成化本は「毫」を「豪」に作る。

○「方會知至」成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本、和刻本はその後に小字で「雉」とあり。

〔訳〕

周震亨が「知至」、「意識」についてお尋ねして言った。「(理が) そのようであると知りながらも、そのようには行動しない人がいますが、これはどういうことなのでしょうか。」答えた。「これはただ知がまだ至っていないからだ。」問うた。「かならずや行動がすべて正しいようになってから、はじめてその知が至っていると検証できるのででしょうか。」答えた。「必ずしもこういうふうに言う必要がない。今はあなたに「知が至っていないからだ」と言ったが、もしもそれが信じられないのであれば、とりあえず格物と窮理において努力を重ねたらいいい。理をひたすら窮めた末に自らが確実に(あることが)理として善なのか、悪なのかを見通して、(悪いことを)心からしようとしないうようになったら、これこそ意が誠になったことなのだ。もしすこしでも(理を)疑うような心が残っていれば、それはつまり知が至っておらず、意がまだ誠になっていないことで、時間が経つと相変わらず(悪いことを)するようになる。しかし学ぶ者はすぐに理を見通すことができ



ないので、まずはその知を致さなければならず、修養の努力を少しづつ重ねていって、はじめてその知が至りうるのだ。」 記録者名欠

〔注〕

(1) 「周震亨」 『朱子門人』 一四〇頁。

(2) 「而今說與公」 「說與」の「與」は「〜に」。現代語の「給」と同じ。三浦國雄『朱子語類抄』頁七一。「公」は二人称。君。本卷一二条に既出。

(3) 「窮來窮去」ひたすら窮める。「〜來〜去」はひたすら〜する、存分に〜する。本卷九条に既出。

(4) 「自家真箇見得此理」 「真箇」は真に、本当に。卷一四、一六六条の「真箇是」と同じ。

(5) 「此理是善與是惡」 朱子学では、「理」自体が悪であることはあり得ないので、この一句は「理として善なのか、悪なのか」として解釈すべきであろう。朝鮮古写本が同箇所を「此理是善彼是惡」に作っているのは、まさにその明証である。よってこの一文は「理是：」を「理として…である」という意味で使う例にもなる。

(6) 「疑貳」 あれかこれかと疑う。

(7) 「依舊」 依然として。やはり。卷一四、一五八条に既出。

(8) 「然學者未能使得會恁地」 「便」は「すぐに」「たちどころに」の意。

101条

知至而后意識、須是真知了、方能誠意。知苟未至、雖欲誠意、固不得其門而入矣。惟其胸中了然、知得路徑如此、知善之當好、惡之當惡、然後自然意不得不誠、心不得不正。因指燭曰、如點一條蠟燭在中間、光明洞達、無處不照、雖欲將不好物事來、亦沒安頓處、自然著它不得。若是知未至、譬如一盞燈、用罩子蓋住、則光之所及者固可見、光之所不及處則皆黑暗無所見、雖有不好物事安頓在後面、固不得而知也。炎錄云。知既至、則意可誠。如燈在中間、纔照不及處、便有賊潛藏在彼、不可知。若四方八面都光明了、他便無著身處。

所以貴格物。如佛、老之學、它非無長處、但它只知得一路。其知之所及者、則路徑甚明、無有差錯、其知所不及處、則皆顛倒錯亂、無有是處、緣無格物工夫也。問。物未格時、意亦當誠。曰。固然。豈可說物未能格、意便不用誠。自始至終、意常要誠。如人適楚、當南其轅。豈可謂吾未能到楚、且北其轅。但知未至時、雖欲誠意、其道無由。如人夜行、雖知路從此去、但黑暗、行不得。所以要得致知。知至則道理坦然明白、安而行之。今人知未至者、也知道善之當好、惡之當惡。然臨事不如此者、只是實未曾見得。若實見得、自然行處無差。 倜

〔校勘〕

○ 「知至而后意識」 朝鮮古写本は「后」を「後」に作る。  
○ 「惟其胸中了然」 成化本、万曆本、朝鮮古写本、朝鮮整版本、和刻本は「胸」を「膺」に作る。

○「知善之當好惡之當惡」 万曆本、和刻本は「惡」をとともに「賽」に作る。

○「自然著它不得」 成化本、万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「著」を「着」に作る。

○「蓋住」 万曆本、和刻本は「蓋」を「蓋」に作る。

○「炎錄云：他便無著身處」 朝鮮古写本にこの文なし。

○「他便無著身處」 成化本、万曆本、和刻本は「著」を「着」に作る。

○「知之所及」 万曆本、呂留良本、伝経堂本、和刻本は「知之所以及」に作る。底本は成化本に拠り「以」字を削除。

○「當南其轅」 朝鮮古写本は「轅」を「輓」に作る。

○「也知道善之當好惡之當惡」 万曆本、和刻本は下の「惡」を「賽」に作る。朝鮮古写本は上の「惡」を「惡」に作る。

○「憫」 成化本にこの一字なし。他の諸本は「憫」に作る

〔訳〕

知が至ってから意が誠になるのであり、必ずや切実に知ってから、はじめて意を誠にすることができるのだ。もし知が至っていないければ、意を誠にしようとしても、そのやり方を把握できるはずがない。ただ胸の中で進むべき道はこうだとわかっていて、善の好むべきことと、悪の憎むべきことを知ってから、後に自ずと意が誠にならざるを得ず、心が正しくならざるを得ないのだ。（先生が）そこで蠟燭を指して言った。「このようなことは例えば、（部屋の）真ん中に蠟燭を灯して置いたら、その光が四面に達し、照らさないところがないようなものであ

り、たとえ良からぬものを持ちこもうとしても、置くべき場所がないので、そういう物は自ずと混入できないのだ。もし知が至っていないれば、それは灯に覆いをかぶせたようなもので、光の届いた所のものは見えるが、届いていないところは真っ黒で何も見えず、良からぬものが背後に置かれていても、それを知る由がない。

劉炎の記録はこうなっている。「知が至ったら、意を誠にすることができる。たとえば灯を（部屋の）真ん中に置いたら、少しでも照らしていないところがあれば、たとえその暗闇の中に賊が潜んでも、これを見つかる手立てがない。もし隅々まで明かりが届いたら、その悪いものはやどこにも身を隠せなくなる。」

だから格物が大事だ。仏教や道教の説は、長所が全くないわけではないが、しかしそれらは一本の道しか知らない。その知が届く範囲では、進むべき道が甚だ明らかであり、間違いないが、その知が届かない範囲では、すべてがめちゃくちゃになり、正しいところがない。これは格物の努力を欠いているからだ。」問うた。「格物がまだできていない時も、意を誠にしなければならぬのでしょうか。」答えた。「当然そうなのだ。まさか格物がまだできていないから、意を誠にしないでいいというのか。最初から最後まで、意を常に誠にしなければならぬ。たとえばある人が楚地に行こうとしたら、その轅を南に向けてなければならぬのであり、まさかまだ楚地に辿りついていないからといって、とりあえず轅を北に向けておこう、等ということが有ろうか。ただ知が至っていない時は、意を誠にしようとしても、どのような方法でやるべきなのかが分からない。これは人が真夜中に道を進もうと

するようなもので、道はここから行くとわかっていても、暗闇の中ではそれを進むことができない。だから知を致さなければならぬ。知が至つたら道理は平実明白であり、難なく道理に従って進むことができる。今の人は知が至っていないけれども、善を好むべく、悪を憎むべきことは分かっている。しかし事に臨んでそのように行動しないのは、(この道理を)確実に見通してはいないからだ。もし確実に見通したら、その行動にも自然と理に背くようなことがなくなるのだ。」沈憫録

〔注〕

(1) 「不得其門而入」『論語』「子張」「叔孫武叔語大夫於朝曰。子貢賢於仲尼。子服景伯以告子貢、子貢曰。譬之宮牆、賜之牆也及肩、窺見室家之好、夫子之牆數仞、不得其門而入、不見宗廟之美、百官之富、得其門者或寡矣、夫子之云、不亦宜乎。」朱注「不入其門、則不見其中之所有、言牆高而宮廣也。」

(2) 「點一條蠟燭」 「點」はともす。「條」は細長いものを数える時の量詞。

(3) 「將…來」 ……を持ってくる。「將」とは手に持つ意。

(4) 「安頓」 おちつく。所を得る。

(5) 「一盞」 「盞」とは、灯火に用いる量詞。

(6) 「用單子蓋住」 「單子」は、おおい、カバー、電灯などの笠。「蓋住」はすっぽりと覆う。∞条注(2)を合わせて参照。

(7) 「四方八面」 各方面、すべての方角。

(8) 「如佛、老之學」 仏老の学に対しては、工夫を欠如する、三綱

五倫を廢棄する、と言った批判が為されている。『語類』卷六三、九二条、葉賀孫録(IV 154)「佛老之學、說向高處、便無工夫。」「語類」卷一二六、二四條、葉賀孫録(VIII 301)「佛老之學、不待深辨而明。只是廢三綱五常、這一事已是極大罪名。其他更不消說。」(9) 「如人適楚、當南其轅、豈可謂吾未能到楚、且北其轅」『戰國策』「魏策」四「今王動欲成霸王、舉欲信於天下、恃王國之大、兵之精銳、而攻邯鄲以廣地尊名、王之動愈數、而離王愈遠耳、猶至楚而北行也。」「申鑑」「雜言下」「先民有言適楚而北轅者、曰。吾馬良、用多、御善。此三者益侈、其去楚亦遠矣。遵路而騁、應方而動、君子有行、行必至矣。」

(10) 「其道無由」『史記』「孝文本紀」「其少女緹縈自傷泣、乃隨其父至長安、上書曰。妾父為吏齊中、皆稱其廉平。今坐法當刑、妾傷夫死者不可復生、刑者不可復屬、雖復欲改過自新、其道無由也。妾願没入為官婢、贖父刑罪、使得自新。」

(11) 「坦然」 平らかなさま。転じて、捻くることがなく分かりやすいさま。孔安国「尚書序」「帝王之制、坦然明白。」「語類」卷一四、三九條「問大學。曰。看聖賢說話、所謂坦然若大路然。緣後來人說得崎嶇、所以聖賢意思難見。」

(12) 「安而行之」『中庸章句』二〇章「天下之達道五、所以行之者三…知仁勇三者、天下之達德也、所以行之者一也…或安而行之、或利而行之、或勉強而行之、及其成功一也。」

102条

欲知知之真不真、意之誠不誠、只看做不做如何。真箇如此做底、便是知至、意誠。 道夫

〔校勘〕

○「真箇」朝鮮古写本は「只个」に作る。

○「便是知至」朝鮮古写本は「便」を「但」に作る。

〔訳〕

もし（ある人の）知が切実であるかどうか、意が誠であるかどうかを知りたいならば、ただ（その人が）（理に沿って）行動しているかどうかを観察すればよい。確実にそのように（＝理に沿って）行動している人というのは、つまり知が至っており、意が誠なのだ。 楊道夫録

〔注〕

（1）「真箇」真に、本当に。本卷一〇〇条に既出。

103条

問知至而后意誠。曰。知則知其是非。到意誠實、則無不是、無有非、無一毫錯、此已是七八分人。然又不是今日知至、意亂發不妨、待明日

方誠。如言孔子七十而從心、不成未七十心皆不可從。只是說次第如此。白居易詩云、行年三十九、歲暮日斜時、孟子心不動、吾今其庶幾。詩人玩弄至此。 可學 璘錄別出。

〔校勘〕

○「而后」朝鮮古写本は「后」を「後」に作る。

○「一毫」成化本は「毫」を「豪」に作る。

○「璘錄別出」朝鮮古写本にこの四文字なし。

〔訳〕

「知が至って後に意が誠になる」について質問した。答えた。「知というのは事の善し悪しを知ることである。意が誠実になったら、（行動は）至る所で正しく、不適當なところがなく、少しでも間違いを犯さない。これではすでに七十から八十パーセントの（純粹な）人間である。しかしこれは、今日中に知が至ったら、意を暫くみだりに発しても大丈夫であり、明日になってから誠にすればいいのだ、というわけではない。たとえば孔子が七十になってからすべて心のままに従っているというの、まさか七十にならないとどれひとつ心のままに従ってはいけないというわけなのか。ただ知至と意誠の手順としての前後関係を言っているだけだ。白居易の詩は、「今年はずでに三十九歳、年が暮れ、日が沈んでいるのと同じように、残された寿命はほんの僅か。孟子は（四十にして）心が動かないというが、私も今、ほぼそのような境地に達しているだろう。」と言っている。詩人はここまで聖

人の教えを弄んでいるのだ。」鄭可學録 別に舒璘の記録がある

〔注〕

(1) 「七八分人」「十分」と言わないのは、「誠意」の後に来る「修身、齐家、治国、平天下」の四条目をなお成し遂げていないからか。

(2) 「意亂發不妨」「不妨」は差し支えない、構わない。卷一四、二九条に既出。

(3) 「孔子七十而從心」「論語」「為政」「子曰。吾十有五而志于學、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲、不踰矩。」ちなみに北宋以来、「從」を「縱」と読み、「七十而從心所欲、不踰矩」の一句を「七十而縱心、所欲不踰矩」というふうにして讀む慣習があったようであるが、朱子はこれを間違いついて、「論語或問」「曰。從心之從、舊讀為縱、且至心字而句絶、諸先生之說皆如此、而今獨不然、何也。曰。經之本文作從、而陸氏無別音、則舊固讀如本字爾。讀如縱者、乃近世習俗流傳之誤、而諸先生偶未察耳。以理言之、則有心於縱、亦豈聖人與天為一、從容中道之謂哉。」

(4) 「次第」 順序、手順。卷一四、三条「某要人先讀大學、以定其規模：大學一篇有等級次第、總作一處、易曉、宜先看。」

(5) 「白居易詩」「白氏長慶集」卷六「隱几」「身適忘四支、心適忘是非。既適又忘適、不知吾是誰。百體如朽木、兀然無所知。方寸如死灰、寂然無所思。今日復明日、身心忽兩遺。行年三十九、歲暮日斜時。四十心不動、吾今其庶幾。」本文の記録は「四十心不動」の一句を「孟子心不動」に作っている。

(6) 「孟子心不動」「孟子」「公孫丑」上「公孫丑問曰。夫子加齊之卿相、得行道焉、雖由此霸王不異矣、如此則動心否乎。孟子曰。否、我四十不動心。」朱注「四十疆仕、君子道明德立之時、孔子四十而不惑、亦不動心之謂。」

(7) 「璘錄別出」舒璘の記録はつまり次の一〇四条。

104 条

舜功問、致知誠意是如何先後。曰、此是當初一發同時做底工夫、及到成時、知至而后意誠耳。不是方其致知、則脫空妄語、猖狂妄行、及到誠意、方始旋收拾也。孔子三十而立、亦豈三十歲正月初一日乃立乎。白樂天有詩。吾年三十九、歲暮日斜時、孟子心不動、吾今其庶幾。此詩人滑稽耳。璘

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一五不載。

○「當初一發同時做底工夫」成化本作「較」。

○「知至而后意誠耳」朝鮮整版本無「后」字。同書卷末「考異」「而意而下一有后。」

○「璘」成化本、萬曆本作「隣」、萬曆本「隣」字偏旁之間頗有空隙而不整、或和刻本校者見之疑嫌、乃改作「璘」、可知、雖和刻本覆刻萬曆本、而不必都據萬曆本字画。

〔訳〕

舜功が質問した。「致知と誠意の先後はどのような先後関係にあるのでしょうか。」先生がおっしゃった。「この二つは最初はいっせいになされる同時の工夫であって、それが成就された時には、知が至ってそのあとで意が誠になるということにすぎない。致知の段階ではなかみのない、いいかげんなことを口走り、好き勝手にいいかげんな行いをしておいて、誠意の段階になってはじめてあわててとりつくろえばよいというものではない。孔子は「三十にして立」ったが、これも三十歳となった正月一日になってはじめて立ったというわけではあるまい。白楽天には「吾れ年三十九、歳暮れ日斜めなる時、孟子心動かず、吾れ今其れ庶幾からん」という詩があるが、これは詩人の口からのでまかせにすぎない。」 藤隣録

〔注〕

- (1) 「舜功」 符叙、字舜功。『朱子門人』一三五頁。ただ、卷二二に「周舜功」が見えるので、その可能性もある。
- (2) 「一發」 いっせいに。『宣和遺事』前集「(天子) 道罷、武士一發向前。」『字海便覧』は「イツシヨニ」とふりがなを振っている。
- (3) 「脱空」 着実性を欠く。杜撰、でたらめ。『宋元語言詞典』(八三一頁) (1) 不老实、虚誕、詐偽。(2) 虚空、没有着落。「脱活乾漆像などのなかみのない外郭だけの仏像などを「脱空像」と言う。所謂「はりばて」。後になかみのないこと一般に用いられるようになる。『朱文公文集』卷五五「答劉定夫」其一「下稍説得張皇、都無收拾、

只是一場大脱空、直是可惡。」『語類』にもしばしば見られ、「着実」との対比で使われることが注意される。『語類』卷二三、一〇三条、楊道夫録(Ⅱ 35)「若説聖人全無事乎學、只脱空説、也不得。」『語類』卷五八、一九条、潘履孫録(Ⅳ 138)「若是不著實、只是脱空。今人有一等杜撰學問、皆是脱空狂妄、不濟一錢事。」『語類』卷六四、二三条、葉賀孫録(Ⅳ 1563)「或問。言前定則不躓。曰。句句著實、不脱空也。」『語類』卷六四、九〇条、甘節録(Ⅳ 1578)「誠者、物之終始。來處是誠、去處亦是誠、誠則有物、不誠則無物。且如而今對人説話、若句句説實、皆自心中流出、這便是有物。若是脱空誑誕、不説實話、雖有兩人相對説話、如無物也。」

- (4) 「猖狂」 言葉は『莊子』に基づき、いろいろなニュアンスで使われるが、ここは「好き勝手な行動、常軌を逸した行動」。「浮遊不知所求、猖狂不知所往。」(『莊子』「在宥」)
- (5) 「旋」 その時になって。あわてて。三浦『朱子語類抄』(398) 参照。

- (6) 「三十而立」 『論語』學而「子曰、吾十有五而志於學、三十而立。」
- (7) 「白楽天云々」 前条注(5) 参照。
- (8) 「滑稽」 口からのでまかせ。『史記』滑稽列伝、司馬貞素隱「滑、亂也。稽、同也。言辨捷之人、言非若是、說是若非、言能亂異同也。」なお、『語類』の以下の記録を参照。卷一四〇、三二条、李方子録(Ⅷ 338)「行年三十九、歳暮日斜時、孟子心不動、吾今其庶幾。此樂天以文滑稽也。然猶雅馴、非若今之作者村裏雜劇也。」

學者到知至意誠、便如高祖之關中、光武之河内。 芝

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一五不載。

〔訳〕

学ぶ者が「知至り意誠なり」という状態に到るのは、高祖が関中にあり、光武帝が河内にあるようなものである。 陳芝録

〔注〕

(1)「學者云々」本卷八五条の「致知誠意が一つの関門であつて、そこを制すればあとはやすやすと成る」とされる発言を参照。

(2)「高祖云々」關中(陝西省)と河内(河南省の黄河以北)は前漢高祖と後漢光武帝がそれぞれ天下を平定した根拠地。以下の荀彧の発言参照。『後漢紀』卷二八「荀彧曰、昔高祖保關中、光武據河内、皆深根固本以制天下。進可以勝敵、退足以堅守、雖有困敗、而終濟大業。」なおこの発言は『資治通鑑』(卷六一、獻帝興平二年閏五月)にも引用され、人口に膾炙したものと思われる。

問、知至而后意誠、故天下之理、反求諸身、實有於此、似從外去討得來云云、曰、仁義禮智、非由外鑠我也、我固有之也。弗思耳矣。(原注・厲聲言弗思二字)又笑曰、某常說、人有兩箇兒子。一箇在家一箇在外去幹家事。其父却說道在家底是自家兒子、在外底不是。 節

〔校勘〕

○「云云」朝鮮古写本無、却有「先生問節曰。如何是外、如何是内。節答曰。致知格物是去外討、然后方有諸己、是去外討得入來。曰。是先有此理後自家不知、是知得後方有此理。節無以答」而接「又笑曰」。

○「厲聲言弗思二字」朝鮮古写本無原注。

○「人有兩箇兒子」「箇」朝鮮古写本皆作「个」。

○「去幹家事」「去」朝鮮古写本作「夫」。

〔訳〕

質問した。「知至りて后意誠」なので、天下の理というものは、「反りて諸を身に求」めれば、まさにこの我が身に備わっています。言うなれば外から探し求めるようなものです云々。」先生がおっしゃった。「仁義礼知は、外由り我を鑠するに非ざるなり。我固より之を有するなり。思はざるのみ」だ。(先生はこの「思わざる」の二文字をきつい口調で発言された。)さらに笑っておっしゃった。わたしはつねづね言っている。ある人に二人の子供があつて、一人は家において、

一人は家から出ているが家の維持には協力している。ところが父親はといえば、家にいる子供のことは自分の子供だと言うが、外にいる子供は自分の子供ではないということがあろうか。」甘節録

〔注〕

(1) 「知誠意は如何先後」「致知」「誠意」の先後に関する議論としては本条同様、格物致知と誠意は同時に実践されねばならない、とする九五条や、致知が真に実践されてこそ誠意も実現し得る、とする一〇一条、一〇七条が有る。

(2) 「反求諸身」「中庸章句」第一四章の「子曰、射有似乎君子。失諸正鵠、反求諸其身。」による。「射は君子に似たところがある。的を射そこねたら、かえりみて失敗した原因を自らに求めるものだからだ。」なお『孟子』「盡心」上「萬物皆備於我矣、反身而誠、樂莫大焉。」とその朱注「此言理之本然也。大則君臣父子、小則事物細微、其當然之理、無一不具於性分之内也。誠、實也。言反諸身、而所備之理、皆如惡惡臭好好色之實然、則其行之不待勉強而無不利矣。其爲樂孰大於是。」を参照。

(3) 「云云」この部分は、朝鮮古写本によると、甘節が「似從外去討得來」と言ったところで、朱子が甘節に対して「何が外で何が内だ？」と聞き返し、甘節が「致知格物が外から探し求めて、それではじめて己にあることになるわけで、これが（私の言う）外から探し求めてはいつていくという意味です。」と答えたところ、再度朱子が「これは、先にこの理があるのに後になって自分では知らない

だけなのか、知ることができたあとではじめてこの理があるのか」と問い返し、それに甘節が答えられず、そこで「仁義礼知は…」という『孟子』の文章を朱子が引用したことになる。

(4) 「仁義禮智云々」「孟子」「告子」上の文章。「仁義礼知は、外から熱を与えてとかしてできあがるようなものではなく、わたしがもとも持っていたものだ。ただそれに思いを致してもとめようとしていないだけだ。」朱子集注「鏤以火銷金之名、自外以至内也。…言四者之心、人所固有、但人自不思而求之耳。」

(5) 「人有兩箇兒子」「朱子語類考文解義」「喻内外皆一。」どちらも自分の子に変わりはない。格物によって外から獲得してきたように思われる理も、実は元來人が自己の内に固有しているものである、との意。

(6) 「兒子：幹家事」「周易」「蒙」の九二爻辞「子克家」を意識する。朱子本義「又居下位而能任上事、為子克家之象。」

107条

或問、知至以後、善惡既判、何由意有未誠處。曰、克己之功、乃是知至以後事。惟聖罔念作狂、惟狂克念作聖、一念纔放下、便是失其正。自古無放心底聖賢、然一念之微、所當深謹、纔說知至後不用誠意、便不是。人心惟危、道心惟微。毫釐間不可不子細理會、纔說太快、便失却此項功夫也。録



〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一五不載。

○「毫釐間」成化本作「豪」。

○「録」伝経堂本並諸本皆作「録」。

〔訳〕

ある人が質問した。「知が至った後は、善悪は判然としているわけなのに、どうして意に誠でないことがあるのでしょうか。」先生がおっしゃった。「克己の工夫は、とりもなおさず知が至ったあとの事柄に属する。「惟だ聖も念ふな罔ければ狂とな作り、惟だ狂もよ克く念へば聖と作る」であって、ほんのわずかでも思うことをやめてしまえば、正しさを失うことになる。古よりこのかた放心の聖賢などいない。しかし、わずかに思うという微かなところが、深く慎まねばならないところであって、知が至った後には誠意の工夫など要らないなどと言ったら、それではいけないのである。「人心は惟れ危うく、道心は惟れ微かなり。」であって、ほんのわずかのあいだも子細にとりくむことをやめてはならないのである。もし通り一遍にぞんざいに行えば、この一連の工夫はだめになってしまう。」董銖録

〔注〕

(1)「知至以後、善悪既判」『大学或問』「聖人於此蓋有憂之。故爲大學之教而首之以格物致知之目、以開明其心術、使既有以識夫善惡之所在與其可好可惡之必然矣。至此而復進之、以必誠其意之說焉。」

(2)「克己」『論語』「顔淵」「克己復礼爲仁」。『語類』卷四一、一七条、

金去偽録(II 1045)「或曰。克己是勝己之私之謂克否。曰。然。曰。

如何知得是私後克將去。曰。隨其所知者、漸漸克去。」なお、克己

が知至の後の工夫と言いつけることについては、別の発言もある。『語

類』卷四二、二四條、錢木之録(II 1076)「子升問。克己復禮、乾道

也。此莫是知至已後工夫否。曰。也不必如此說。只見得一事、且就

一事上克去、便是克己。終不成說道我知未至、便未下工夫。若以大

學之序言之、誠意固在知至之後、然亦須隨事修爲、終不成說知未至、

便不用誠意正心。但知至已後、自不待勉強耳。」この条のあと、「既

に知が至っているのになぜその上に誠意が必要なのだ」という問題

が何条か現れるが、それは一一五條の「意が本体たる心から出るな

ら、なぜ心を正そうとする前に意を誠にしようとするのか」という

発想と対になる。なお、致知と誠意についても、九五條では明確に

先後無しと言いながら、一〇一條では致知が先と言っており、これ

についても朱子はふた通りに考えている。

(3)「惟聖罔念作狂、惟狂克念作聖」『尚書』「多方」の文章。「聖であつ

ても善を思うことがなければ狂となるし、狂であつても善を思えば

聖となる。」この文を、集伝は続く文章につなげて解釈していこう

とするが、林光朝(艾軒)が、続く部分を不明とし、この二句のみ

をよんでおけばよいとした、という記録が語録に残されている。『語

類』卷七九、一四六條、甘節録(v 2059)「艾軒云。文字只看易曉處。

如尚書惟聖罔念作狂、惟狂克念作聖、下面便不可曉、只看這兩句。」

(4)「放下」ほうりだす。やめる。『語類』卷九六、七條、葉賀孫録(Ⅶ

2161)「雖是必有事焉而勿正、亦須且恁地把握操持、不可便放下了。」  
 なお、次条ではよい意味に使われていることに注意。

(5)「放心」『孟子』「告子」上「學問之道無他、求其放心而已矣。」

(6)「纒説」ほんの少しでも……と言えば、『語類』卷一二〇、一二条、

沈僩録(Ⅶ 2884)「不曾教你放寬。所以學問難、才說得寬、便不著緊。才太緊、又不濟事。寬固是便狼狽、然緊底下梢頭也不濟事。」

(7)「子細、太快」「快」は「はやい」。そこから「ぞんざい」の意

となり、「子細」と対の意味を持つことになる。『語類』卷  
 一一三、二三条、記録者欠(Ⅶ 2744)「先生謂廣看文字傷太快。恐不

子細。」なお、輔広は同じことで別の箇所でも叱られている。『語類』

卷一九、四三条、輔広録(Ⅱ 434)「問。看論語了未。廣云。已看一  
 遍了。曰。太快。若如此看、只是理會文義、不見得他底深長意味。」

(8)「失却」だめになる。だめにする。『語類』二七、五六条、周明  
 作録(Ⅱ 687)「學者與聖人所爭、只是這些箇自然與勉強耳。聖人所

行、皆是自然堅牢。學者亦有時做得如聖人處、但不堅牢、又會失却。」

(9)「録」記録者の「録」は、中華書局本の誤植である。訳では改  
 めた。

108条

問椿、知極其至、有時意又不誠、是如何。椿無對。曰、且去這裏子  
 細窮究。一日稟云、是知之未極其至。先生曰、是則是。今有二人。一  
 人知得這是善這是惡、又有一人真知得這是善當為惡不可為。然後一人

心中、如何見得他是真知處。椿亦無以應。先生笑曰、且放下此一段、  
 緩緩尋思、自有超然見到處。 椿

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一五不載。

○「一日稟云」萬曆本「云」作「去」。

○「又有一人」萬曆本無「又」字。

〔訳〕

わたくし椿におたずねになった。「知が至るといふ段階まで極まっ  
 ても、時として意には誠でないことがあるが、これはどういふことか  
 な。」わたくしがお答えしませんが、先生はおっしゃった。「しばらく  
 このことを子細に考求してみなさい。」その後ある日、申し上げた。「こ  
 れは知がまだ至るといふ段階に極まっていけないのではないでしょう  
 か。」先生はおっしゃった。「それはそうかもしれない。ここに二人い  
 るとしよう。一人はこれが善でそれが悪だということを知っている。  
 もう一人はこれが善であつてなすべきでありそれが悪でなすべきでな  
 いということを知っているとす。さてそこで、ふたりのそれぞ  
 れは心の中で、自分が真に知っているかどうかをどうやって知ること  
 ができるのか。」わたしは今度もお答えすることができなかった。先  
 生は笑つておっしゃった。「まあこのことはしばらくおきなさ  
 い。じっくり考えていけば、おのずといつか、はつとわかることにな  
 りますから。」 魏椿録

〔注〕

(1)「稟云」「字海便覽」は「申シアグルコト」とする。

(2)「是則是」それはそうかもしれない。『古尊宿語録』卷三三「一日、司馬頭陀問云。野狐話作麼生會。馮山撼門扇。司馬云。是則是、太麤生。山曰。佛法説什麼麤細。」「上蔡語録」卷上「伊川曰。近日事如何。某對曰。天下何思何慮。伊川曰。是則是。有此理。賢却發得太早。」

(3)「如何見得云々」朱子の第一の質問に対しては、前条の朱子自身の答えがその一例となろうが、この第二の質問に対しては、あるいは『大学章句』伝六章にもとづいて、「慎独なのだから、わたくしが自ら知るしかありません」とでも答えることが求められたのだろうか。もちろん、その答えに対しては、「それだけはいかん」というさらなる問いを朱子は用意していたと思われるが。なお、本卷一〇二条で朱子は「行動を見ればわかる」としているのを参照。

(4)「眞知」本卷一〇一条で知が極に至るのが眞知だとしているのを参照。

(5)「且放下此一段」「放下」は、置いておく、捨て置く。ここでは肯定的な意味で使われている。

(6)「超然」「老子」二六章に見える言葉だが、ここは『封氏聞見記』尊號「貞元初、主上超然覺悟、乃下詔去其徽號、直稱皇帝、合於古矣。」に近く、所謂「豁然貫通」の豁然に通じる用法。

109条

誠意、方能保護得那心之全體。以下誠意。

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一五不載。

〔訳〕

意を誠にすることによって、はじめてあの心の全体というものを保持できるのだ。記録者名欠 以下、誠意について

〔注〕

(1)「保護」所謂「存養」や「保養」のイメージとつながっていく言葉。『語類』卷一六、一六〇条、徐舛録(Ⅱ 36)「問。誠意正心二段只是存養否。曰。然。」同卷五九、二二六条、呉必大録(Ⅳ 148)「孟子説、仁人心也。此語最親切。心自是仁底物事。若能保養存得此心、不患他不仁。」

(2)「全體」まったき体。格物補伝「一旦豁然貫通焉、則衆物之表裏精粗無不到、而吾心之全體大用無不明矣。」を参照。

110条

問。實其心之所發、欲其一於理而無所雜。曰。只為一便誠、二便雜。

如惡惡臭、如好好色、一故也。小人間居為不善止著其善、二故也。只看這些便分曉。二者為是真底物事、却著些假撓放裏、便成詐偽。如這一盞茶、一味是茶、便是真。才有些別底滋味、便是有物夾雜了、便是二。 夔孫

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一五無。

○「却著些假撓放裏」「却著」成化本、萬曆本、和刻本作「却着」、「裏」萬曆本、和刻本作「裡」。

〔訳〕

質問した。「誠意とは」心の発するところを誠実にして、それが理に同一なものとなり、夾雑物がない状態にしようとすることでしようか。「先生がおっしゃった。「ただ一であれば誠、二であれば雑だ。「悪臭を悪むが如く、好色を好むが如し」とは、一であるからだ。「小人間居して不善を為し」から「其の善を著す」までは、二であるからだ。ただこのあたりのことを見さえすれば、それでわかる。二であるのはなぜかという、真なる物ではあつても、そこに仮なるものをまぜこんでしまうと、詐偽となってしまうからなのだ。たとえばこの一碗のお茶が、お茶の味だけがすれば、それなら真なるものだが、もしわずかでも違う味がすれば、それでは夾雑物があることになって、二だということになるのだ。 林夔孫録

〔注〕

(1)「實其心之所發」「実」が「誠」であり、「心之所發」が「意」であるので、これがそのまま「誠意」だということになる。

(2)「如惡惡臭、如好好色」「大学章句」伝六章「所謂誠其意者、毋自欺也。如惡惡臭、如好好色。」

(3)「小人間居為不善」「大学章句」伝六章「小人間居為不善、無所不至。見君子而后厭然、撓其不善而著其善。」

(4)「為是」ゞだから。「花間集」卷九玉樓春(魏承班)「好天涼月盡傷心、為是玉郎長不見。」

(5)「撓放」まぜこむ。『語類』卷六三、一一六条、林夔孫録(IV 154)「如夏月嘘出固不見、冬月嘘出則可見矣。問。何故如此。曰。

春夏陽、秋冬陰。以陽氣散在陽氣之中、如以熱湯入放熱湯裏去、都不覺見。秋冬則這氣如以熱湯撓放水裏去、便可見。」

(6)「盞」茶碗などを数える量詞。

111条

意誠後、推盪得渣滓靈利、心盡是義理。 閔祖 以下意誠

〔校勘〕

○「渣滓靈利」「渣」萬曆本、朝鮮整版本作「查」。

○「以下意誠」朝鮮古写本無。

〔訳〕

意が誠になった後には、余分な夾雑物がきれいさっぱりとりはらわれて、心全体が義理そのものとなるのだ。李闕祖録 以下「意誠」について

〔注〕

(1) 「推盪」 もともと揺り動かす意だが、ここでは押し出す、押しやる。古いものを押しやって新しいものを置く、転じて変化させる。以下の「蕩滌」の意に近い。『論語』「泰伯」「成於樂」集注「樂有五聲十二律、更唱迭和、以為歌舞八音之節、可以養人之性情、而蕩滌其邪穢、消融其查滓。」なお、「推盪」はもと『周易』の語。『周易』「繫辭上傳」是故剛柔相摩(韓康伯注「相切摩也。言陰陽之交感也。」、八卦相盪(韓康伯注「相推盪也、言運化之推移。」、孔穎達正義「正義曰。剛則陽爻也。柔則陰爻也。剛柔兩體、是陰陽二爻、相雜而成八卦、遞相推盪、若十一月一陽生而推去一陰、五月一陰生而推去一陽、雖諸卦遞相推移、本從八卦而來、故云八卦相盪也。」朱子『周易本義』「此言易卦之變化也。六十四卦之初、剛柔兩畫而已。兩相摩而為四、四相摩而為八、八相盪而為六十四。』『語類』卷七四、一六条、踊淵録(V 1878)「摩、是那兩箇物事相摩戛。盪、則是圓轉推盪將出來。摩、是八卦以前事。盪、是八卦以後為六十四卦底事。盪、是有那八卦了、團旋推盪那六十四卦出來。漢書所謂盪軍、是團轉去殺他、磨轉他底意思。』『語類』卷七四、一七条、董銖録(V 1878)「問。剛柔相摩、八卦相盪。竊謂六十四卦之初、剛柔兩畫而已。兩而四、四而八、八而

十六、十六而三十二、三十二而六十四、皆是自然生生不已、而謂之摩、盪、何也。曰。摩如物在一物上面摩旋底意思、亦是相交意思。如今人磨子相似、下面一片不動、上面一片只管摩旋推盪不會住。自兩儀生四象、則老陽老陰不動、而少陰少陽則交。自四象生八卦、則乾坤震巽不動、而兌離坎艮。」

(2) 「渣滓」 おり。前条の夾雑物にあたる。『語類』卷一六、七四条、沈僩録(II 328)「所謂誠其意者、毋自欺也。…正如金。已是真金了、只是鍛煉得微不熟、微有些渣滓去不盡、顏色或白或青或黃、便不是十分精金矣。』『語類』卷一四、五五条、林恪録(I 359)「只是一箇陰陽五行之氣、滾在天地中、精英者為人、渣滓者為物、精英之中又精英者為聖為賢、精英之中渣滓者、為愚為不肖。」

(3) 「靈利」 伶俐(いづれも *lingli*) に同じ。『近代漢語大詞典』は「靈敏、乖巧」とする。『語類』卷一三二、二九条、包揚録(VII 372)「揚因及劉道原不受温公惠。曰。如此做得人也靈利。』『語類』卷三九、四四條、記録者名欠(III 1018)「明道謂曾子竟以魯得之、緣他質鈍、不解理會得、故著工夫去看、遂看得來透徹、非他人所及。有一等伶俐人、見得雖快、然只是從皮膚上略過、所以不如他。」基本的に朱子にとってこの「伶俐」は全面的に賛意を示し得るものではない。また同卷六三、八三条、輔広録(IV 1538) 参照。なお『字海便覧』は、「靈利心」として見出し語を立て、「澤田一奇曰字面ノ如シ」と注する。また『四書大全』は本条を引用して「靈利」を「伶俐」に作り、「義理」以下に以下の文章を続けて載せている。「意是指發處、心是指體言。意是動、心該動靜。身對心言、則心正是内、

能如此身脩是外。若不各自做一節工夫、不成說我意已誠矣、心將自正、恐懼哀樂引將去、又却邪了、不成說心正矣、身不用管外面更不顧、而心與迹有異矣、須是無所不用其功。」

112条

意識、如蒸餅外面是白麵、透裏是白麵。意不誠、如蒸餅外面雖白、裏面却只是粗麵一般。 閔祖

〔校勘〕

○「面」 成化本、朝鮮古写本作「面」、下同。

○「麵」 成化本朝鮮整版本作「麵」、下同。朝鮮古写本、伝経堂叢書本作「麪」（呂留良本作「麵」、下同）。

○「裏面却只是」「裏」萬曆本、和刻本作「裡（しめすへん）」、下同、「却」伝経堂叢書本作「卻」。

○「粗麵一般」「粗」成化本朝鮮古写本作「麤」、朝鮮整版本作「麤」。

〔訳〕

意が誠、とは、蒸した饅頭の外側が白い生地で、中の方へいっても白い生地というようものだ。意が誠でない、とは、蒸した饅頭の外側は白いのだが、中とはいえばただ粗粉の生地で出来ているようなものだ。 李閔祖録

〔注〕

(1) 「外面」 本条は、「意識」を「内外」という対比で考えると、  
が重要。『大学章句』伝六章の「誠於中、形於外」という発想を写したものである。

(2) 「白麵、粗麵」 白麵は研いで作られた上等な小麦粉。対して粗麵は研がないで粉にしたもの。卷一六では、「自慊自欺」の話に同じ喩えが使われる。『語類』卷一六、八七条、李壯祖録(Ⅱ 33)「或問自慊自欺之辨。曰、譬如作蒸餅。一以極白好麵自裏包出、内外更無少異。所謂自慊也。一以不好麵做心、却以白麵作皮、務要欺人。然外之白麵、雖好而易窮、内之不好者、終不可揜。則乃所謂自欺也。」

(3) 「透裏」 内側までいっても。「透」は到達する。本卷四七条「透底」の「透」と同義。

(4) 「如く一般」 〳のようなものだ。『語類』に類出。

(5) 「蒸餅」 蒸した饅頭(マントウ)。

113条

心言其統體、意是就其中發處。正心、如戒懼不睹不聞、誠意、如慎獨。又曰、由小而大、意小心大。 閔祖 正心誠意

〔校勘〕

○「其中發處」「處」朝鮮古写本作「出」。

○「如慎獨」「慎」伝経堂本並諸本皆作「謹」。

○「正心誠意」朝鮮古写本無。

〔訳〕

心はその統体を言い、意は心において発してくるところである。「正心」とは「睹ざる聞かざるを戒懼」するようなもので、「誠意」とは「独りを慎む」のようなものだ。またおっしゃった。「小より大へ」という場合、意が小であり、心が大にあたる。」李閔祖録 正心誠意について

〔注〕

(1) 「心言其統體」「統体」は「全体」。『語類』卷五一、八条、潘時挙録 (IV 1220) 「至問。心之徳、是就專言之統體上説。愛之理、是就偏言之一體上説、雖言其體、而用未嘗不包在其中。」「語類」卷六二、八九条、沈憫録 (IV 1502) 「黃灝謂。戒懼是統體做工夫、慎獨是又於其中緊切處加工夫、猶一經一緯而成帛。先生以為然。」「統」とする発想は張載の「心統性情」(『近思録』卷一)による。なお『西山読書記』では、この記録は本巻八六条の「不然則惡」の条に続けて、心と意の区別を問う質問の答えとして記録されている。『西山読書記』卷二二「致知誠意乃學者二个關。致知乃夢與覺之關。誠意乃惡與善之關。透得致知之關、即覺。不然則夢。透得誠意之關、則善。不然則惡。問心與意之別。曰。心言其統體、意是就其中發出。」心と意については、『大学章句』経、朱注「心者身之所主也。誠實也。意者心之所發也。」なお本巻一二三条参照。

(2) 「正心、如戒懼不睹不聞」『中庸章句』第一章「是故君子戒慎乎其不睹、恐懼乎其不聞。」なお、本巻一二五条に心を「無形影」としてゐるのを参照。

(3) 「慎獨」『大学章句』伝六章「所謂誠其意者、毋自欺也。如惡惡臭、如好好色。此之謂自謙。故君子必慎其獨也。」

(4) 「由小而大」『論語或問』「顔淵」「蓋禮為心之規矩、而其用無所不在。以身而言、則視聽言動四者、足以該之矣。四者之間、由粗而精、由小而大、所當為者皆禮也、所不當為者皆非禮也。」この「由粗而精」は張載『經学理窟』四「学大原」下「在始學者得一義、須固執從麤入精也。如孝事親忠事君一種是義、然其中有多少義理也。」を参照。

114条

康叔臨問・意既誠矣、心安有不正。曰。誠只是實、雖是意識、然心之所發有不中節處、依舊未是正。亦不必如此致疑、大要只在致知格物上。如物格知至上鹵莽、雖見得似小、其病却大。自脩身以往、只是如破竹然。逐節自分明去。今人見得似難、其實却易。人入德處、全在致知格物。譬如適臨安府、路頭一正、着起草鞋、便會到。未須問所過州縣那箇在前那箇在後、那箇是繁盛那箇是荒索。工夫全在致知格物上。謙以下論格物致知誠意正心

〔校勘〕

○「箇」朝鮮古写本皆作「个」。

○「却」 伝経堂本皆作「卻」。

○「以下論格物致知誠意正心」 成化本、萬曆本、朝鮮整版本、和刻本作「論格物致知誠意正心以下」、『朱子語類正譌』云「以下論二字原在正心下、非」。朝鮮古写本無。

〔訳〕

康叔臨が質問した。「意が誠となつているのに、心はどうして不正なることがあるのでしょうか。おっしゃった。「誠はただ実なるものであつて、意が誠であつても、心の発するところ（＝意）に節にあたらなうところがあれば、依然として正ではないのだ。別にそんなふう疑問を抱く必要はないのであつて、大事なのはただ致知格物だ。物格り知至るところでいいかげんであると、小さな事に見えてもその弊害は大きい。（そこがきちんとできていれば）修身以降はもう竹を割るようであつて、一節ごとに自然と明らかになつていく。今、人には難しいように見えるかもしれないが、実際にはやさしいのだ。人はどこから「入徳」するのかと言へば、それはまさしく致知格物なのだ。たとえば臨安府に行くとして、進む道が正しければ、あとははきものさえ履けば、そのままたどり着くことが出来るようなものだ。その際には、途中に通る州県がどこが先でどこが後かとか、どこがにぎやかでどこがさびれているとかは問題にならない。あくまでも工夫は致知格物のところが重要なのだ。」 廖謙録 以下格物致知誠意正心を論じる。

〔注〕

- (1) 「康叔臨」 康淵、字叔臨。『宋元学案』卷二四参照。
- (2) 「中節」 『中庸章句』第一章「喜怒哀樂之未發謂之中。發而皆中節謂之和。」
- (3) 「亦不必如此致疑」 この正心と誠意の間の問題については難しい部分を含んでおり、弟子がしばしば問ひ、実に朱子自身も弟子に問うている。本卷一〇七条、注(一)参照。
- (4) 「鹵莽」 もとは荒地地に生えた草を指す。引伸して、粗忽なこと、いいかげんなこと。
- (5) 「自修身以往、只是如破竹然：今人見得似難、其實却易。」 本条では「格物致知」と「修身」以下が対比されている。類似の発言は他にも見られるが、①「八条目の重点は前半に在つて後ろへ行けば行くほど軽くなる」とするもの、②「致知と誠意を工夫上の二大関鍵とするもの」③「誠意が一大関鍵でそれ以降は下へ行けば行く程軽い」とするもの、④「格物と誠意こそが難関で正心や修身は比較的容易である」とするものなど、条によつて細部は異なる。①卷一四、一五条「大學重處都在前面。後面工夫漸漸輕了、只是揩磨在。」②卷一五、八六条「致知誠意、是學者兩箇關」③卷一五、一一五条「意誠則心正。誠意最是一段中緊要工夫。下面一節輕一節。」④卷一五、一二三条「大學於格物・誠意、都煅煉成了。到得正心・修身處、只是行將去、都易了。」
- (6) 「破竹」 ものごとが順調にたやすく進むこと。『晋書』卷三四「杜預伝」「預曰、昔樂毅藉濟西一戰以并彊齊。今兵威已振、譬如破竹、



數節之後、皆迎刃而解、無復著手處也。」

(7) 「入徳」 『中庸章句』 第三章 「君子之道淡而不厭、簡而文、溫而理、知遠之近、知風之自、知微之顯、可與入徳矣。」 『大学章句』 題注 「子程子曰、大學孔氏之遺書、而初學入徳之門也。」 『語類』 卷六四、一九八条、董銖録 (IV 1598) 「須是知得道理如此、方肯去慎獨、方肯去持養、故可與入徳矣。」

(8) 「路頭」 すすんでいく道筋。『滄浪詩話』 「詩弁」 「行有未至、可加工力、路頭一差、愈驚愈遠、由入門之不正也。」

(9) 「臨安府」 現在の杭州。福州から計算して、現在の鉄道で約750kmの道のり。

(10) 「荒索」 荒涼。「索」は「索莫」「索落」の索。袁甫『蒙齋集』 卷七「論会子箚子」 「兩月之間、物價驟増、會價頓削、城市荒索、氣象蕭條。」

## 115条

問。心本也。意特心之所發耳。今欲正其心、先誠其意、似倒說了。曰。心無形影、教人如何撐拄、須是從心之所發處下手、先須去了許多惡根。如人家裏有賊、先去了賊、方得家中寧。如人種田、不先去了草、如何下種。須去了自欺之意、意誠則心正。誠意最是一段中緊要工夫、下面一節輕一節。或云。致知格物也緊要。曰。致知、知之始。誠意、行之始。

夔孫

〔校勘〕

- 「教人如何撐拄」 「撐」 萬曆本、朝鮮古写本、伝経堂本作「撐」
- 「如人家裏有賊」 「裏」 萬曆本、和刻本作「裡(しめすへん)」
- 「下面一節輕一節」 「面」 成化本、朝鮮古写本作「面」
- 「夔孫」 朝鮮古写本下有「○銖同」

〔訳〕

質問した。「心は本体であり、意は心が発したものにすぎません。なのに心を正そうとして、それ以前に意を誠にしようというのは、話が逆になっていませんか。」先生がおっしゃった。「心には影も形もないのだから、それをどうやって支えさせるのかといえば、心の発するところから着手するより仕方がない。まずは多くの悪のものを取り去らねばならない。たとえば家の中に賊がいたら、まずは賊を排除して、それではじめて家の中が安寧になる。田に種をまくことなら、先に草をとらないで、どうやって種をまくというのか。自らを欺いて悪をなそうとする意を取り去るべきで、そのようにして意が誠になれば心も正しくなる。誠意というのは一連の工夫の中の最も重要なものであり、それ以下は一節ごとに次第に軽くなっていく。」ある人が言った。「致知格物も緊要ですね。」先生がおっしゃった。「致知は知の始め、誠意は行いの始めだ。」林夔孫録

〔注〕

(1) 「倒説」 話が逆だ。『語類』に頻出。『程氏外書』 卷八「問文中

子圓者動、方者靜。先生曰。此正倒説了。靜體圓、動體方。」

(2) 「無形影」 形影は『荀子』禮論「事死如事生、事亡如事存、狀乎無形影、然而成文。」なお島田慶次『大学・中庸』(四三頁)では「無形影」以下の部分を引用して「未発の心」と注している。「無形影」は『語類』に類出。卷三、一条、陳淳録(一三三)「鬼神事自是第二著。那箇無形影、是難理會底、未消去理會、且就日用緊切處做工夫。」心が無形影であることは、卷二二、一〇八条、潘時舉録(II 503)「問集注不誠無物一節。曰。心無形影、惟誠時方有這物事。」

(3) 「撐拄」 さとさえる。『玉臺新詠』卷一「陳琳飲馬長城窟行」「君獨不見長城下、死者骸骨相撐拄。」

(4) 「惡根」 仏典に類出。『廣弘明集』卷二六「梁武帝斷酒肉文」「自棄正法、行於邪道、長衆惡根、造地獄苦。」

(5) 「自欺」 『大学章句』伝六章「所謂誠其意者、毋自欺也。」

(6) 「一節」一節毎に」となる。この「一A」の構文については、卷一四、一七三条を参照。

(7) 「致知、知之始。誠意、行之始。」「致知」と「誠意」をそれぞれ「知」と「行」に対応させて説明することについては、卷一四、八四条に「格物・致知、便是要知得分明。誠意・正心・修身、便是要行得分明。」とあるのを参照。

116条

或問。意者心之所發、如何先誠其意。曰。小底却會牽動了大底。心之

所以不正、只是私意牽去。意才實、心便自正。聖賢下語、一字是一字、不似今人作文字、用這箇字也得、改做那一字也得。

〔校勘〕

○朝鮮古写本の卷一五には、本条が見えない。

○「箇」 萬曆本、和刻本は「个」に作る。

○「意才實」 成化本、朝鮮整版本は「才」を「纔」に作る。

〔訳〕

ある人が尋ねた。「意とは、心の発動するものであるが、どうして『先ずその意を誠にす』というのですか。」(先生は)おっしゃった。「小さいものがかえって大きなものを引き動かすことができるのだ。心の正しくないその原因は、ただ私意が(その心の「不正」を)引き起こしたのである。意が誠実になったその時点に、心はそこでもう自ずと正しくなるのである。聖人や賢人たちの言葉使いは、一字にはその一字分の意味が込められているのであって、いまの人が文章を作るような、この字を使ってもいいし、あの一字に書き換えてもいい、というようなものではないのだ。 記録者名欠

〔注〕

(1) 「先誠其意」 『大学章句』經「欲正其心者、先誠其意。」

(2) 「牽動」 引き動かす。既出(本卷二六条)。「小底却會牽動了大底」ここでは、「小底」が「意」を、「大底」が「心」を指す。意と心

の大小については、本卷一一三条に「心、言其統體。意、是就其中發處。：又曰。由小而大。意小心大。」とある。

(3) 「一字是一字」 一字には一字の重みがある。聖賢の言葉は一字たりともおざなりに表現されたものはない。『語類』卷一〇四、四六条、楊道夫録(Ⅶ 262)「讀書須是虚心、方得。他聖人說一字是一字、自家只平著心去秤停他、都不使得一毫撰、只順他去。」『語類』卷一九、七六条、記録者名欠(Ⅱ 210)「且說精義是許多言語、而集注能有幾何言語。一字是一字。其間有一字當百十字底、公都把做等閑看了。」『語類』卷一九、五九条、甘節録(Ⅱ 231)「語吳仁父曰。某語孟集注、添一字不得、減一字不得、公子細看。又曰。不多一箇字、不少一箇字。」

117条

格物者、知之始也。誠意者、行之始也。意誠則心正、自此去、一節易似一節。 拱壽

〔校勘〕

○「拱壽」朝鮮古写本は「銖」に作る。

〔訳〕

格物とは、知の始まりである。誠意とは、行の始まりである。意が誠であれば心は正しいものとなるのであり、ここから行けば、一段ごと

に行いやすくなつていくのである。 董拱壽録

〔注〕

(1) 「拱壽」拱壽は董拱壽。校勘に触れたように、本条の記録者を朝鮮古写本は董銖とする。『朱門弟子師事年攷』は両者の同席例には触れていない。

(2) 「一節易似一節」本卷八五条「過得此二關、上面工夫却一節易如一節了。」三浦『朱子語類』抄(前掲)「節」は『截』におなじ、”部分、段”の意(二七七頁)。

(3) 「格物者、知之始也。誠意者、行之始也」格物誠意等と知行の關係については卷一四、八四条「格物・致知、便是要知得分明。誠意・正心・修身、便是要行得分明。」及び本卷一一五条「致知、知之始。誠意、行之始」を参照。

118条

致知、誠意兩節若打得透時、已自是箇好人。其它事一節大如一節、病敗一節小如一節。 自修

〔校勘〕

○朝鮮古写本は、本条の前に「問。尋常讀大學未有所得、願請教。曰」とある。

○「箇」萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「个」に作る。

〔訳〕 致知と誠意の二つの段が、徹底的に実行された時は、既に善人になっている。その他の事は、一段は次の一段より大きく、欠陥は、一段は次の一段より小さいのである。孫自修録

〔注〕

- (1) 「打得透」「打透」と同義、「透徹するまで行う」「徹底的に実行する」の意。『語類』卷四二、四一条、董銖録(Ⅲ 1081)「仁譬之屋、克己是大門、打透便入來。主敬行恕是第二門。言訥是箇小門。雖皆可通、然小門便迂迴得些、是它病在這裏。」『語類』卷一三、一三〇条、記錄者名欠(Ⅰ 225)「味道問。死生是大關節處。須是日用間雖小事亦不放過、一一如此用工夫、當死之時、方打得透。曰。然。」
- (2) 「己自是箇好人」「己自」は、「既に」の意。
- (3) 「一節大如一節」一節ごとに大きくなる。
- (4) 「病敗」欠陥や欠点の多いこと。『語類』卷一一、一三六条、楊道夫録(Ⅰ 108)「後見南軒集中云、病敗不可言。」『朱子語類』訳注 卷十学四讀書法上 卷十一学五讀書法下(前掲)には「病敗不可言」を「缺點だらけでお話にならない」と訳す(二九〇頁)。
- (5) 「一節小如一節」一節ごとに小さくなる。

119条

格物者、窮事物物之理。致知者、知事物物之理、無所不知。知其

不善之必不可為、故意誠。意既誠、則好樂自不足以動其心、故正心。

格

〔校勘〕

○「格」劉氏伝経堂叢書本、朝鮮整版本は「恪」に作る。『朱子語録姓氏』に「格」という名の門人はいないから、「恪」(林恪)に作るべきである。朝鮮古写本は「人傑」に作る。

〔訳〕

格物とは、事事物物の理を窮めることである。致知とは、事事物物の理を知り、知らないところはないことである。その不善を必ずしてはいけないことを知り、だから意が誠である。意が既に誠であれば、好みや楽しみがその心を動くようにすることはない、だから心が正しいのである。林恪録

〔注〕

- (1) 「好樂」『大学章句』伝七章「所謂脩身在正其心者、身有所忿懣、則不得其正、有所恐懼、則不得其正、有所好樂、則不得其正、有所憂患、則不得其正。」朱注「程子曰。身有之身當作心。」

120条

格物、致知、正心、誠意、不可著纖毫私意在其中。椿録云、便不是矣。

致知、格物、十事格得九事通透、一事未通透、不妨。一事只格得九分、一分不透、最不可。凡事不可著箇且字。且字、其病甚多。

〔校勘〕

○「著」成化本、万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「着」に作る。

○「椿録云、便不是矣」朝鮮古写本にはこの七字がない。

○「箇」萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「个」に作る。

○朝鮮古写本では、本条の録者を「庚」とする。

〔訳〕

格物、致知、正心、誠意は、ほんの少しの私意がその中に付いてもいけない（魏椿の記録は「それはよくないのだ」である）。致知、格物は、十の事に九つの事（の理）をすっかり分るまで窮め尽くすならば、（残りの）一つの事がまだすっかり分かつていなくても、問題がない。一つの事に対して九割しか窮めず、（残りの）一割はすっかり分かっていなければ、最もいけないのだ。だいたいどんな事でも一つ「且」（とりあえず）の字が付いてはいけない。「且」の字には、その欠点が甚だしく多いのである。録者不明

〔注〕

〔1〕「通透」すっかり分ること。既出（『語類』卷一四、四八条）。「十事格得九事通透、一事未通透、不妨」は、『語類』卷一八、一八条、陳淳録（II 395）「如一百件事、理會得五六十件了、這三四十件雖未

理會、也大概是如此。」「語類』卷一八、二二条、林夔孫録（II 396）「問程子格物之説。曰。須合而觀之、所謂不必盡窮天下之物者、如十事已窮得八九、則其一二雖未窮得、將來湊會、都自見得。」などを参照。

〔2〕「不妨」構わない、差し支えない。卷一四、二九条に既出。

〔3〕「一事只格得九分、一分不透、最不可」格物の対象とした事物について一割も漏らさず徹底的に格物せよとの意。『語類』本卷、七条、葉賀孫録では、「格物者、格、盡也、須是窮盡事物之理。若是窮得三兩分、便未是格物。須是窮盡得到十分、方是格物。」また、本卷、六〇条「格物云者、要窮到九分九釐以上、方是格。」

〔4〕「凡事不可著箇且字」「且」は「しばらく」「とりあえず」の意。当座の間に合わせにお茶を濁しておく、というニュアンスが有るため、ここでは厳しく批判されている。「苟且」に近い。本卷九四条、沈憫録「致知、無毫釐之不盡。守其所止、無須臾之或離。致知、如一事只知得三分、這三分知得者是真實、那七分不知者是虛偽。為善、須十分知善之可好、若知得九分、而一分未盡、只此一分未盡、便是鶴突苟且之根。少問説便為惡也不妨、便是意不誠。」

121条

〔校勘〕

○諸本異同なし。

格物、致知、誠意、正心、雖是有許多節次、然其進之遲速、則又隨人資質敏鈍。履孫

も簡単になるのである。林夔孫録

〔訳〕

格物、致知、誠意、正心は、多くの順序が立てられているが、しかしその進度の遅速は、また（その）人の資質が鋭敏なのか魯鈍なのかにもよるものだ。潘履孫録

〔注〕

(1) 「鍛煉成了」仔細に究明し丹念に吟味することによって道理を習熟することである。『語類』卷一一四、三八条、訓寶從周（Ⅶ 2766）「又曰。讀書如煉丹、初時烈火鍛熬、然後漸漸慢火養。…讀書初勤敏著力、子細窮究、後來却須緩緩溫尋、反復玩味、道理自出。』『語類』卷一一七、七条、訓周諱（Ⅶ 2809）「且留在胸次烹治煅煉、教這道理成熟。」

〔注〕

(1) 「節次」順序を立てること。既出（『語類』卷一四、一三条）。

(2) 「敏鈍」既出（『語類』卷一五、八四条）。

123条

致知、誠意、正心、知與意皆從心出來。知則主於別識、意則主於營為。知近性、近體。意近情、近用。端蒙

122条

大學於格物、誠意、都鍛煉成了、到得正心、修身處、只是行將去、都易了。夔孫

〔校勘〕

○朝鮮古写本の卷一五には、本条を欠く。

〔校勘〕

○朝鮮古写本の卷一五には、本条を欠く。

〔訳〕

「大学」は、格物、誠意において、すっかり鍛錬が成し遂げられたならば、正心、修身の段になると、ただ行っていけばよいので、どれ

致知、誠意、正心は、知と意はどれも心から出てきたものである。知は識別を主とするものであるが、意は（心の）働きを主とするものである。知は性に近く、体に近い。意は情に近く、用に近い。程端蒙録

〔注〕

(1) 「別識」 識別すること。既出(『語類』卷一五、九九条)。

(2) 「營為」 心の働き。『語類』卷四、四一条、沈僩録(198)「凡人之能言語動作、思慮營為、皆氣也、而理存焉。」『語類』卷五、八八条、沈僩録(198)「凡營為、謀度、往來、皆意也。」

(3) 「知近性、近體、意近情、近用」 性と情を体と用の關係で把握する考え方については以下を参照。『語類』卷五、六四条、沈僩録(198)

〔蓋心便是包得那性情、性是體、情是用。心字只一箇字母、故性情字皆從心。』『語類』卷五、七三条、程端蒙録(194)「心統性情、故言心之體用。」

124条

敬之問誠意、正心、修身。曰。若論淺深意思、則誠意工夫較深、正心工夫較淺。若以小大看、則誠意較緊細、而正心、修身地位又較大、又較施展。 賀孫

〔校勘〕

○「深」 劉氏伝経堂叢書本、朝鮮整版本、呂留良句読本は「濶」に作る。

〔訳〕

朱敬之が誠意、正心、修身についてお尋ねした。(先生は)おっしゃった。「もし深淺に言うならば、誠意の工夫は比較的深く、正心の工夫は比較的浅い。もし大小を見るならば、誠意は比較的緊迫で緻密であるが、正心、修身の境地は比較的大きい(つまり高い)し、また比較的展開するのである。 葉賀孫録

〔注〕

(1) 「敬之」 朱在、字は敬之、朱子の三男。既出(『語類』卷一四、五〇条)。

(2) 「工夫」 実践や修業や努力など。既出。

(3) 「若以小大看」 意と心の小大に関しては、本卷一三条「又曰。由小而大。意小心大。」を参照。

(4) 「緊細」 ひきしまつてくわしい。

(5) 「地位」 境地。『語類』卷二四、一二七条、程端蒙録(1273)「定亦自有淺深、如學者思慮凝定、亦是定。如道理都見得徹、各止其所、亦是定。只此地位已高。」

(6) 「施展」 展開する。『語類』卷一三七、二〇条、錢木之録(Ⅷ 3260)「曰、仲舒本領純正。如說『正心以正朝廷』、與『命者天之令也』以下諸語、皆善。班固所謂『純儒』、極是。至於天下國家事業、恐施展未必得。」

125条

誠意、正心、修身、意是指已發處看、心是指體看。意是動、心又是該動靜。身對心而言、則心正是内。能如此修身、是内外都盡。若不各自做一節功夫、不成說我意已誠矣、心將自正、則恐懼、好樂、忿懣引將去、又却邪了。不成說心正矣、身不用管、則外面更不顧、而遂心迹有異矣。須是無所不用其極。 端蒙

〔校勘〕

- 朝鮮古写本の卷一五には、本条が見えない。
- 「能如此修身」成化本、万曆本、呂留良本、朝鮮整版本、和刻本は「修身」を「身修」に作る。劉氏伝経堂叢書本卷末「朱子語類正譌」
- 「此修身、原倒。據周本改。」
- 「功夫」朝鮮整版本は「工夫」に作る。
- 「却」劉氏伝経堂叢書本は「卻」に作る。

〔訳〕

誠意、正心、修身は、意は「已發」のところを指して言うものであり、心は本体を指して言うものである。意は「動」だが、心はまたこの「動」と「静」を兼ねる。身体は心に対して言うならば、心はまさに内である。このように身を修めることができれば、内と外は両方尽くされるのである。もしそれぞれの段階ごとの「功夫」をしなければ、まさか、我が意は既に誠であるから、心は自ずと正しくなるのだ、などというわ

けにはいかず、もしもそんなことになれば「恐懼」「好樂」「忿懣」が引きずって行って、またかえってねじけてしまうのだ。まさか心が正しくなったから、身はほっておいていいというわけにはいかず、もしもそんなことになれば外は一層顧みないで、遂に心と跡が一致しないことになる。是非ともその極限まで尽くさぬところはなないようにすべきなのである。

〔注〕

- (1) 「心又是該動靜」『語類』卷五、七〇条、董銖録 (I 93) 「性是未動、情是已動、心包得已動未動。蓋心之未動則為性、已動則為情、所謂心統性情也。」『語類』卷九八、四一条、黄卓録 (VII 2513) 「一心之中自有動靜、靜者性也、動者情也。」
- (2) 「不成」まさか〜ではあるまい。卷一四の二四條、六〇条、一二四條等に既出。「不成説〜」は「まさか〜というわけにはよくまい」の意。
- (3) 「引將去」引いていく、引きずっていく。本卷一六一條「或問。意者心之所發、如何先誠其意。曰。小底却會牽動了大底。心之所以不正、只是私意牽去。意才實、心便自正。」
- (4) 「心迹」内面の心が、外面の行動・態度・礼貌・威儀等として現れたもの。『語類』卷一一六、四九條、訓郭友仁 (VII 2803) 「問『邦畿千里、惟民所止』。曰、此是大率言物各有所止之處。且如公、其心雖止得是、其迹則未存。心迹須令為一、方可。」



或問。意者、乃聽命於心者也。今日欲正其心、先誠其意。意乃在心之先矣。曰。心字卒難摸索。心譬如水、水之體本澄湛、却為風濤不停、故水亦搖動。必須風濤既息、然後水之體得靜。人之無狀汙穢、皆在意之不誠。必須去此、然後能正其心。及心既正後、所謂好惡哀矜、與修身齊家中所說者、皆是合有底事。但當時時省察其固滯偏勝之私耳。 侗。壯祖錄疑同聞別出。

〔校勘〕

○「乃聽命於心者也」成化本、萬曆本、呂留良本、朝鮮整版本、和刻本には「乃聽命」なし。朝鮮古写本は「乃」を「所以」に作る。劉氏伝経堂叢書本卷末「朱子語類正譌」「乃聽命、原脱。」

○「今日欲正其心」朝鮮古写本は、この下に「者」字有り。

○「意乃在心之先矣」朝鮮古写本は「意」の上に「則是」がある。

○「却」劉氏伝経堂叢書本は「卻」に作る。

○「然後水之體得靜」成化本、万曆本、呂留良本、朝鮮整版本、和刻本には「得」字なし。「朱子語類正譌」「體得靜、原脱、據諸本補。」

○「壯祖錄疑同聞別出」朝鮮古写本にはない。

〔訳〕

ある人が尋ねた。「意とは、心の命令に従うものである。いまは（つまり『大学』には）『其の心を正さんと欲する者は、先ず其の意を誠

にす』という。意が心の先に存在することになるのですが。」（先生はおっしゃった。「心という字は、なかなか捉えにくい。心を水と譬えれば、水の本体（の状態）はもともと深く澄んでいるものであるが、風と波が止まないために、そこで水も揺れ動くのである。必ず風と波が既に止んで、それから水の本体が動かなくなるのだ。人が道徳的な行いをせず汚いことをするのは、皆意が誠でないからである。必ずこれを除去して、それからその心を正しくすることができるのである。心が既に正しくなってから、いわゆる（つまり『大学』にいう）『好悪』や『哀矜』と『修身』や『齊家』の中において述べたものは、皆そのあるべきあり方になるのである。ただ常にその固くどこおり偏る私（つまり私意）を省察しなければならぬだけである。 沈侗録 李壯祖の記録は恐らく同席して聞いたものであり、別条として記録する

〔注〕

(1) 「無狀」道徳的な行いではないこと。『語類』卷一一五、四九条、訓甘節（VII 286）「若有箇高妙底道理而聖人隱之、便是聖人大無狀、不忠不信、聖人首先犯著。」

(2) 「好悪哀矜」『大学章句』伝七章「所謂齊其家在脩其身者、人之其所親愛而辟焉、之其所賤惡而辟焉、之其所畏敬而辟焉、之其所哀矜而辟焉、之其所敬而辟焉。故好而知其惡、惡而知其美者、天下鮮矣。」

(3) 「壯祖錄疑同聞別出」一二七条（李壯祖）を指す。

127条

問。心者、身之主。意者、心之發。意發於心、則意當聽命於心。今日意誠而后心正、則是意反為心之管束矣、何也。曰。心之本體何嘗不正。所以不得其正者、蓋由邪惡之念勃勃而興、有以動其心也。譬之水焉、本自瑩淨寧息、蓋因波濤洶湧、水遂為其所激而動也。更是大學次序、誠意最要。學者苟於此一節分別得善惡、取舍、是非分明、則自此以後、凡有忿懣、好樂、親愛、畏敬等類、皆是好事。大學之道、始不可勝用矣。

壯祖

〔校勘〕

○「身之主、…、心之發。意發於心、則意當聽命於心」朝鮮古写本は「身之主也、…、心之發也。既是意發於心、則意當聽命於心可也」に作る。

○「今日意誠而后心正」朝鮮古写本は「今」を「今而」に作り、「后」を「後」に作る。

○「善惡、取舍、是非」成化本、朝鮮整版本、朝鮮古写本は「善惡、是非、取舍」に作る。

○「壯祖」朝鮮古写本は「處謙」に作る。

〔訳〕

お尋ねした。「心は、身の主体である。意は、心の発したものである。意は心から発生したのであれば、意は心の命令に従うはずである。い

まは（つまり『大学』には）『意識にして后心正し』というので、これは意が逆に心の監督となるのですが、どうしてですか。（先生はおっしゃった。「心の本体はどうして正しくない時があるのか。その正しきを得られないのは、思うに、その邪惡の念が盛んに興り、そこでその心を動くようにしたのである。この状況を水に譬えれば、（水の）本体は澄んでいて動かないものであるが、思うに波が激しいために、水（の本体が）遂にそれに衝突されて動くようになったのである。更に『大学』の（諸工夫の）順序においては、誠意が最も肝要である。学ぶ者は、もしこの一段（つまり誠意）において善惡、取舍、是非をはっきりと分別することができれば、ここから以後は、「忿懣」「好樂」「親愛」「畏敬」等のようなものがあってもそれらは全て、皆正しいものとなるのであって、そうなるこそ『大学』の道は、始めて使い切れないものとなるのである。 李壯祖録

〔注〕

(1) 「管束」「拘束する」「監督する」の意。

(2) 「勃勃」盛んな様。

(3) 「本自瑩淨寧息」「本自」は、「本より」「元來」の意。

(4) 「忿懣、好樂、親愛、畏敬」『大学章句』伝の語（前条の注に既出）。

朱注「五者、在人本有當然之則、然常人之情惟其所向而不加審焉、則必陷於一偏而身不脩矣。」

(5) 「不可勝用」『孟子』「尽心」下「人能充無欲害人之心、而仁不可勝用也。人能充無穿踰之心、而義不可勝用也。」

128 条

問。心如何正。曰。只是去其害心者。 端蒙

〔校勘〕

○朝鮮古写本の卷一五には、この条が見えない。

〔訳〕

お尋ねした。「心はどうやって正しくするのですか。」(先生は)おっしゃった。「ただその心を害するものを除去するだけである。」程端

蒙録

129 条

或問正心修身。曰。今人多是不能去致知處著力、此心多為物欲所陷了。惟聖人能提出此心、使之光明、外來底物欲皆不足以動我、内中發出底又不陷了。 祖道

〔校勘〕

○「著」成化本、朝鮮古写本は「着」に作る。

○「此心多為物欲所陷了」朝鮮古写本には「欲」の字を欠く。

○「内中發出底又不陷了」朝鮮古写本にはこの後に「問。劉子云天地之中。程子云。天然自有之中。此中字同否。曰。天地之中、是未發

之中、天然自有之中、是時中。曰。然則天地之中是指道體、天然自有之中是指事物之理。曰。然。」と続く。『語類』卷一八、八六条、李閔祖録(Ⅱ 二二)「問。天地之中、天然自有之中、同否。曰。天地之中、是未發之中。天然自有之中、是時中。曰。然則天地之中是指道體、天然自有之中是指事物之理。曰。然。」

〔訳〕

ある人が正心、修身について質問した。(先生は)おっしゃった。「いまの人は、その多くが致知に力を注ぐことができず、その心は、多くが物欲によって(蔽われて)陥没してしまうのである。ただ聖人だけがその心を蔽われないようにして、それを光り輝かせることができ、外から来る物欲は皆我(が心)を動くようにすることができず、内から発して出たものはまた陥れられることはないのである。 曾祖道録

〔注〕

(1)「提出」「取り出す」の意であるが、ここでは、「心が物欲に蔽われないようにする」の意。「取り出す」の意として使われる用例に以下がある。『語類』卷九八、一一二条、淳録(Ⅶ 2529)「問、横渠物怪神姦書、先生提出守之不失一句、曰、且要守那定底。如精氣為物、游魂為變、此是鬼神定説。∴。」

130条

心纒不正、其終必至於敗國亡家。 侗

〔校勘〕

○諸本異同なし。

〔訳〕

心が少しでも正しくなければ、最終的には必ず国を失い家を亡ぼすようになるのだ。 沈僩録

〔注〕

(1)「纒(才)∴、其終∴」『語類』卷一一一、三二条、黄卓録(Ⅶ 2722)「只這裏才操縱少緩、其終便有此禍、可不慄慄危懼。」

131条

誠意正心章、一説能誠其意、而心自正。一説意誠矣、而心不可不正。問。修身齊家亦然否。曰。此是交會處、不可不看。又曰。誠意以敬爲先。 泳

〔校勘〕

○「誠意正心章」朝鮮古写本は冒頭、「問」字がある。

○「問修身齊家亦然否」朝鮮古写本は「問」字なし。

○「修身」万曆本、和刻本「脩身」に作る。

〔訳〕

「誠意・正心章は、一説では、その意を誠にすることができれば、心は自然と正しくなる、とし、また一説では、意が誠になっても心を正さなくてはならない、としています。お尋ねしますが、修身・齊家も同様でしょうか。」(先生が)仰った。「これは(二つの工夫が)交わるところだ。考えなければならぬ。」また仰った。「意を誠にするには敬を先にするのだ。」 湯泳録

〔注〕

(1)「一説能誠其意、而心自正。一説意誠矣、而心不可不正。」質問者は、朱子が「誠意」と「正心」の関係の捉え方について二つの異なる説き方をしていることを指摘している。前者のように「誠意」すれば自然と「正心」できると説くものとしては、卷一五、一一七条「格物者、知之始也。誠意者、行之始也。意誠則心正、自此去、一節易似一節。」を参照。後者のように「誠意」した後も「正心」に努めねばならないとするものとしては、卷一五、一一四条「康叔臨問。意既誠矣、心安有不正。曰。誠只是實。雖是意識、然心之所發有不中節處、依舊未是正。」卷一六、一二五条、輔廣録(Ⅱ 342)「或問正心、誠意章。先生令他説。曰。意誠則心正。曰。不然。這幾句連了又斷、斷了又連、雖若不相粘綴、中間又自相貫。譬如一竿竹、

雖只是一竿、然其間又自有許多節。意未誠、則全體是私意、更理會甚正心。然意雖誠了、又不可不正其心。…意既誠了、而其心或有所偏倚、則不得其正、故方可做那正心底工夫。」を参照。なお、『朱子語類』全体としては、後者のように「誠意」の後も「正心」に努めよ、とする趣旨の発言の方が多い。

(2) 「交會處」「交わるところ」、『語類』卷二、二十条、周謨録（I 18）「日月薄蝕、只是二者交會處、二者緊合、所以其光掩沒、在朔則爲日食、在望則爲月蝕。」

(3) 「誠意以敬爲先。」同様の発言としては以下を参照。『語類』卷一三、二三条、余大雅録（I 226）「方其當格物時、便敬以格之。當誠意時、便敬以誠之。」

132条

或問。正心、修身、莫有淺深否。曰。正心是就心上說、修身是就應事接物上說。那事不自心做出來。如修身、如絜矩、都是心做出來。但正心、却是萌芽上理會。若修身與絜矩等事、都是各就地頭上理會。

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一五は本条を収録しない。

○「或問、正心、修身、莫有淺深否」成化本、万曆本、呂留良本、朝鮮整版本、和刻本は「修身」を「誠意」に作る。劉氏伝経堂叢書本卷末附載「朱子語類正譌」には「修身莫、原作誠意、非。」とある。

○「都是各就地頭上理會」成化本、万曆本、呂留良本、朝鮮古写本、朝鮮整版本、和刻本は「都」を「却」に作る。「朱子語類正譌」には「都是各、原作卻、據周本改。」とある。

〔訳〕

お尋ねした。「正心、修身には浅深が有るのでしょうか。」答え。「正心というのは心について言うのだ。修身というのは事物に対処することについて言うのだ。一体どの事物が心が為さないといいのだろうか。修身や絜矩は全て心が為しているのだ。ただ、正心というのは（心が）兆すときに取り組むのだ。修身と絜矩などの事は、全て各々他者との関わりにおいて取り組むのだ。」記録者名欠

〔注〕

(1) 「莫有淺深否」「莫：否」は「…ではないか。」現代語の「不是…？」に同じ。卷一四、八五条、卷一五、六六条等に既出。

(2) 「那事不自心做出來」「那」はどんな、どの。

(3) 「絜矩」『大学章句』伝十章「所謂平天下在治其國者、上老老而民興孝、上長長而民興弟、上恤孤而民不倍、是以君子有絜矩之道也。」朱注「絜、度也。矩、所以爲方也。」

(4) 「正心、却是萌芽上理會」云々 正心と修身の対象を対比すれば、心は自己の内面に萌す動きなので萌芽的なもの、それに対して身は具体的な外貌や行動として外に現れるものとなる。「萌芽」は「四端」の譬喩としても用いられる。『語類』卷二十、九三条、潘植録（II

(45)「四端者、端如萌芽相似、惻隱方は從仁裏面發出來底端。」また、正心と修身を内外の關係で捉えた以下の条を参照。本卷一二五条「身對心而言、則心正是内。能如此修身、是内外都盡。」

(5)「各就地頭上理會」「地頭」は地点、場所、立場、場面。本卷三三条に既出。ここでは修身における「所親愛」「所賤惡」「所畏敬」「所哀矜」「所敖惰」(『大学章句』伝八章)、契矩における「上」「下」「前」「後」「左」「右」(『大学章句』伝十章)等、他者との具体的な関わりの場面を指す。

〔参考〕

○本条では、朱子は「正心」と「修身」には浅深はない、と考えているようであるが、「誠意」と「正心」の浅深を説くものとしては以下の問答がある。『語類』卷一五、一二四条「敬之間誠意、正心、修身。曰。若論淺深意思、則誠意工夫較深、正心工夫較淺。若以小大看、則誠意較緊細、而正心、修身地位又較大、又較施展。」

○『語類』卷一六、一六六条、林恪録(II 300)には本条とほぼ同内容の問答がある。「正卿問。大學傳正心、修身、莫有深淺否。曰。正心是就心上說、修身是就應事接物上說。那事不從心上做出來。如修身、如契矩、都是心做得出。但正心是萌芽上理會。若修身及契矩等事、却是各就地頭上理會。」

133条

毅然問。家齊、而后國治、天下平。如堯有丹朱、舜有瞽瞍、周公有管蔡、却能平治、何也。曰。堯不以天下與丹朱而與舜、舜能使瞽瞍不格姦、周公能致辟于管蔡、使不爲亂、便是措置得好了。然此皆聖人之變處。想今人家不解有那瞽瞍之父、丹朱之子、管蔡之兄、都不須如此思量、且去理會那常處。 淳

〔校勘〕

○「家齊而后國治」朝鮮古写本は「后」を「後」に作る。  
○「不解有那瞽瞍之父」万曆本、和刻本は「解」を「解」に作る。  
○「不須如此思量」万曆本「須」字無し。和刻本は「不」の一格に小字双行で「不須」の二字を補う。

〔訳〕

黄毅然が質問した。「『大学』の経文には）家が育って、それから国が治まって、天下が太平となる、とありますが、堯には丹朱がおり、舜には瞽瞍がおり、周公には管叔・蔡叔がおり、それでも国を治め天下を太平にしました。どういうことでしょうか。」(先生)「堯は天下を丹朱に与えず舜に与え、舜は瞽瞍を悪人に至らしめず、周公は管・蔡に退け反乱を為さしめなかつたのは、つまりうまく処置したということです。しかしこれらはどれも聖人における例外的な側面だ。思うに、今の人は家にかの瞽瞍のような父、丹朱のような子、管叔・蔡叔のよ

うな兄がいることはあり得ないから、全て必ずしもこのように考える必要はないのであって、あの常の所を取り組んでいきなさい。」陳淳録

〔注〕

(1) 「毅然」 黃義剛、字毅然。臨川の人、既出。

(2) 「堯有丹朱」「丹朱」は堯の子。『尚書』虞書「益稷」「禹曰：無若丹朱傲。惟慢遊是好。傲虐是作。罔晝夜頌頌。罔水行舟。朋淫于家用殄厥世。」

(3) 「舜有瞽瞍」「瞽瞍」は舜の父。『尚書』虞書「大禹謨」「禹曰。帝初于歷山。往于田。日號泣于旻天。于父母。負罪引慝。祇載見瞽瞍。夔夔齋慄。瞽亦允若。」

(4) 「周公管蔡」「管蔡」は管叔と蔡叔。ともに武王の弟。武王の死後、周公が成王の摂政となった際、周公に二心有りとの流言を広め、周公に討伐された。『書経』周書「金縢」「武王既喪、管叔及其群弟乃流言於國、曰。公(周公)將不利於孺子。周公乃告二公(召公、太公)曰。我之弗辟、我無以告我先王。周公居東二年、則罪人斯得。」孔安國伝「武王死、周公攝政。其弟管叔及蔡叔霍叔、乃放言於國、以誣周公、以惑成王。」

(5) 「堯不以天下與丹朱而與舜」『史記』卷一「五帝本紀」「堯知子丹朱之不肖、不足授天下、於是乃權授舜。授舜、則天下得其利而丹朱病。授丹朱、則天下病而丹朱得其利。堯曰。終不以天下之病而利一人、而卒授舜以天下。」

(6) 「舜能使瞽瞍不格姦」『書経』虞書「堯典」「岳曰。瞽子、父頑、母嚚、象傲、克諧以孝、烝烝乂不格姦。」蔡沈伝「言舜不幸遭此、而能和以孝、使之進進、以善自治、而不至於大為姦惡也。」

(7) 「周公能致辟于管蔡」『書経』周書「蔡仲之命」「惟周公位冢宰、正百工。群叔流言、乃致辟管叔于商、囚蔡叔于郭鄰、以車七、降霍叔于庶人、三年不齒。」孔安國伝「致辟、謂誅殺。囚謂制其出入。郭鄰、中國之外地名。從車七乘、言少管蔡國名。：罪輕、故退爲庶人、三年之後、乃齒錄、封爲霍侯。」蔡沈傳「致辟云者、誅戮之也。」

(8) 「聖人之變處」「變」「變處」は「常」「常處」に對應する概念で、イレギュラーな事態、場面。卷一五、五一条に既出。

(9) 「想今人家不解有那瞽瞍之父」「不解」はできない、あり得ない。本卷二二条に既出。「解」は「会」と同じく「」できる」。卷一四、二〇条に既出。

134条

壹是、一切也。漢書平帝紀一切、顏師古注、猶如以刀切物、取其整齊。泳

〔校勘〕

○諸本異同無し

〔訳〕

「壹是」というのは「一切」ということである。『漢書』平帝紀の「一切」の顔師古注に「ちようど刀で物を切ったようであり、切り口がそろってさえいれば、それでよしとするのである。」とある。湯泳録

〔注〕

(1) 「壹是」『大学章句』経「自天子以至於庶人、壹是皆以脩身為本。」朱注「壹是、一切也。」

(2) 「漢書平帝紀一切」『漢書』卷一二「平帝紀」元始元年春正月条に「賜天下民爵一級、吏在位二百石以上、一切滿秩如真。」とあり、これに対する顔師古の注に「一切者、權時之事、非經常也。猶如以刀切物、苟取整齊、不顧長短縱橫、故言一切。」という。また島田虔次『大学・中庸』上巻、七五頁に「ナイフで切ったようにでこぼこがなく、ずばりとそろっていることを言う」とある。

135条

李從之問。壹是皆以修身爲本、何故只言修身。曰。修身是對天下國家說。修身是本、天下國家是末。凡前面許多事、便是理會修身。其所厚者薄、所薄者厚、又是以家對國說。 勝

〔校勘〕

「修身是本、天下國家是末。」朝鮮古写本は「此是本、此是末」に作り、

〔勝〕以下、圈点の後に小字で「以下壹是皆以脩身為本」とある。

〔訳〕

李從之が質問した。『大學』の伝の「壹に是れ皆修身を以て本と爲す」は何故ただ修身とだけ言うのでしょうか。先生が仰った。「修身」というのは天下國家に対して言うのだ。「修身」は本であつて、天下國家は末だ。凡そ前半の多くの事（格物・致知・誠意・正心）も、つまりは修身に取り組むことを言っている。「其の厚くする所は薄く、薄くする所は厚し」というのは、家のことを國に対して（「厚くする所」は家、「薄くする所」は國を指す）いつている。 黄勝録

〔注〕

(1) 「李從之」『朱子門人』は李德之の訛とする（八四頁）。  
(2) 「壹是皆以修身爲本」『大学章句』経「自天子以至於庶人、壹是皆以脩身為本。其本亂而未治者否矣、其所厚者薄、而其所薄者厚、未之有也。」朱注「本、謂身也。所厚、謂家也。此兩節結上文兩節之意。」  
(3) 「修身是本、天下國家是末」『大学或問』「曰。自天子以至於庶人、壹是皆以脩身為本。其本亂而未治者、否矣。其所厚者薄而其所薄者厚、未之有也。何也。曰。此結上文兩節之意也。以身對天下國家而言、則身為本而天下國家爲末。以家對國與天下而言、則其理雖未嘗不一、然其厚薄之分亦不容無等差矣。」

(4) 「其所厚者薄、所薄者厚」『大学章句』経「其本亂而未治者否矣、其所厚者薄、而其所薄者厚、未之有也。」朱注「本、謂身也。所厚、



謂家也。此兩節結上文兩節之意。」

136条

問。大學解、所厚、謂家。若誠意正心、亦可謂之厚否。曰。不可。此只言先後緩急。所施則有厚薄。節

〔校勘〕

○「大學解」万曆本、和刻本は「解」を「解」に作る。

〔訳〕

お尋ねした。「大学の解釈に『厚くする所は家を謂う。』とあります。誠意正心につきましたも、これを『厚くする』と言うことができませんでしょうか。」先生が仰った。「できない。これはただ先後緩急のことを言うのだ。施す対象に厚薄があるのだ。」甘節録

〔注〕

(1)「大學解」中華書局標点本は「大學解」を書名として取る。『語類』卷一四、四五条には「或問。大學解已定否。」とある。ここでは一般名詞として取った。

(2)「此只言先後緩急」格物致知誠意正心はいずれも修身に属する事柄なので、工夫の先後緩急は言い得ても厚薄は言い得ない、の意。

(3)「其所厚者薄、所薄者厚」前条に既出。

137条

問。大學之書、不過明德、新民二者而已。其自致知、格物以至平天下、乃推廣二者、爲之條目以發其意、而傳意則又以發明其條目者。要之、不過此心之體不可不明、而致知、格物、誠意、正心、乃其明之之工夫耳。曰。若論了得時、只消明明德一句便了、不用下面許多。聖人爲學者難曉、故推說許多節目。今且以明德、新民互言之、則明明德者、所以自新也。新民者、所以使人各明其明德也。然則雖有彼此之間、其爲欲明之德、則彼此無不同也。譬之明德却是材料、格物、致知、誠意、正心、修身、却是下工夫以明其明德耳。於格物、致知、誠意、正心、修身之際、要得常見一箇明德隱然流行于五者之間、方分明。明德如明珠常自光明、但要時加拂拭耳。若爲物欲所蔽、即是珠爲泥濁、然光明之性依舊自在。大雅 以下總論綱領、條目

〔校勘〕

○「要得常見一箇明德」万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「箇」を「个」に作る。

○「隱然流行于五者之間」成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「于」を「於」に作る。

○「以下總論綱領條目」朝鮮古写本にはこの小注無し。

〔訳〕

質問。「『大学』の内容は明德と新民の二つに過ぎません。その致知

格物から平天下に至るまでは、つまりこの二者を押し広げ、この（明徳と新民とを敷衍した、格物から平天下までの八個の）条目を爲し、その意味を明らかにし、傳の意もまたその条目の意味を明らかにしています。要するに、この心の本体は明らかでないわけにはいかず、致知、格物、誠意、正心というのは、つまりこれを明らかにすることの工夫に過ぎません。」先生はおっしゃった。「もし了解してしまった時のことを論ずれば、ただ明明徳の一句だけでよく、後半の多くの工夫はいらない。聖人は学ぶ者が理解しにくいから、具に多くの節目を説いたのだ。今しばらく明徳新民という言葉を対比して言えば、明徳を明らかにするのは自ら新たにする方法だ。民を新たにするのは人にそれぞれ明徳を明らかにさせる方法だ。そうであれば、明徳と新民とは自己と他者の違いはあっても、明らかにしようとするところの徳の有り様は、自己と他者で異ならないのだ。これを例えるなら、明徳というのは工夫の対象なのであって、格物、致知、誠意、正心、修身というのは、工夫してその明徳を明らかにすることと他ならない。格物、致知、誠意、正心、修身の際において、明徳が五者の間で盛んに発動しているのをいつも意識できてこそ始めてよくわかるのだ。明徳とは、水晶が常に自ずと光り輝いていて、ただ間断なく（汚れを）ぬぐい去らなければいけないのと同じである。物欲によって覆われてしまうというの、水晶が泥まみれとなってしまふことに他ならないが、光り輝く本性は元のままあるのだ。」余大雅録 以下は三綱領と八条目をを総論する

〔注〕

- (1) 「推廣二者」朱子は八条目のうち格物乃至修身を明明徳と対応させ、齊家治国平天下を新民と対応させて解釈する。『大学章句』経朱注「脩身以上、明明徳之事也。齊家以下、新民之事也。」
- (2) 「此心之體不可不明」『大学章句』伝五章「衆物之表裏精粗無不到、而吾心之全體大用無不明矣。此謂物格、此謂知之至也。」
- (3) 「若論了得時」「了得」は了解、了悟の意。卷一四、八四條に既出。
- (4) 「只消明明徳一句便了」「消」は要する、必要とする。本卷五九條に既出。「便了」はそれでよい、十分だ。卷一四、四四條等に既出。『語類』卷一一、徐舛録（188）「今人讀書、多不就切己上體察、但於紙上看、文義上說得去便了。」
- (5) 「故推說許多節目」「推說」は詳細に説明する。卷一四、九〇條に既出。
- (6) 「明明徳者、所以自新也」『大学章句』伝二章「是故君子無所不用其極。」朱注「自新新民、皆欲止於至善也。」また『語類』卷一四、九四條には「明明徳於天下、自新以新其民、可知。」とある。
- (7) 「彼此之間」自己と他者の違い。『孟子』公孫丑上「子路、人告之以有過則喜。禹聞善言則拜。大舜有大焉、善與人同。舍己從人、樂取於人以為善。自耕、稼、陶、漁以至為帝、無非取於人者。取諸人以為善、是與人為善者也。故君子莫大乎與人為善。」朱注「此章言聖賢樂善之誠、初無彼此之間。故其在人者有以裕於己、在己者有以及於人。」
- (8) 「譬之明徳却是材料」「材料」はここでは「工夫すべき対象」を

言う。本卷一五、五二条にも工夫と関連しての「材料」の語が見える。  
(9)「要方」としてこそ始めて。三浦國雄『朱子語類抄』六八頁  
参照。

(10)「隱然流行」「隱」は「殷」に通じる。ここでは「殷然」の意として解した。「殷然」は「はつきりと」の意。

(11)「明德如明珠常自光明」「明珠」は水晶。朱子は好んで比喻に用いる。『語類』卷四、六八条、江泳録(I73)「理在氣中、如一箇明珠在水裏。理在清底氣中、如珠在那清底水裏面、透底都明。」

(12)「但要時加拂拭耳」間断なく心の汚れを拭い去らなければならぬ、の意。六祖慧能『壇經』の神秀の言に同様の表現が見える。「身是菩提樹、心如明鏡臺、時時勤拂拭、莫使惹塵埃。」テキストは『壇經校釈』(中華書局)に拠る。

138条

大學、在明明德、在新民、在止於至善、此三箇は大綱、做工夫全在此三句内。下面知止五句は說效驗如此。上面は服藥、下面是說藥之效驗。正如說服到幾日效如此、又服到幾日效又如此。看來不須說效亦得、服到日子滿時、自然有效。但聖人須要說到這田地、教人知明明德三句。後面又分析開八件、致知至修身五件、是明明德事。齊家至平天下三件、是新民事。至善只是做得恰好。後面傳又立八件、詳細剖析八件意思。大抵閑時喫緊去理會、須要把做一件事看、橫在胸中、不要放下。若理會得透徹、到臨事時、一一有用處。而今人多是閑時不喫緊理會、及到

臨事時、又不肯下心推究道理、只說且放過一次亦不妨。只是安于淺陋、所以不能長進、終於無成。大抵是不會立得志、枉過日子。且如知止、只是閑時窮究得道理分曉、臨事時方得其所止。若閑時不會知得、臨事如何了得。事親固是用孝、也須閑時理會如何爲孝、見得分曉、及到事親時、方合得這道理。事君亦然。以至凡事都如此。

又問。知止、是萬事萬物皆知得所止、或只指一事而言。曰。此徹上徹下、知得一事、亦可謂之知止。

又問。上達天理、便是事物當然之則至善處否。曰。只是合禮處、便是天理。所以聖人教人致知、格物、亦只要人理會得此道理。

又問。大學表裏精粗如何。曰。自是如此。粗是大綱、精是裏面曲折處。又曰。外面事要推闡、故齊家而后治國、平天下。裏面事要切己、故修身、正心、必先誠意、致知愈細密。

又問真知。曰。曾被虎傷者、便知得是可畏。未曾被虎傷底、須逐旋思量箇被傷底道理、見得與被傷者一般、方是。明作

〔校勘〕

- 「在新民」朝鮮古写本は「新」を「親」に作る。
- 「此三箇は大綱」万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「箇」を「个」に作る。
- 「做工夫全在此三句内」成化本は「工」を「功」に作る。
- 「是說效驗如此」朝鮮古写本は「效」を「効」に作る。以下同じ。
- 「正如說服到幾日效如此」朝鮮古写本は「日」の下に「其」字有り。
- 「但聖人須要說到這田地」朝鮮古写本は「但」字がなく、また「田地」

の下に「上」字有り。

○「後面又分析開八件」朝鮮古写本は「開」下に「做」字有り。

○「至善只是做得恰好」朝鮮古写本は「恰好」下に「處」字有り。

○「後面傳又立八件」朝鮮古写本は「件」を「段」に作る。

○「大抵閑時喫緊去理會」朝鮮整版本は「閑」を「聞」に作る。以下同じ。

○「横在胸中」成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「胸」を「曾」に作る。

○「而今人多是閑時不喫緊理會」朝鮮古写本は「喫緊」の下に「要」字有り。

○「只是安于淺陋」成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「于」を「於」に作る。

○「亦可謂之知止」成化本は「止」を「上」に誤る。

○「只是合禮處」朝鮮古写本は「禮」を「理」に作る。

○「亦只要人理會得此道理」朝鮮古写本は「只」字なし。

○「又問大學表裏精粗如何」朝鮮古写本は「又」字がない。成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「表裏」の上に「所謂」二字があり。朝鮮

古写本は「問大學所謂表裏精粗如何」以下を改行して別の一条として

いる。

○「精是裏面曲折處」万曆本、和刻本は「裏」を「裡」に作る。

○「裏面事要切己」万曆本、和刻本は「裏」を「裡」に作る。

○「須逐旋思量箇被傷底道理」万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「箇」を「个」に作り、朝鮮古写本は「被」下に「虎」字有り。

〔訳〕

『大学』の「明德を明らかにするに在り、民を新たにするに在り、至善に止まるに在り」の三つは大綱で、工夫をすることは全てこの三句の内にあるのである。この後の「止まるを知る」以下の五句は効果がこのようである、ということを言っている。前の部分は薬を飲むことで、後の部分は薬の効き目のことを言っている。ちょうど、(薬を)服用して何日目ではその効き目がこのようであり、また服用して何日目ではその効き目が更にこのようである、と言っているようである。考えてみれば、効果を説かなくてもよく、服用してその日に至れば、自然と効き目が現れるのだ。ただ、聖人はどうしてもこの地点に到ることを説こうとして、人に明明徳以下の三句を知らしめようとしているのだ。その後更に八つに分析するが、致知から修身までの五つが明明徳のことだ。齊家から平天下までの三つが新民のことだ。至善とは妥当にできる、ということに他ならない。後半の伝は更に八つを立て、詳細に八綱領の意味を明らかにしている。大抵何もしていないときも切実に取り組んでいき、必ず取り組むべき一つの事柄と見なし、心の片隅に留意しておいて、それをなおざりにしないようにするのだ。もし徹底的に取り組んでしまえば、事に臨む時に至っても、逐一対処できるのだ。今の人は暇なときは切実に取り組まず、事に臨む時に至っても心を下して道理を求めようとせず、ただ一度くらい投げやりにしてもかまわない、と言うのだ。これこそ未熟者で満足して成長できず、終に大成しない理由に他ならない。大抵志を立てることも無く、無駄に日々を過ごすのだ。例えば「止まるを知る」について言えば、暇な

ときに道理を極めて理解し、事に対処する時に止まる所を得ることが  
できるのだ。もしも暇なときに何一つ知り得たことがないならば、事  
に臨んでどうしてしつかりできようか。親に事えるのには当然「孝」  
を用いるが、暇なときに孝であるとはどのようなことを理解して、  
よくわかつて、親に事える時に及んで、始めてこの道理に合するのだ。  
君に事えるのも同様である。あらゆる事についても全てこのようであ  
る。

またお尋ねした。「『止まるを知る』というのは、万事万物それぞれ  
に止まる所を知る、ということでしょうか、それともただ一事を指し  
て言うのでしょうか。」答え、「上下に貫通して一つのことを知り得れ  
ば、これも『止まるを知る』とすることができ。」

また質問した。「天理に上達するというのは、つまり事物の当然の則、  
至善のある所なのでしょうか。」(先生) 答え「ただ礼に合う所だけが、  
天理なのだ。だから聖人が人に致知格物させるのも、ただこの道理を  
理解させようというだけだ。」

また質問した。「『大学』の表裏精粗とはどういうことでしょうか。」  
答え「文字通りだ。「粗」というのは大綱のことであり、「精」という  
のは内面の細々とした所だ。」また仰った。「外面の事は明らかにしな  
ければならない。だから、家をきちんと斉えた後、国を治め、天下を  
太平にするのだ。内面の事は己に切でなければならぬ。だから、身  
を修めて心を正すのに、必ずまず意を誠にして知を致すのはますます  
細密になるのだ。」

また、「真知」についてお尋ねした。答え「かつて虎に傷つけられ

た者は、虎が畏るべきものであるのを知っている。虎に傷つけられた  
ことがない者は、徐々にこの虎に傷つけられることの道理を考えて、  
傷つけられた者と同じように理解できて、始めて『真知』なのだ。」  
周明作録

〔注〕

(1) 「下面知止五句、是説效驗如此。」「知止」以下の五句を工夫の効  
験とする考え方については卷一四、二二一条、一六六条に既出。ま  
た「知止」は以下を参照。『大学章句』経「知止而后有定、定而后  
能静、静而后能安、安而后能慮、慮而后能得。」『大学章句』経「物  
格而后知至」朱注「物格知至、則知所止矣。意識以下、則皆得所止  
之序也。」

(2) 「看來不須説效亦得」「看來」は思うに。卷一四、八二条に既出。「得」  
は現代語の「行」(よい)にあたる。構わない。本卷六七条に既出。

(3) 「服到日子滿時」「日子」は日にち。本卷九五条に既出。

(4) 「田地」地点。三浦國雄『朱子語類抄』頁一七八参照。

(5) 「致知至修身五件、是明明德事。齊家至平天下三件、是新民事」  
『大学章句』経に対する注に、「脩身以上、明明德之事也。齊家以下、  
新民之事也。物格知至、則知所止矣。」とある。

(6) 「恰好」「妥當に」『語類』卷一四、一一四条に既出。

(7) 「喫緊去理會」「喫緊」は切実に。『河南程氏遺書』卷三、一条「鶩  
飛戾天、魚躍于淵、言其上下察也。此一段、子思喫緊為人處。」「去」  
は心理的な方向を表す助字。三浦國雄『朱子語類抄』三四頁。

- (8) 「須要把做一件事看」「須要」は「こ」では「必ず…しなければならぬ」の意。『語類』卷三三、四三条、葉賀孫録(Ⅲ 888)「問夫子欲見南子、而子路不説、何發於言辭之間如此之驟。曰。這般所在難説。如聖人須要見南子是如何、想當時亦無必皆見之理。」また「把做一件事看」は「取り組むべき一つの事柄と見なす」の意。ここでは無事の時には漫然と打ち過ごさず、工夫に取り組め、ということの意味する。以下は逆に否定的な用例。『語類』卷二二、二二九条、葉賀孫録(I 215)「敬、莫把做一件事看、只是收拾自家精神、專一在此。」
- (9) 「閑時」暇な時、何事もない時。「臨事」「有事」と対を為す。「無事」に同じ。『語類』卷三四、九三条(Ⅲ 876)「蓋閑時已自思量都是了、都曉得了、到有事時又更審一番。」「語類」卷一一〇、三一条、葉賀孫録(Ⅶ 2894)「若閑時不思量義理、到有事而思、已無及。」
- (10) 「横在」「心の片隅に留意する」の意。「横在」+「心を表す語」で『語類』に散見。『語類』卷二二、三条、黃卓録(Ⅶ 2917)「讀書須是成誦、方精熟。：蓋這一段文義横在心底、自是放不得、必曉而後已。」
- (11) 「不要放下」「放下」は放置する、捨て置く、なおざりにする。
- (12) 「又不肯下心推究道理」「下心」は他に用例がないが、「著心」「用心」と同じく心掛ける、留意するの意か。
- (13) 「所以不能長進」「長進」は進歩。卷一四、二七条に既出。
- (14) 「枉過」無駄に過ぐす。『語類』卷八、二七条、鄭可學録(I 133)「自開闢以來、生多少人、求其盡己者、千萬人中無一二、只是衰同枉過一世。」
- (15) 「臨事如何了得」「了得」は「うまくいく」「成し遂げる」『語類』卷八、四八条、游敬仲録「凡人便是生知之資、也須下困學、勉行底工夫、方得。：若不下工夫、如何會了得。」
- (16) 「徹上徹下」「最上端から最下端に至るまで」本卷二六条に既出。
- (17) 「上達天理」『論語』憲問「子曰、不怨天、不尤人。下學而上達。知我者其天乎。」「集注」は程子説を引き、以下のように言う。「又曰。學者須守下學上達之語、乃學之要。蓋凡下學人事、便是上達天理。然習而不察、則亦不能以上達矣。」
- (18) 「大學表裏精粗」「大学章句」伝五章「是以大學始教、必使學者即凡天下之物、莫不因其已知之理而益窮之、以求至乎其極。至於用力之久、而一旦豁然貫通焉、則衆物之表裏精粗、無不到、而吾心之全體大用、無不明矣。此謂物格、此謂知之至也。」本卷二四条「精粗大小」の注を参照。
- (19) 「推闡」明らかにする。『語類』卷一〇一、九五条、楊方録(Ⅶ 2925)「和靖諳當。又云。就諸先生立言觀之、和靖持守得不失。然才短、推闡不去、遇面生者、説得頗艱。」
- (20) 「切己」本卷一三条に既出。
- (21) 「真知」本卷二条、八八条に既出。
- (22) 「逐旋」徐々にの意。『語類』卷十、四八条、余大雅録(I 167)「讀書是格物一事。今且須逐段子細玩味、反來覆去。：如此逐旋捫去、捫得多後、脚見頭頭道理都到。」とある。『語類訳注』読書法、五七頁ではこの条の注で「逐旋」は「格物」の縁語関係にあると指摘する。

格物、致知、是求知其所止。誠意、正心、修身、齊家、治國、平天下、是求得其所止。物格、知至、是知所止。意誠、心正、身修、家齊、國治、天下平、是得其所止。大學中大抵虚字多。如所謂「欲」、「其」、「而后」、皆虚字。「明明德、新民、止於至善」、「致知、格物、誠意、正心、修身、齊家、治國、平天下」、是實字。今當就其緊要實處著工夫。如何是致知、格物、以至於治國、平天下、皆有節目、須要一一窮究著實、方是。道夫

## 〔校勘〕

○「著工夫」「著實」の「著」成化本、萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「着」に作る。

○「以至於治國」の「于」成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「於」に作る。

## 〔訳〕

「格物」「致知」は、止まるべき所を知ろうとすること。「誠意」「正心」「修身」「齊家」「治國」「平天下」は、止まるべき所を得ようとすることだ。「物格」「知至」は、止まるべき所を知ったのであり、「意誠」「心正」「身修」「家齊」「國治」「天下平」は、止まるべき所を得たのだ。『大學』の中にはおおよそ虚字が多い。いわゆる「欲」「其」「而后」などは、皆虚字である。「明明德」「新民」「止於至善」「致知」「格物」「誠意」「正

心」「修身」「齊家」「治國」「平天下」は実字である。今諸君は肝心な実なるところについて工夫をすべきで、「致知、格物」から「治國、平天下」に至るまで、それぞれどのようなことなのかという、すべて条目があり、一つ一つそれらを着実に窮め尽くさなければならぬ。楊道夫録

## 〔注〕

(1)「格物、致知、是求知其所止。誠意、正心、修身、齊家、治國、平天下、是求得其所止。」『大學或問』には、「格物、致知、所以求至善之所在。自誠意以至於平天下、所以求得夫至善而止之也。」とある。また、『大學章句』には、「物格知至、則知所止矣。意誠以下、則皆得所止之序也。」とある。

(2)「虚字」と「實字」朱熹は、具体的な動作や内容を含まない文字・語句を幅広く「虚字」と称し、逆に具体的な動作・内容などを含むものを「実字」と称している。そのことは、本条の後文で「実字」を「緊要實處」と言い換えていることから確認できる。『漢語大詞典』では「虚字」を「即虚詞。指不能单独成句、意義比較抽象、而具有一定語法意義的詞(虚詞。单独では句を成すことができず、意味も抽象的であるが、一定の語法上の意味を有する言葉)。」と説明し、介詞(前置詞)、連詞(接続詞)、助詞などがそれに当たるとする。しかし、所謂「品詞」を予め固定しておくことのできない漢語(漢字)の基本的性格から、「虚字」「実字」を品詞にたよって区別することは、時にはずれになりかねない。「品詞」にこだわらず、便宜的且つ流動的に理解しなければならぬ。たとえば、「中」は虚字、「理」

是實字、故中所以狀性之體段。」(卷六二、一三一条、董銖録。IV 1512)のように、本来、ありよう・状態を示す「中」(『中庸章句』第一章「喜怒哀樂之未發、謂之中」も名詞として用いられており、しかも「虚字」とされる。

(3)「節目」 条目。卷一四の三八条に既出。

(4)「就其緊要實處著工夫」 「著」は「行、用いる」の意。

(5)「須要…、方是。」 「須(是) …始得」に同じ。「…してこそよい」「ぜひとも…せねばならない」の意。

140条

自「欲明明徳於天下」至「先致其知」、皆是隔一節、所以言欲如此者、必先如此。「致知在格物」、知與物至切近、正相照在。格物所以致知、物才格、則知已至。故云在、更無次第也。 閔祖

〔校勘〕

○「先致其知」の「知」 朝鮮古写本は「智」に作る。

〔訳〕

「欲明明徳於天下」から「先致其知」までは、みな「…欲する者は」の句を間に入れており、こうこうしようとするなら、その前にこのようにする必要があると説明する方法である。(次の)「致知在格物」は、(こちらの) 知と(あちらの) 物とが極めて近く、相い照応する状態だ。

格物は致知の手段。物が至ったなら、(こちらの) 知はもうすでに成り立っている。だから「在」というのは全く順序次第はない。 李閔祖 録

〔注〕

(1)「皆隔一節」 原文の「古之欲明明徳於天下者、先治其国。欲治其国者、先齊其家。欲齊其家者、先脩其身。欲脩其身者、先正其心。欲正其心者、先誠其意。欲誠其意者、先致其知。」は、すべて「欲…者、先—」という構造になっている。朱子はこの文章構造を、竹が節で隔てられているように、八条目中の誠意から平天下の各条目が互いに実践項目として独立しており、漸進的段階的であると解している。次条に言う「有等級」と同方向の表現。

なお、「隔一節」という表現は、尸を祭る時の「隔一位」を意識しているのかも知れない。『語類』卷九〇、第六八条、黄義剛録(VI 2310)「古者立尸必隔一位。孫可以為祖尸、子不可以為父尸。」

(2)「切近」 『易』剥卦六四に「象曰、剥牀以膚、切近災也」とある。『漢語大詞典』は「貼近(接近・近接する)、相近(距離が近い)」と解している。ここでは、下句の「正相照」とともに、ほとんど合わさっているかのような密接さ・緊密さを表すものと解した。次条の「親切」(注(2))を参照。

(3)「正相照在」の「在」 句末に用いる語で、「焉」に同じ。

(4)「相照」 「異なるものが」呼応し一致する」の意と解される。 卷八六、第五五条、陳淳録(VI 2221)「子由古史論得也忒煩、前後



都不相照。」また、以下の「相照應」「相照管」の用例も同様に解してよいと思われる。卷八四、第六条、沈憫録（VI 2178）「只是發揮不出、首尾不相照應。」卷八七、第四六条、林夔孫録（VI 2233）「蓋當時疏是兩人做、孔穎達賈公彥。故不相照管。」卷一〇五、第三六条、葉賀孫録（VII 2630）「元來許多長段、都自首尾相照管、脈絡相貫串。」卷一三〇、第一二六条、李儒用録（VIII 3126）「溫公之說、前後自不相照應」、卷一四〇、第六二条、吳雉録（VIII 3332）「金碧相照。」

141条

大學「明明德於天下」以上、皆有等級。到致知格物處、便較親切了、故文勢不同、不曰「致知者先格其物」、只曰「致知在格物」也。「意識而后心正」、不說是意識了便心正、但無詐偽便是誠。心不在焉、便不正。或謂但正心、不須致知、格物、便可以修身、齊家、却恐不然。聖人教人窮理、只道是人在善惡中、不能分別得、故善或以為惡、惡或以為善。善可以不為不妨、惡可以為亦不妨。聖人便欲人就外面攔截得緊、見得道理分明、方可正得心、誠得意。不然、則聖人告顏子、如何不道非禮勿思、却只道勿視聽言動。如何又先道「居處恭、執事敬」、而後「與人忠」。「敬」字要體得親切、似得箇「畏」字。

銖記先生嘗因諸生問敬宜何訓、曰、「是不得而訓也。惟『畏』庶幾近之。」銖云、「以『畏』訓『敬』、平淡中有滋味。」曰、「然。」榦

〔校勘〕

- 「以上」の「上」成化本では「上」に見える。
- 「却恐不然」「却只道勿視聽言動」の「却」劉氏伝経堂叢書本は「卻」に作る。
- 「只道是人在善惡中」の「惡」万曆本、和刻本は「惡」を「賽」に作る。以下本条中の「惡」は全て同じ。
- 「只道是人在善惡中」の下 朝鮮古写本には「時」の一字あり。
- 「惡可以為亦不妨」 朝鮮古写本は「亦」一字を欠く。
- 「非禮勿思」の「禮」万曆本、和刻本は「礼」に作る。
- 「如何又先道」の「又」 朝鮮古写本は「文」に見える。
- 「似得箇畏字」の「箇」 萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「个」に作る。

〔訳〕

『大學』の「明明德於天下」までの句は、すべて段階的である。「致知格物」の句に至って（両者の関係は）かなり緊密なものとなる。だから、文章の勢いが違ってきて、「知を致す者は先ず其の物に格る」とは言わずに、ただ「知を致すは物に格るに在り」と言ったのである。「意識而后心正（意識にして而る后心正し）」とは、意が誠であればただちに心が正しいと云うのではない。偽りや作為のないのが誠で、「心」がここになければ、もうそれで正しくはない。「心を正しくする」だけで「致知格物」などなくとも「修身・齊家」ができるという者もい

るが、それは間違っているであろう。聖人が人に「理を窮める」ことを教えたのも、ただ、人は善悪の中にあつてその善悪を分別できないから、それ故に善を悪とはき違えたり悪を善とはき違えたりし、また善を為さずともかまわない、悪を為してもかまわないなどと考へてしまうことにもなるのだ、ということを描したかったからに他ならない。聖人は、人が外面では（善悪・礼非礼を）きつちりと切り分けて、道理をはっきりと見きわめることを望んでいる。そうしてこそ心を正すことができ、意を誠にすることができる。そうでなければ、聖人孔子が顔回に告げるのに、どうして「礼に非ざれば思うこと勿かれ」と言われずに、「（礼に非ざれば）視ること勿かれ、聴くこと勿かれ、言うこと勿かれ、動くこと勿かれ」と言われたのか。どうしてまた、先に「日常の行為は恭しく、事にたずさわっては敬しく」と言つて、その後「人と交わつては忠に」とだけ言われたのか。（この）「敬」の字は切実に体認しなければならぬ、「畏」の字のようなものだ。

董誥の記録に、先生はかつて、諸門生の敬の字はどのように訓誥することができましかとの問いに、「これは訓誥することはできない。ただ『畏れる』がほほこれに近い」と言われた。董誥が『畏』で『敬』を読み換えますと、平易で淡い中にも滋味があります」と言つと、（先生が）「そうだ」と言われた。とある。 黄榦録

## 〔注〕

（1）「大學明明徳於天下以上」「明明徳於天下」は八条目の冒頭に位置する語。こゝではこの句以下の八条目を指すものと思われる。

「以上」が「以下」とほぼ同義で用いられている用例としては本巻八六条の「致知誠意以上、工夫較省。」が有る。

（2）「便較親切」「親切」は緊密・密接。格物と致知の関係が緊密で連続的であるとの意。前条の「切近」と同義。また、前条に言う「隔一節」や本条直前の「皆有等級」と対照を為す表現である。巻一五、三六条、五一条に既出。

（3）「意識而后心正、不説は意識了便心正」「意識」と「心正」を「而后」で結べば両者は段階的漸進的な関係、「便」で結べば両者は連続的一体的な関係になる。このような表現上の対比に関しては、本巻八三条の「物格而后知至一句、或謂物格而知便至。」を参照。

（4）「但無詐偽便是誠。心不在焉、便不正。」「意識」と「心正」が実現されるにはそれぞれ「無詐偽」「心在焉」という要件が満たされる必要がある、「意識」が実現すれば自動的に「心正」が実現するわけではない、という意。

（5）「心不在焉」「大學章句」「伝七章」「心不在焉、視而不見、聽而不聞、食而不知其味。」「焉」（ここ）は、今現に取り組んでいるその当の事柄を指す。

（6）「善可以不為不妨、惡可以為亦不妨」類似の表現が本巻九四条にある。「少間説便為惡也不妨、便是意不誠。」

（7）「就外面」自己の内面の工夫に対する外面の工夫を言う。「内」「外」については、六六条、注（3）を参照。

（8）「攔截」さなぎり断つ、切り分けるの意。『語類』には本条を含めて八例ある。二つ挙げておく。巻一一、三四条、周謨録（1203）「天

下只是善惡兩端。譬如陰陽在天地間、風和日暖、萬物發生、此是善底意思。及群陰用事、則萬物彫悴。惡之在人亦然。天地之理固是抑遏陰氣、勿使常勝。學者之於善惡、亦要於兩夾界處攔截分曉、勿使纖惡間絕善端。動靜日用、時加體察、持養久之、自然成熟。」卷一二六、四八条、黃榦錄（Ⅷ 3019）「問釋氏入定、道家數息。曰。他只要靜、則應接事物不差。孟子便也要存夜氣、然而須是理會『且晝之所為』。曰。吾儒何不使他恁地。曰。他開眼便依舊失了、只是硬把捉。不如吾儒非禮勿視聽言動、戒慎恐懼乎不睹不聞、『敬以直內、義以方外』、都一切就外面攔截。…」

(9) 「聖人告顔子：」『論語』「顔淵」「子曰。克己復禮爲仁。一日克己復禮、天下歸仁焉。爲仁由己、而由人乎哉。顔淵曰。請問其目。子曰。非禮勿視。非禮勿聽。非禮勿言。非禮勿動。顔淵曰。回雖不敏、請事斯語矣。」

(10) 「非禮勿思」孔子は内面のために外面を重んじた、と朱子は解している『語類』卷二二〇、七二条、滕璘錄（Ⅶ 2004）「夫子對顔子克己復禮之目、亦只是就視聽言動上理會。凡思慮之類、皆動字上包了、不會更出非禮勿思一條。蓋人能制其外、則可以養其內。固是內是本、外是末。但偏說存於中、不說制於外、則無下手腳處、此心便不實。外面儘有過言過行、更不管、卻云、吾正其心、有此理否。」

(11) 「先道居處恭：」『論語』「子路」「樊遲問仁。子曰。居處恭、執事敬、與人忠。雖之夷狄、不可棄也。」朱熹集注「恭主容、敬主事。恭見於外、敬主乎中。」

(12) 「敬字要體得親切、似得箇畏字。」「敬」を「畏」と結びつけて

説明する例は『語類』中に頻出する。『語類』卷六、六一條、程端蒙錄（Ⅰ 103）「誠只是一箇實、敬只是一箇畏。」卷二二、九八条、劉砥錄（Ⅰ 211）「敬非是塊然兀坐、耳無所聞、目無所見、心無所思、而後謂之敬。只是有所畏謹、不敢放縱。如此則身心收斂、如有所畏。常常如此、氣象自別。存得此心、乃可以爲學。」卷一二、九九条、欠名（Ⅰ 211）「敬不是萬事休置之謂。只是隨事專一、謹畏、不放逸耳。」など。

(13) 「鉢」董銖、字叔重。朱熹の古參の門人。三浦國雄書一〇八頁参照。

(14) 「平淡中有滋味」「平淡」は平靜。「滋味」は味わい、奥深さ。卷一四、三四条に既出。『語類』中、同意の表現は卷一九、八六条、陳淳錄（Ⅱ 442）「論語中、程先生及和靖說、只於本文添一兩字、甚平淡、然意味深長、須當子細看。要見得它意味、方好。」卷二六、九三条、黃義剛錄（Ⅱ 663）「衆朋友共說『士志於道』以下六章畢、先生曰。『此數章如尹和靖程子所注、只於本文添一兩字。看著似平淡、子細去窮究、其味甚長。』などに見える。なお、「平淡」は、宋詩の重要な特徴であるとされる。吉川幸次郎氏は、「平靜」（平淡）が宋詩の性質の一つ、重要な地色であるとして、宋詩の創始者の一人梅堯臣の目標が「平淡」にあったことを指摘された。その例として梅堯臣の「作詩無古今、唯造平淡難（詩を作るに古今無し、唯だ平淡に造ること難し）」の句を挙げられた。（吉川幸次郎『宋詩概説』序章「宋詩の性質」第九節「平靜の獲得」四九頁）、『中国詩人選集二集一』岩波書店、一九六二年。）また、「平淡」について、和田

英信「平淡について…唐詩と宋詩に関わるいくつかのこと」(『信州  
大学教養部紀要』26、三三頁～五四頁、一九九二年)を参照。

142条

「欲明明徳於天下者先治其國、至致知在格物。」「欲」與「先」字、  
謂如欲如此、必先如此、是言工夫節次。若「致知在格物」、則致知便  
在格物上。看來「欲」與「先」字、差慢得些子、「在」字又緊得些子。  
履孫。

〔校勘〕

○「欲明明徳…」朝鮮古写本、この前に「古之」の二字有り。

○「又緊得些子」の「又」朝鮮古写本、「文」に見える。

〔訳〕

「欲明明徳於天下者先治其國」から「致知在格物」まで。「欲」と「先」  
の字は、もしこのようにしようとするなら、その前にこうこうする必  
要があることを言い、工夫の順次を言う。(「在」を用いて)「致知は  
格物に在り」としたのは、致知はとりもなおさず格物という工夫のう  
ちにこそ在るということだ。思うに、「欲」と「先」の字では条目と  
条目の結びつきは少しゆるやかで、「在」の字だとやや緊密になる。

潘履孫録

〔注〕

(1)「謂如欲如此、必先如此」本卷一四〇条にも「欲如此者、必先  
如此」とある。

(2)「看來」思うに。卷一四、八二条に既出。

(3)「差慢得些子」「又緊得些子」「差」は、やや、いささか。「些子」  
も、やや、いささか。「慢」は緩慢、ゆるやか。「緊」は緊密。条目  
間の連接の度合いについて言う。本条における「慢」と「緊」は、  
一四〇条における「隔一節」と「切近」に対応する。

143条

大學言「物格而后知至、止天下平。」聖人説得寛、不説道能此即能彼、  
亦不説道能此而後可學彼。只是如此寛説、後面逐段節節更説、只待人  
自看得如何。振

〔校勘〕

○朝鮮古写本、卷一五にこの条無し。

〔訳〕

『大學』に言う「物格而后知至」から「天下平」までは、聖人はゆ  
るやかに説かれ、これができれば即座にあげができるとおっしゃら  
ず、これができてその後であれを学ぶことができるとも言われていな  
い。(八条目までは)ただこのようにゆるやかに説いて、後の伝の文

で順次段階を遂つて一節一節と説いて、学ぶ者が自らどのように見きわめるかに任せるのである。呉振録。

〔注〕

(一)「説得寛」ゆるやかに。大まかに。聖人の言葉をこのようにとらえている例としては、『語類』卷六九、三六条、董伯羽録(V 1716)「大凡人學、須是見到自住不得處、方有功。所以聖人説得恁地寛、須是人自去裏面尋之、須是知得、方能忠信。」などがある。「寛」は「切」「緊」の対義語。

144条

蔡元思問。大學八者條目、若必待行得一節了、旋進一節、則沒世窮年、亦做不做。看來日用之間、須是隨其所在而致力、遇著物來面前、使用格。知之所至、使用致。意之發、使用誠。心之動、使用正。身之應接、使用修。家使用齊。國使用治、方得。曰。固是。他合下便說『古之欲明明德於天下』、便是就這大規模上說起。只是細推他節目緊要處、則須在致知、格物、誠意、進遷做將去云云。又曰、有國家者、不成說家未齊、未能治國、且待我去齊得家了、却來治國。家未齊者、不成說身未修、且待我修身了、却來齊家。無此理。但細推其次序、須著如此做。若隨其所遇、合當做處、則一齊做始得。 備

〔校勘〕

○「遇著物來面前」「須著如此做」の「著」成化本、萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「着」に作る。

○「却來治國」の「却」、劉氏伝経堂叢書本「卻」に作る。

〔訳〕

蔡念誠(字元思)が問うた。『大学』の八条目は、もし、必ず一節(一項目)を實踐できるようになつて、それで次の一節に進むというのなら、死ぬまでやり終えられません。思うに、日々の生活では、八条目に相当する事柄の場面場面で努力するべきであつて、物がわが面前にやつて来るのに遭遇したら、ただちに「いた格る」工夫をする。知の至る場面では「致す」工夫をする。意が発動する時、ただちに「誠にす」工夫をし、心が動く時にただちに「正す」工夫をする。我が身を以て対応する時にただちに「修める」工夫をする。家には「斉える」工夫を、国には「治める」工夫をする。このようにあるべきです、と。先生は言われた。まことにその通り。八条目ではまず最初に「古之欲明明德於天下」と説くが、これはこの大きな枠から説き起こしたのである。ただし、細かくその条目の急所を推し極めるならば、致知、格物、誠意などの綱目上で、つらなりつづくままに工夫をしていかなければならない云々と。また、言われた。国、家をたも有つ者は、まさか、家がととの齊わないうちは国を治められないから、しばらくは私を家を斉えることに向かい、斉えられるようになるまで待つて、それから国を治めることに向かうのだ、などとは言うまい。家がまだ齊わな

者は、まさかに、我が身がまだ修まらないから、しばらくは私が身を修め終わるのを待って、それから家を齊えに来る、などとは言うまい。このような理屈はない。ただ、細かく次序どおりに推行しようとするのなら、その次序通りに工夫しなければならない。もし（日常）遭遇する事柄に応じて工夫すべきことがらをいうのなら、その事柄について八条目のすべてを一齐に工夫しなければならない。 沈僩録

〔注〕

(1) 「蔡元思」 蔡念誠。元思は字。「朱子語類姓氏」に名はない。『宋元学案』は、名を「念成」、(江西) 徳安の人とする。白鹿洞に朱子に学び、朱子没後は朱子の高弟黄榦に学んだ(卷六九)。『語類』では他に卷三〇、四八条、陳淳録(Ⅲ 775)に登場する。陳榮捷『朱子門人』三三四頁参照。

(2) 「旋」 その時になって。卷一四、三八条の注(4)、及び同、一四五条の注(8)を参照。

(3) 「看來」 思うに。

(4) 「日用之間」 日々の生活。卷一四、七八条などに既出。

(5) 「遇著物來面前」 「著」は動作の持続を表す助字。本卷二四条に既出。

(6) 「没世窮年」 一生涯。『論語』「衛靈公」「子曰、君子疾没世而名不稱焉。」「荀子」「解蔽」「凡以知、人之性也。可以知、物之理也。可以知人之性、求可以知物之理、而無所疑止之、則没世窮年不能遍也。」

(7) 「合下」 最初から、本来。また、すぐに、さっそく、即座に。卷一四、三八条に既出。また、卷一五の三五条注(3)、五一一条注(1)、六三条の注(2)を参照。

(8) 「規模」 規模、スケール、枠組み、骨組み。卷一四、一条の注(3)を参照。

(9) 「迤邐」 つらなりつづくさま。また、斜めに進み行く様子で、山道をかなたこなたへつたい行くこと。『二程遺書』卷一七、一八条、伊川語「今之爲學者、如登山麓、方其迤邐、莫不闊歩、及到峻處、便浚巡。一本云、或以峻而遂止、或以難而稍緩。苟能遇難而益堅、聞過則改、何遠弗至也。」に見える。また、『近思録』為学篇は、この末尾を「及到峻處、便止。須是要剛決果敢以進。」として載せる。

(10) 「不成」 まさか：ではあるまい。卷一四の二四条、六〇条、一二四条注(10)、一六二条注(1)、卷一五、二八条注(4)、四九条注(2)に既出。三浦國雄『朱子語類抄』三九頁参照。

(11) 「不成説家未齊、未能治國、且待我去齊得家了、却來治國。」類似的発言として本卷九五条に「説為學次第、曰。本末精粗、雖有先後、然一齊用做去。且如致知格物而後誠意、不成説自家物未格、知未至、且未要誠意、須待格了知了、却去誠意。安有此理。」

(12) 「須著」 必ず：しなければならぬ。卷一四、三二条の注(1)を参照。

大學自致知以至平天下、許多事雖是節次如此、須要一齊理會。不是說物格後方去致知、意誠後方去正心。若如此說、則是當意未誠、心未正時、有家也不去齊、如何得。且如「在下位不獲乎上」數句、意思亦是如此。若未獲乎上、更不去治民、且一向去信朋友。若未信朋友時、且一向去悅親、掉了朋友不管。須是多端理會、方得。許多節次、聖人亦是略分箇先後與人知、不是做一件淨盡無餘、方做一件。若如此做、何時得成。又如喜怒上做工夫、固是。然亦須事事照管、不可專於喜怒。如易損卦「懲忿窒慾」、益卦「見善則遷、有過則改」、似此說話甚多。聖人却去四頭八面說來、須是逐一理會。身上許多病痛、都要防閑。明作

## 〔校勘〕

- 「且一向去悅親」の「悦」 成化本、万曆本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「説」に作る。
- 「略分箇先後與人知」の「略」、「箇」 成化本、万曆本、和刻本は「略」を「畧」に作る。万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「箇」を「个」に作る。
- 「淨盡無餘」の「淨盡」 朝鮮古写本は「盡盡」に作る。
- 「聖人却去」の「却」 劉氏伝経堂叢書本「卻」に作る。

## 〔訳〕

『大学』の「致知から平天下」までは、多くの工夫すべき事はその

順次階梯は書いてある通りだが、(どれも)一斉に取り組まなくてはならない。物がやって来た後にはじめて致知に向かい、意が誠となった後にはじめて「正心」に向かうなどと言っているのではない。もしこのように言うなら、意がまだ誠にならず、心がまだ正しくなっていない時には、家が有るのにととの齊えようとはしないことになり、それで良いはずはない。たとえば、『中庸』の「下位に在りて上に獲られず」以下の数句は、その意図はやはりこのようなものだ。上位者からの信任を得ていないうちは、まったく民を治めようとはせず、ひたすら朋友から信じてもらおうとする。朋友から信じてもらえない時には、ひたすら親を悦ばせようとして、朋友を捨て去って放っておく(としたら、それで良いはずはない)。多方面にわたって取り組んでこそよいのだ。多くの節目次序は、聖人はやはり大まかに工夫の先後を分けて人に知らしめたのであって、一つのことをきれいさっぱりやりつくして初めて次の一つの事柄に取り組め、ということではない。もしそのような取り組んで行くのなら、いつになったら成就できようか。また、喜怒の感情に(心が動いて)いるその時に工夫するというのは、まことにその通りだ。しかし、やはり事々に(感情を)制御するべきで、喜怒の感情に任せてはいけない。『周易』「損」の卦(の象伝)の「いか忿りをこ懲らしよく慾をふさ窒ぐ」、「益」の卦(の象伝)の「善を見れば則ち遷り、過ち有れば則ち改む」など、このような話は大変多い。聖人は万事にわたって説いてくださっているのであるから、一つ一つ取り組まなければならない。こちらの身に支障が多くとも、すべて防ぎ止めなければならない。 周明作録

〔注〕

(1) 「不是説物格後方去致知」「去」は心理的な方向を表す助字。本卷一三八条に既出。

(2) 如何得 どうしてできようか、いやできない。(それで) 良いはずはない。卷一四、四三条の注(5) 参照。

(3) 「且如」たとえ、かりに。たとえば。本卷四七条の注(4)、五二条の注(10)、五四条の注(4)、六六条の注(4) を参照。

(4) 「意思」心、意図、意味。卷一四、二〇条の注(7) 参照。

(5) 「在下位不獲乎上」數句 『中庸』(章句第二十章) 「在下位不獲乎上、民不可得而治矣。獲乎上有道。不信乎朋友、不獲乎上矣。信乎朋友有道。不順乎親、不信乎朋友矣。順乎親有道。反諸身不誠、不順乎親矣。誠身有道。不明乎善、不誠乎身矣。」同内容の文章が『孟子』にあることは有名である。『孟子』離婁下「孟子曰、居下位而不獲於上、民不可得而治也。獲於上有道。不信於友、弗獲於上矣。信於友有道。事親弗悅、弗信於友矣。悅親有道。反身不誠、不悅於親矣。誠身有道。不明乎善、不誠其身矣。」

(6) 「一向」ひたすら、専ら、ずっと。卷一四、四三条、五二条の注(1)、同一一五条の注(7)、及び、三浦國雄『朱子語類抄』一二三頁を参照。

(7) 「掉了朋友不管」「掉」は捨て置く、後回しにする。『語類』卷六二、四條、陳淳録(IV 149)「某説箇讀書之序、須是且著力去看大學、又著力去看論語、又著力去看孟子。看得三書了、這中庸半截都了。…不可掉了易底、却先去攻那難底。中庸多説無形影、如鬼神、如天

地參等類、説得高。説下學處少、説上達處多。」

「不管」は顧みない。『語類』卷一一八、四九條(Ⅶ 2851)に「天下只有箇道理、聖人説許多說話、都要理會。豈可只去理會説仁處、不説仁處便掉了不管。」

(8) 「方得許多節次」伝経堂本は「方得。許多節次、」と読む。今これに従った。「須是…、方是」の呼応表現である。六七條、注(1) を参照。

(9) 「淨盡」余すところなく、すっかり。

(10) 「又如喜怒哀做工夫」ここでの「喜怒」は「正心」に関わる「喜怒哀懼」を指すものと思われる。『大学章句』伝七章「所謂脩身在正其心者、身有所忿懣、則不得其正。有所恐懼、則不得其正。有所好樂、則不得其正。有所憂患、則不得其正。」「大学或問」「或問。人之有心、本以應物、而此章之傳以爲有所喜怒哀懼便爲不得其正。然則其爲心也、必如槁木之不復生、死灰之不復然、乃爲得其正邪。」(11) 「照管」管理する、掌握する、制御する。卷一四、一八條の注(1) を参照。

(12) 「易損卦・益卦」『易』損卦象伝に「君子以懲忿窒慾」、益卦象伝に「君子以見善則遷、有過則改。」とある。

(13) 「四頭八面」あらゆる方面にわたって。『語類』に他に用例はないが、同意の類似表現に、本卷六八條の「四至八到」(同、注(2) 参照)、同じく九條及び一〇一條に「四方八面」の用例がある。

(14) 「病痛」欠陥、病弊、弱点。卷一四、五〇條の注(3) を参照。



問。知至了意便誠、抑是方可做誠意工夫。曰。也不能恁地說得。這箇也在人。一般人自便能如此、一般人自當循序做。但知至了、意誠便易。且如這一件事知得不當如此做、末梢又却如此做、便是知得也未至。若知得至時、便決不如此。如人既知鳥喙之不可食、水火之不可蹈、豈肯更試去食鳥喙、蹈水火。若是知得未至時、意決不能誠。

問。知未至之前、所謂慎獨、亦不可忽否。曰。也不能恁地說得。規模、合下皆當齊做。然這裏只是說學之次序如此。說得來快、無恁地勞攘、且當循此次序。初間欲明明德於天下時、規模便要恁地了。既有恁地規模、當有次序工夫。既有次序工夫、自然有次序功效。物格而后知至、知至而后意誠、意誠而后心正、心正而后身修、身修而后家齊、家齊而后國治、國治而后天下平。只是就這規模恁地廣開去、如破竹相似、逐節恁地去。

舛

〔校勘〕

- 「這箇也在人」 万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「箇を「个」」に作る。
- 「一般人」 万曆本、和刻本は、以下二出する「般」をいずれも「夢」に作る。
- 「豈肯更試去食鳥喙」 朝鮮古写本は「豈」を「反」に作る。
- 「所謂慎獨」 呂留良本、劉氏伝経堂叢書本を含めて、諸本は全て「慎」を「謹」に作る。南宋孝宗の諱「蜂」（慎の古字）の忌避。底本が意を以て改めたもの。

○「然這裏只是」 万曆本、和刻本は「裏」を「裡」に作る。

○「說得來快」 万曆本、和刻本は「來」を「来」に作る。

○「自然有次序功效」 朝鮮古写本は「效」を「驗」に作る。

○「物格而后知至、；國治而后天下平」 朝鮮古写本は「物格而后知至至國治而后天下平」に作る。

○「舛」 朝鮮古写本は記録者名を「淳」に作る。徐舛と陳淳とはそれぞれの第一次師事期（一一九〇～九一年）が重なっており、同席記録も存在するので、本条も両者のそれぞれが記録を残していた可能性がある。田中謙二『朱門弟子師事年攷』十「陳淳」十一「徐舛」の項を参照。

〔訳〕

質問。「知が至れば、それでもう意は誠になるのでしょうか、それとも、（知が至って）それではじめて誠意の工夫に取り組めるのでしょうか。」先生「そのような言い方をするのはやはりできないだろう。これはやはり人によりけりなのだ。そのようにできる（＝知が至れば、それでもう意は誠になる）人もいれば、（致知→誠意という）順番に従って行すべき人もいるのだ。ただし（いづれにせよ）知が至れば、意は容易に誠になるのだ。たとえばこれこれの事柄はどのように行すべきではない、と知っていないながら、結局はやはりそのような行ってしまうというの、それはつまり知ることがまだ至っていないからなのだ。もし知ることが至ったならば、決してそのようなことになりはしない。たとえばとりかぶと鳥喙は食べてはいけない、水や火の上を踏んでは

いけない、とわかつている以上、どうしてわざわざ鳥喙を食べてみようとし、水火を踏んでみようとするだろうか。もし知ることが至つていなければ、意は決して誠になることができないのだ。」

質問「知が至る前であつても、所謂慎独の工夫は、やはりおろそかにすべきではないのでしょうか。」先生「そのような言い方をすることはやはりできないだろう。(八条目という工夫の) 体系において、(個々の条目は) 元来、その全てを一齐に行うべきなのだ。けれどもここではただ、為学の順序次第とはこのようなものである、と説いているのだ。もしも手っ取り早く説いてしまふなら、こんな風にごたごたすることもないのだけれども、やはりまずはこの順序次第に従うべきなのだ。初っ端の「明德を天下に明らかにしよう」と欲する」の時点で、工夫の体系はそのようなものであることが要請されているのだ。すでにそのような体系が存在する以上、そこには当然、順序次第に沿った工夫が有つて然るべきなのだ。既に順序次第に沿った工夫が存在するからには、自ずと順序次第に沿った効験も存在するのだ。即ち「物に格つて後に知が至り、知が至つて後に意が誠になり、意が誠になって後に心が正され、心が正されて後に身は脩まり、身が脩まって後に家が斉い、家が斉つて後に国が治まり、国が治まって後に天下が平らになる。」ただこの体系に即してこのように範圍を拡大していくならば、あたかも竹を割る場合のように、一節ごとにこのように進んでいくのだ。 徐舛録

〔注〕

- (1) 「知至了意便誠、抑是方可做誠意工夫」「知至↓意識」が自動的  
に実現する、という方向の発言としては、本卷九八条の「知若至、  
則意無不誠。」が有る。一方、「知至」の後にも意の不誠が存在し得  
ることを問題にした条としては、本卷一〇七条「或問。知至以後、  
善惡既判、何由意有未誠處。」や、同一〇八条「問椿。知極其至、  
有時意又不誠、是如何。椿無對。」が有る。なお八条目の前項と後  
項の關係を「便」字を用いて表現することの当否を問題にした条と  
しては、同八三条「物格而后知至一句、或謂物格而知便至。」や  
一四一条「意識而后心正、不說是意識了便心正。」が有る。
- (2) 「也不能恁地說得」 そのような言い方をすることはやはりでき  
ないだろう。前者か後者か、人によつて異なるので一概には言えな  
い、との意。『朱子語類考文解義』「謂其義難說。固不可謂知既至則  
意自誠、亦不可謂知雖至而又用誠也。各隨其所學之如何、難以一  
定為說也」
- (3) 「一般人」「一般」は「ある種の」「一種の」。卷一四、二五條、  
卷一五、二六條に既出。
- (4) 「但知至了、意識便易」 本卷九六條に「吳仁甫問。誠意在致知  
格物後、如何。曰。源頭只在致知。知至之後、如從上面放水來、已  
自迅流湍決。」とある。
- (5) 「末梢又却如此做」「末梢」は、末には、結局は、最後には。『語  
類』卷一一、七一條、鄭可學錄(一〇八)「為學須是先立大本。其初  
甚約、中間一節甚廣大、到末梢又約。」

(6)「烏喙之不可食」「うかい烏喙」は、とりかぶと(附子)。毒草である。『史記』卷六九「蘇秦列伝」「蘇秦曰。臣聞飢人所以飢而不食烏喙者、為其愈充腹而與餓死同患也。」「広雅」卷一〇「稊草」「燠奚、毒附子也。一歳為剪子、二歳為烏喙、三歳為附子、四歳為烏頭、五歳為天雄。」「語類」卷二二、一〇条、湯泳録(II 卷中)「為人謀而不忠乎。為他人謀一件事、須盡自家伎倆與他思量、便盡己之心。不得鹵莽滅裂、姑為它謀。如烏喙是殺人之藥、須向他道是殺人、不得說道有毒。如火、須向他道會焚灼人、不得說道只是熱。如今人為己謀必盡、為他人謀不曾著心、謾爾如此、便是不忠。」

(7)「水火之不可蹈」「論語」「衛靈公」「子曰。民之於仁也、甚於水火。水火、吾見蹈而死者矣、未見蹈仁而死者也。」朱注「民之於水火、所賴以生、不可一日無。其於仁也亦然。但水火外物、而仁在己。無水火、不過害人之身、而不仁則失其心。是仁有甚於水火、而尤不可以一日無也。況水火或有時而殺人、仁則未嘗殺人、亦何憚而不為哉。」(8)「所謂慎獨」「大学章句」伝六章「所謂誠其意者、毋自欺也。如惡惡臭、如好好色、此之謂自謙。故君子必慎其獨也。」本卷一一三条に「正心、如戒懼不睹不聞。誠意、如慎獨。」とある。

(9)「也不能恁地说得」そのような言い方をするのはやはり得意でないだろう。「知が至る前にも慎独(=誠意の工夫)をおろそかにすべきではない。」という言い方をする、「格物↓致知↓誠意」という為学の順序次第に抵触することになる。次注でも触れるように朱熹は、八条目の個々の工夫が、現実には必ずしも先後に拘泥することなく柔軟に取り組まれるべき場合のあることを認めつつも、基

本的にはやはり順序次第を尊重すべきだという立場に立っていた。『朱子語類考文解義』「謂其規模固當齊做、然此處本文、但直說其學之次序如此而已、姑未說及齊做處。今亦難以一定為說、故曰、不能恁地说也。」

(10)「規模合下皆當齊做」「規模」は枠組み、体系。「合下」は元來。「齊做」は「一齊做」(一齊に行う)の意に解した。八条目という実践体系の個々の項目は、元來は同時に並行して取り組まれるべきものである、との意。同趣旨を説くものとして以下を参照。本卷九五条「説為學次第、曰。本末精粗、雖有先後、然一齊用做去。且如致知格物而後誠意、不成説自家物未格、知未至、且未要誠意、須待格了知了、却去誠意。安有此理。聖人亦只説大綱自然底次序是如此。拈著底、須是逐一旋旋做將去始得。」同一四一条「又曰。有國家者、不成説家未齊、未能治國、且待我去齊得家了、却來治國。家未齊者、不成説身未修、且待我修身了、却來齊家。無此理。但細推其次序、須著如此做。若隨其所遇、合當做處、則一齊做始得。」

(11)「説得來快」手っ取り早く説くならば。本卷一〇七条「纔説太快、便失却此項功夫也。」

(12)「無恁地勞攘」「勞攘」は、もやもや、ごたごた、煩雑なこと。ここでは八条目における八段階の階梯を指すと解釈した。『語類』卷六、一二六条、記録者名欠(I 120)「義如利刀相似、胸中許多勞勞攘攘、到此一齊割斷了。」「語類」卷一八、一三三条、徐舛録(II 卷中)「赤子之心雖是已發、然也有未發時。如飢便啼、渴便叫、恁地而已、不似大人恁地勞攘。」

(13) 「初問欲明明德」「初問」は最初。卷一四、一六条に既出。

(14) 「既有次序工夫、自然有次序功效」八条目について「格物↓致知…」を「工夫」、「物格↓知至…」を「功效」と表現したものの、『朱文公文集』卷四六「答黄商伯」第四書「程子一日一件者、格物工夫次第也。脱然貫通者、知至効驗極致也。」

(15) 「如破竹相似」「如…相似」は「…のようである」「破竹」の比喩は本卷一―四条にも「自修身以往、只是如破竹然、逐節自分明去。」とある。

147条

説大學次序、曰。致知、格物、是窮此理。誠意、正心、修身、是體此理。齊家、治國、平天下、只是推此理。要做三節看。 雉

〔校勘〕

○「説大學次序」朝鮮古写本は「説」の上に「先生」の二字有り。

〔訳〕

『大学』の順序次第についておっしゃった。「致知・格物は、この理を窮める営みだ。誠意・正心・修身は、この理を体認する営みだ。齊家・治國・平天下は、この理を推し及ぼしていく営みだ。(八条目は)この三節に区分して把握すべきだ。 呉雉録

〔注〕

(1) 「致知、格物、是窮此理」『大学章句』伝五章「所謂致知在格物者、言欲致吾之知、在即物而窮其理也。」

(2) 「誠意、正心、修身、是體此理」朱熹には、格物致知を知行の「知」、誠意正心修身を知行の「行」に対応させて説く一連の発言がある。即ち両者を対比すれば、格物致知はより主知的・理論的な営為、誠意正心修身はより行動的・実践的な営為と見なされる。よって後者を理の体認(「體此理」と規定した。卷一四、八四条「格物・致知、便是要知得分明。誠意・正心・修身、便是要行得分明。」本卷一一五条「致知、知之始。誠意、行之始」、同一七条「格物者、知之始也。誠意者、行之始也。」因みに「體認」については『語類』卷七一、四六条、王過録(V-170)に「學者體認此理、則識天地之心。」の用例が有る。

(3) 「齊家、治國、平天下、只是推此理」「推此理」は、自己の体得した理を他者へと推し及ぼすこと。『語類』卷六〇、八三条、金去偽録(IV-225)「強恕而行、即是推此理以及人也。我誠有此理、在人亦各有此理。能使人有此理亦如我焉、則近於仁矣。」(「孟子」「尽心」上「強恕而行、求仁莫近焉。」八条目中「格物乃至修身」は「明明徳」「修己、成己」に、「齊家乃至平天下」は「新民」(治人、成物)に対応する。そして「新民」は「明明徳」の成果を他者へと推し及ぼす営みである。『大学章句』経、朱注「新者、革其舊之謂也、言既自明其明徳、又當推以及人、使之亦有以去其舊染之汚也。」「大学或問」「必推吾之所自明者、以及之。始於齊家、中於治國而終及於

平天下、使彼有是明德、而不能自明者、亦皆有以自明而去其舊染之汚焉、是則所謂新民者。」

(4)「要做三節看」 八条目全体をを三節に区分する考え方は後出の一四九条にも見える。

148条

大學一篇却是有兩箇大節目。物格、知至は一箇、誠意、修身は一箇。才過此二關了、則便可直行將去。 泳

〔校勘〕

○「有兩箇大節目」 万曆本、朝鮮古写本、和刻本は、以下三出する「箇」を全て「个」に作る。

○「才過此二關了」 成化本、朝鮮古写本は「才」を「纔」に作る。万曆本、和刻本は「關」を「関」に作る。朝鮮整版本卷末「考異」には「了一作子」とある。

○「直行將去」 万曆本、和刻本は「將」を「将」に作る。

〔訳〕

『大学』の一篇はと言えば、そこには二つの大節目が有る。物格り知至る、というのがその一つであり、誠意・修身がその一つである。この二つの関門を通過してしまえば、後はただまっしぐらに進んでいけばよいのだ。 湯泳録

〔注〕

(1)「才過此二關了」 格物致知と誠意を八条目中の二大関門と見なす一連の発言は、本卷八四〇九一条を参照。

(2)「便可直行將去」 妨げなくスムーズに進んでいける。本卷八八条「某嘗謂誠意一節、正是聖凡分別關隘去處。若能誠意、則是透得此關。透此關後、滔滔然自在去為君子。不然、則崎嶇反側、不免為小人之歸也。」「將去」はくしていく。なお真徳秀『西山読書記』卷二二「大学」所引は「過此二關、便可直前行去。」に作る。

149条

物格、知至、は一截事。意識、心正、身修、は一截事。家齊、國治、天下平、又是一截事。自知至交誠意、又是一箇過接關子。自修身交齊家、又是一箇過接關子。 賀孫

〔校勘〕

○「一箇」 万曆本、朝鮮古写本、和刻本は、以下二出する「箇」をいずれも「个」に作る。

○「關子」 万曆本、和刻本は、以下二出する「關」をいずれも「関」に作る。

〔訳〕

物格り知至るといのが、ひとまとまり一段の事柄である。意は誠

に心は正しく身は修まるといふのが、一段の事柄である。家斉い国治  
まり天下平らかなりといふのもまた、一段の事柄である。知至が誠意  
と交わるところは、(前の一段と後ろの一段が) 連接する区切りであり、  
修身が斉家と交わるところもまた、やはり連接する区切りである。

葉賀孫録

〔注〕

(1) 「物格、知至、は一截事」云々 「一截」は一段。八条目全体を「格  
物致知」「誠意正心修身」「斉家治国平天下」に三区分する考え方は、  
一四七条に既出。

(2) 「自知至交誠意、又是一箇過接關子」「過接」はつなぐ、連結する、  
橋渡しする。『語類』卷三七、五三条、葉賀孫録(III 395)「義字大、  
自包得經與權、自在經與權過接處。」「語類」卷六八、二八条、林恪  
録(V 1689)「譬如春夏秋冬、冬夏便是陰陽極處、其間春秋便是過  
接處。」「關子」は区切り。八条目を上述のように三区分すれば、知  
至と誠意の間、修身と斉家の間の二箇所が区分の仕切線となる。

150条

自格物至修身、自淺以及深。自齊家至平天下、自内以及外。 敬仲

〔校勘〕

○諸本異同なし。

〔訳〕

格物から修身までは、浅いところから深いところへと進んでいくの  
である。斉家から平天下までは、内から外へと進んでいくのである。  
游敬仲録

〔注〕

(1) 「自淺以及深」 八条目間の浅深に関わる議論としては、本卷  
一二四条の「若論淺深意思、則誠意工夫較深、正工夫較淺。」や  
一三二条の「或問。正心、修身、莫有淺深否。」が有る。また格物  
乃至修身の全体にわたる浅深と関連する議論として、一四七条の「致  
知格物、是窮此理。誠意正心修身、是體此理。」が有る。

(2) 「自内以及外」 格物乃至修身(明明徳・成己)と斉家乃至平天  
下(新民・成物)を対比すれば、前者が内、後者が外になるが、後  
者についても「家↓国↓天下」と展開するのに伴って内から外へと  
範囲が広がっていく。『中庸章句』二五章「誠者非自成己而已也、  
所以成物也。成己、仁也。成物、知也。性之徳也。合内外之道也。」「大  
学或問」「明德新民、兩物而内外相對、故曰本末。」

151条

或問。格物、致知、到貫通處、方能分別取舍。初問亦未嘗不如此、  
但較生澁勉強否。

曰。格物時、是窮盡事物之理、這方是區處理會。到得知至時、却已

自有箇主宰、會去分別取舍。初間或只見得表、不見得裏、只見得粗、不見得精。到知至時、方知得到。能知得到、方會意識、可者必為、不可者決不肯為。到心正、則胸中無些子私蔽、洞然光明正大、截然有主而不亂、此身便修、家便齊、國便治、而天下可平。 賀孫

〔校勘〕

- 「有箇主宰」 万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「箇」を「个」に作る。
- 「不見得裏」 万曆本、和刻本は「裏」を「裡」に作る。
- 「胸中無些子私蔽」 成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「胸」を「胃」に作る。
- 「截然有主」 朝鮮古写本卷末「考異」「然有、一作有然」

〔訳〕

ある者がお尋ねした。「格物致知は、貫通のレベルにまで到達して、そこで初めて（是非善悪等を）識別し取捨選択することができるようになるのであって、最初の段階でもそうでないわけではないのだけれども、ただし（まだ工夫が純熟するには至っていない為）いささか生硬に工夫に努め励むのではないだろうか。」

先生「格物の段階では、事物の理を窮め尽くすのであって、それどころ（その事物に）対処し取り組んでいるのだ。知至るの段階になると、既にして主体性が確立するので、（是非善悪等を）識別し取捨選択することができるようになるのだ。最初の段階ではただ表のみがわかって裏はわからず、粗のみがわかって精はわかっていない。知至るの段

階になってこそ、（表裏精粗の全てを）すつかり把握するのだ。すつかり把握できれば、それでこそ意は誠になることができ、可なる事柄は断固として行い、不可なる事柄は決して行おうとはしない。心が正しくなると、胸中はいささかたりとも己私に蔽われることがなく、かりと光明正大になり、確固として主体が確立し乱れることがなく、この身は修まり、家斉い、国は治まり、天下は平らかとなり得るのだ。 葉賀孫録

〔注〕

- (1) 「到貫通處」 『大学章句』伝五章「至於用力之久、而一旦豁然貫通焉、則衆物之表裏精粗、無不到、而吾心之全體大用、無不明矣。此謂物格、此謂知之至也。」
- (2) 「分別取舍」 是非善悪などを分別識別し取捨選択すること。後文の「可者必為、不可者決不肯為」に相当する。
- (3) 「初間亦未嘗不如此」 「初間」は最初。
- (4) 「但較生澁」生澁は生硬である、熟していない、こなれていない。歐陽脩『埤田録』卷下「今唐鄧問、多大柿。其初生澁、堅實如石。凡百十柿、以一椀植置其中（原注「椀椀亦可」）、則紅熟爛如泥而可食。土人謂之烘柿者、非用火乃用此爾。」「論語或問」「学而」「習矣而不時、則工夫間斷而無以成其習之功。是其曾中雖欲勉焉以自進、亦且枯燥生澁而無可嗜之味。」
- (5) 「勉強」 無理して行こう。無理して努め励む。『中庸章句』二〇章「或生而知之、或學而知之、或困而知之、及其知之之一也。或安而行之、

或利而行之、或勉強而行之、及其成功一也。」卷一四、二五九条に既出。

(6) 「區處理會」「區處」は処理する、処置する。卷一四、一三五条に既出。

(7) 「到得知至時、却已自有箇主宰」「已自」は既に。知が至れば至善の所在(＝所當止之地)を知り、志向性が定まることによって主体性が確立する。『大学章句』経「知止而后有定」朱注「止者、所當止之地、即至善之所在也。知之、則志有定向。」「大学或問」「知止云者、物格知至、而於天下之事、皆有以知其至善之所在、是則吾所當止之地也。能知所止、則方寸之間、事事物物皆有定理矣。」なお「有定」を『大学章句』朱注では「志有定向」と解釈し、『大学或問』では「事事物物皆有定理」と解釈しているが、この両者は結局は同じ事を意味すると朱熹は考えている。『語類』卷一四、一六三条参照。

(8) 「初間或只見得表、不見得裏、只見得粗、不見得精」「表裏精粗」は本卷一三八条に既出。また本卷二四条「精粗大小」の注を参照。

(9) 「能知得到、方會意識、可者必為、不可者決不肯為。」「大学或問」  
「若曰知不善之不可為而猶或為之、則亦未嘗真知而已矣。」「語類」  
本卷八〇条「今日見得義當為、決為之、利不可做、決定是不做、心下自肯自信得及、這便是物格、便是知得至了。」本卷一一九条「知其不善之必不可為、故意誠。」

(10) 「胸中無些子私蔽」「私蔽」は「私」(＝己私・私欲・私意)に蔽われること。『語類』中「私蔽」の用例は本条の一例のみである。『語類』卷一三、二二条、李閔祖録(Ⅰ 225)「人心之公、每為私欲所蔽。」

『語類』卷一四、九二条、廖德明録「其良知良能、本自有之。只為私欲所蔽、故暗而不明。」「中庸章句」二七章「故君子尊德性而道問學」云々、朱注「不以一毫私意自蔽、不以一毫私欲自累。」なお本卷三八条に「這便見得他孟子胸中無一毫私意蔽窒得也」の用例有り。

(11) 「洞然光明正大」「洞然」は、洞穴が抜け通った時のように、見通せる様、明瞭な様。『大学或問』「是以雖其昏蔽之極、而介然之頃、一有覺焉、則即此空隙之中而其本體已洞然矣。」「光明正大」は「明德」の描写としても用いられる語彙であり、ここでは「私蔽」が払拭されて心が本来の輝きを十全に發揮している様。『語類』卷一四、六四条、游敬仲録「天之賦於人物者謂之命、人與物受之者謂之性、主於一身者謂之心、有得於天而光明正大者謂之明德。」

(12) 「截然有主而不亂」「截然」はきっぱりと、確固として。『語類』卷一二、三〇条、葉賀孫録(Ⅰ 302)「今於日用間空閑時、收得此心在這裏截然、這便是喜怒哀樂未發之中、便是渾然天理。」

152条

格物、致知、比治國、平天下、其事似小、然打不透、則病痛却大、無進步處。治國、平天下、規模雖大、然這裏縱有未盡處、病痛却小。格物、致知、如知及之。正心、誠意、如仁能守之。到得動之不以禮處、只是小小未盡善。蓋卿

方子録云。格物、誠意、其事似乎小、然若打不透、却是大病痛。治國、平天下、規模雖大、然若有未到處、其病却小。蓋前面大本領已自正了。



學者若做到物格、知至處、此是分以上底人。

〔校勘〕

○「這裏縱有未盡處」 万曆本、和刻本は「裏」を「裡」に作る。

○「蓋卿」 朝鮮古写本は記録者名を「從周」に作る。なお「方子録」に付した注を参照。

○「此是分以上底人」 成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「十」を「七」に作る。万曆本、呂留良本、劉氏伝経堂叢書本、和刻本は「十」に作る。朝鮮古写本は「以」を「已」に作る。

〔訳〕

格物致知は、治国平天下と比較すれば、その事柄は小さいようだが、しかしながらもしこを徹底して行えなければ、その病弊はかえって大きく、それ以上に先へは進めないのだ。治国平天下は、その規模は大きいけれども、しかしながら仮にそこに不十分な点があったとしても、その病弊はかえって小さい。(『論語』でたとえれば) 格物致知は、「知、これに及ぶ」に相当する。正心誠意は、「仁、能くこれを守る」に相当する。「これを動かすに礼を以てせず」が問題になるレベルというのは、ただいささか善を尽くしていない部分がある、というのに過ぎないのだ。 襲蓋卿録

李方子録に云う。「格物誠意は、その事柄は小さいようだが、しかしながらもしこを徹底して行えなければ、それはかえって大いなる病弊なのだ。治国平天下は、その規模は大きいけれども、しかしながら

ら仮にそこに不十分な点があるにせよ、その病弊はかえって小さいのだ。(なぜというに) それは思うに、それ以前の段階で、大いなる根本が既に正されているからだ。学ぶ者がもしも物格り知至るの段階まで実践し得たのであれば、それは分以上の人物なのだ。」

〔注〕

(1) 「格物、致知、比治国、平天下」云々 格物致知は、事柄は小さいがその欠点の持つ意味は重大であり、治国平天下は、事柄は大きいとその欠点の持つ意味は軽微である。同趣旨は本卷一一八条にも見える。「致知誠意兩節若打得透時、已自是箇好人。其它事一節大如一節、病敗一節小如一節。」

(2) 「打不透」「打」は「做」と同じで「する」「行う」の意。本卷一一八条に「打得透」の用例がある(前注所引)。「打得透」は「徹底して行う」の意で、「透」は結果補語。その否定形が「打不透」である。なお参考までに「做得透」「做不透」の用例を挙げておく。『語類』卷三九、四一条、林恪録(Ⅲ 1018)「參也魯。魯、是魯鈍。曾子只緣魯鈍、被他不肯放過、所以做得透。若是放過、只是魯而已。」「語類」卷四三、一五條、葉賀孫録(Ⅲ 1101)「如這一兩件大事、可惜聖人做不透。若做得透、使三綱五常既壞而復興、千條萬目自此而更新。」(3) 「病痛却大」「病痛」は病弊、欠点、欠陥。卷一四、五〇条に既出。(4) 「知及之」「仁能守之」「動之不以禮」『論語』「衛靈公」「子曰。知及之、仁不能守之、雖得之、必失之。知及之、仁能守之、不莊以蒞之、則民不敬。知及之、仁能守之、莊以蒞之、動之不以禮、未善也。」

朱注「動之、動民也。猶曰鼓舞而作興之云爾。禮、謂義理之節文。愚謂學至於仁、則善有諸己而大本立矣。蒞之不莊、動之不以禮、乃其氣稟學問之小疵、然亦非盡善之道也。故夫子歷言之、使知德愈全則責愈備、不可以為小節而忽之也。」

(5) 「小小未盡善」「論語」「八佾」「子謂韶、盡美矣、又盡善也。謂武、盡美矣、未盡善也。」

(6) 校勘でも触れたように先の記録者名「蓋卿」を朝鮮古写本は「從周」に作り、さらに「方子録」を別掲していることから、本条は龔蓋卿・竇從周・李方子の三名が同席の上でそれぞれが記録を残した可能性を示唆する。実際、『語類』卷七三、五六条、竇從周録(V 1855)「畏其背不獲其身」云々の末尾校注に「方子・淵・蓋卿録、互有詳略」とあるように、この三名は確かに同席の記録を残している。『朱子語録姓氏』は竇從周を「丙午(淳熙十三年一一八六)以後所聞」、李方子を「戊申(淳熙十五年一一八八)以後所聞」、龔蓋卿を「甲寅(紹熙五年一一九四)所聞」とするから、この三者が同席し得たのは紹熙五年ということになる。なお田中謙二『朱門弟子師事年攷』頁四五、頁二六九〜二七〇を参照。

(7) 「大本領」大いなる根本。最も抜本的で重要な部分。『語類』卷一三七、四九条、林夔孫録(VIII 3269 ~ 70)「問文中子之學。曰。：問。它只緣以元經帝魏、生此說。曰。便是它大本領處不曾理會、縱有一二言語可取、但偶然耳。」

(8) 「此是十分以上底人」「十分」は十割、百分。「十分以上」は、「十全の上にも十全」の意。既出の「二十分」も同様。『語類』卷

十四、一〇六条「又問。既曰明德、又曰至善、何也。曰。明得一分、便有一分。明得十分、便有十分。明得二十分、乃是極至處也。」但し校勘で指摘したように成化本以下の諸本は「七分以上」に作るから、「十」は「七」の誤写であった可能性もある。ここでは底本に従って訳出しておいたが、まだ誠意乃至平天下の実践を残した「物格知至」の段階で既にして「十分以上底人」であるというのはいささか不合理でもあり、また龔蓋卿録において「小小未盡善」と評されていることからしても、「七分以上」に作るのが妥当だと思われる。

153条

問。看來大學自格物至平天下、凡八事、而心是在當中、擔著兩下者。前面格物、致知、誠意、是理會箇心。後面身修、家齊、國治、天下平、是心之功用。曰。據他本經、去修身截斷。然身亦是心主之。士毅

〔校勘〕

○「看來」万曆本、和刻本は「來」を「來」に作る。

○「擔著兩下者」成化本、万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「著」を「着」に作る。

○「理會箇心」万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「箇」を「个」に作る

〔訳〕

質問「思うに、『大学』は格物から平天下に至るまで、全部で八項

目ですが、心はその真ん中に位置を占め、(前と後ろの工夫の) 双方を担っています。前の格物致知誠意は、心そのものに取り組む営みです。後ろの身修まり家斉い国治まり天下平らかなりは、心による働きの結果です。」先生「『大学』経文に拠れば、修身のところ(前後を) 截断すべきだ。しかしながらその身も、心がその主となるものなのである。」 黄士毅録

〔注〕

(1) 「看來」 思うに。

(2) 「心是在當中」「當中」は中間、真ん中。「正心」が八条目中の中間に位置を占めることを指す。

(3) 「擔著兩下者」「擔著」は、担っている。「著」は動作の持続を示す助字。「兩下」は双方、両方。『朱子語類考文解義』「兩下、猶言兩邊。文出穀梁傳。下文前面後面、是也。」「春秋穀梁傳」桓公六年「兩下相殺、不道。」范寧注「兩大夫相殺、不書春秋。」

(4) 「據他本經、去修身截斷」 修身以前は修己、齊家以下は治人であり、八条目は修身の前後で区分される。『大学章句』経、朱注「脩身以上、明明徳之事也。齊家以下、新民之事也。」「據他本經」とは、修身を分岐点とする考え方が『大学』本文にも示されていることを指す。『大学章句』経「自天子以至於庶人、壹是皆以脩身為本。」朱注「正心以上、皆所以脩身也。齊家以下、則舉此而措之耳。」「去修身截斷」の「去」は心理的な方向を表す助字。三浦國雄『朱子語類抄』三四頁。

(5) 「身亦是心主之」『大学章句』経、朱注「心者、身之所主也。」「大學」経は「修身」によって八条目を前後に截断しているが、身は心に収斂されるから、心が前後を截断していると言うこともできる。要するにここで朱熹は、質問者の発言を是認している。

154条

自明明徳至於治國、平天下、如九層寶塔、自下至上、只是一箇塔心。四面雖有許多層、其實只是一箇心。明德、正心、誠意、修身、以至治國、平天下、雖有許多節次、其實只是二理。須逐一從前面看來、看後面、又推前面去。故曰、知至而後意誠、意誠而後心正也。 子蒙

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一五は本条を収録しない。

○「一箇塔心」 万曆本、和刻本は、以下二出する「箇」をいずれも「个」に作る。

○「從前面看來」 万曆本、和刻本は「來」を「来」に作る。

○「知至而後意誠」 成化本、万曆本、朝鮮整版本、和刻本は「後」を「后」に作る。

〔訳〕

明明徳から治國平天下に至るまでは、九層の塔のようなものであって、下から上まで、塔の中心柱は一本だ。四面には多くの階層が存在

するとはいえ、その実、中心の柱は一つなのだ。明德・正心・誠意・修身から治国平天下に至るまで、多くの順序次第があるとはいえ、その実、ただ一つの理なのだ。是非ともその一つについて、前から見ていって、後ろを見たらまた前に推し及ぼす、というふうにするべきなのだ。それ故に、知至りて後に意は誠に、意は誠にして後に心は正し、と言うのだ。 林子蒙録

〔注〕

(1) 「九層」 「九層」は高層の意。『老子』六四章「合抱之木、生於毫末。九層之台、起於累土。千里之行、始於足下。」なお『河南程氏遺書』卷一、五条に「如登九層之臺、自下而上者為是。」とある。

(2) 「寶塔」 塔、仏塔。「寶」は美称。

(3) 「只是一箇塔心」「塔心」は塔の中心柱。塔心柱に同じ。明、曹学佺『蜀中広記』卷八二「唐鄆縣法定寺」「忠於天寶中、在寺愈加精苦。無何、塔為震震、拔其塔心柱出外。忽有小木承代之意。衆咸怪之、罔測厥由。忠乃叩磕於聖彌勒像告訴、天龍合加畏重、何輒震擊奪塔心柱耶。一日迅雷烈風還同前震覆、觀之乃龍神送舊柱、安置如故。」

(4) 「節次」 順序次第。

155条

問。古之欲明明徳於天下者、至致知在格物、詳其文勢、似皆是有為

而後為者。曰。皆是合當為者。經文既自明德説至新民、止於至善、下文又却反覆明辨、以見正人者必先正己。孟子曰。天下之本在國、國之本在家、家之本在身。亦是此意。 道夫

〔校勘〕

○「似皆是為有為而後為者」朝鮮古写本は「似」下に「乎」字有り。

○「皆是合當為者」朝鮮古写本は「皆」の上に「此」字有り。

○「正人者必先正己」朝鮮古写本は「人」を「人心」に作り「心」下に「池本無心字」の双行小注有り。

〔訳〕

質問。「古の明德を天下に明らかにせんと欲する者は」から「致知は格物に在り」に至るまで、文勢を詳しく考えてみるに、そのいずれもが、ため為にするところがあつて然る後に為す、というもののようになっています。「先生「どれもが当然に為すべきものなのだ。経文は明德から新民・止至善にまで説き及んだ上で、その下文でさらに（八条目について）反覆して明瞭に論弁し、人を正す者はまず以て己を正さねばならない、ということを示したのである。『孟子』に「天下の本は国に在り、国の本は家に在り、家の本は身に在り。」とあるのも、やはり同じ趣旨なのだ。 楊道夫録

〔注〕

(1) 「似皆是為有為而後為者」「有為而後為」は「有所為而為」と同じ。

ある行為を、それ自体を重要視するが故に行うのではなく、他の目的の爲に行うこと。功利的であり動機が不純であるという理由で、否定的に言及されることが多い。「有所爲而爲」は張栻の語。張栻『南軒集』卷一四「闡範序」「古之君子、皆非有所爲而爲之。」同、卷

一七「温嶠得失」「昔人之事業、皆非有所爲而爲之。」「朱文公文集」

卷八九「右文殿修撰張公神道碑」「蓋其常言有曰。學莫先於義利之辨。

而義也者、本心之所當爲而不能自己。非有所爲而爲之者也。一有所爲而後爲之、則皆人欲之私而非天理之所存矣。嗚呼。至哉言也。其

亦可謂擴前聖之所未發而同於性善養氣之功者歟。」

(2) 「正人者必先正己」 『孟子』「尽心」上「有大人者、正己而物正者也。」

(3) 「反覆明辨」 『中庸章句』二十章「博學之、審問之、慎思之、明辨之、篤行之。」

(4) 「孟子曰」 『孟子』「離婁」上「孟子曰。人有恆言、皆曰天下國家。天下之本在國、國之本在家、家之本在身。」

156条

問。古之欲明明德於天下、至致知在格物、向疑其似於為人。今觀之、大不然。蓋大人、以天下爲度者也。天下苟有一夫不被其澤、則於吾心爲有慊。而吾身於是八者有一毫不盡、則亦何以明明德於天下耶。夫如是、則凡其所爲、雖若爲人、其實則亦爲己而已。先生曰。爲其職分之所當爲也。 道夫

〔校勘〕

○諸本異同なし。

〔訳〕

質問「古の明德を天下に明らかにせんと欲する者は」から「致知は格物に在り」に至るまでについて、以前は、「人の爲にする」ものではないか、と疑っておりました。今考えてみるに、全くそうではありませんでした。思うにたいじん大人とは、その度量を天下のように広大にする者なのです。(大人にとつて) 仮にも天下に、その恩沢を蒙らぬ者がたった一人でも存在するならば、自らの心に飽きたらぬものを感じるのです。そして我が身において、この八者(＝八条目)に対して寸分たりとも尽くさない部分があるならば、いったいどうして明德を天下に明らかにすることができましようか。もしこのように理解してよいのであれば、その為すところの全ては、「人の爲にする」ものようでありながら、その実はやはり「己の爲にする」ものではないのです。先生「その職分として当然爲すべき事柄を爲しているのだ。」 楊道夫録

〔注〕

(1) 「向疑其似於為人」「爲人」は「爲己」の対概念。他者からの評価を求めて行動すること。卷一四、二八条に既出。『論語』「憲問」「子曰。古之學者爲己、今之學者爲人。」

(2) 「大人」「たいじん大人」は「利見大人」(乾、九二、九五)等『周

易』に類出し、『論語』「季氏」に「君子有三畏。畏天命、畏大人、畏聖人之言。」とある他、『孟子』においても重要な語彙として多数用いられている。『孟子』ではしばしば小人と対を為して君子とほぼ同義で用いられ、道徳的実践に努める者、修己治人に努める者、天与の道徳性を保持している者、等の意味を担っている。以下に五例を挙げる。①「滕文公」上「有大人之事、有小人之事。：故曰、或勞心、或勞力。勞心者治人、勞力者治於人。」②「告子」上「公都子問曰。鈞是人也。或為大人、或為小人、何也。孟子曰。從其大體為大人、從其小體為小人。」③「尽心」上「居仁由義、大人之事備矣。」④「尽心」上「有大人者、正己而物正者也。」⑤「離婁」下「大人者、不失其赤子之心者也。」なお『大学章句』経、朱注に「大學者、大人之學也。」とある。

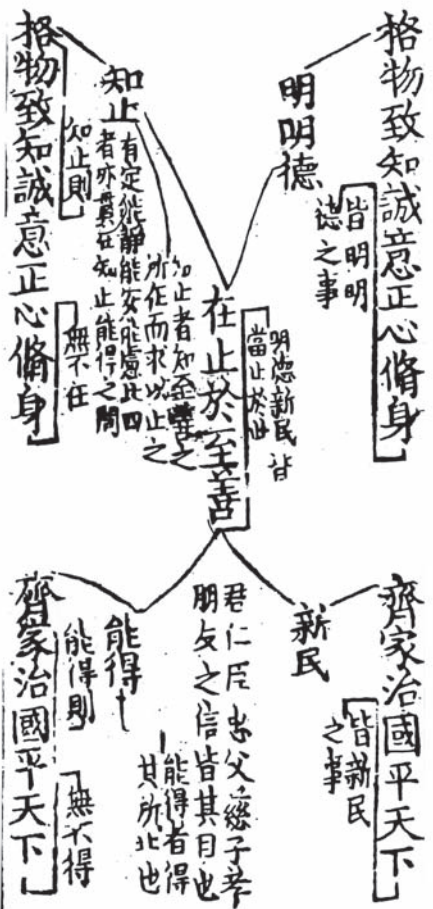
(3) 「以天下為度」『漢書』卷五二「韓安國列伝」「夫聖人以天下為度者也。不以己私怒傷天下之功。」注「師古曰。言當隨天下人心而寬大其度量也。」

(4) 「天下苟有一夫不被其澤」『孟子』「離婁」上「今有仁心仁聞而民不被其澤、不可法於後世者、不行先王之道也。」『孟子』「萬章」上「思天下之民匹夫匹婦有不被堯舜之澤者、若己推而內之溝中。其自任以天下之重如此。」同「萬章」下「思天下之民匹夫匹婦有不與被堯舜之澤者、如己推而內之溝中。其自任以天下之重也。」なお本卷一八条に「無一物不被其澤」とある。

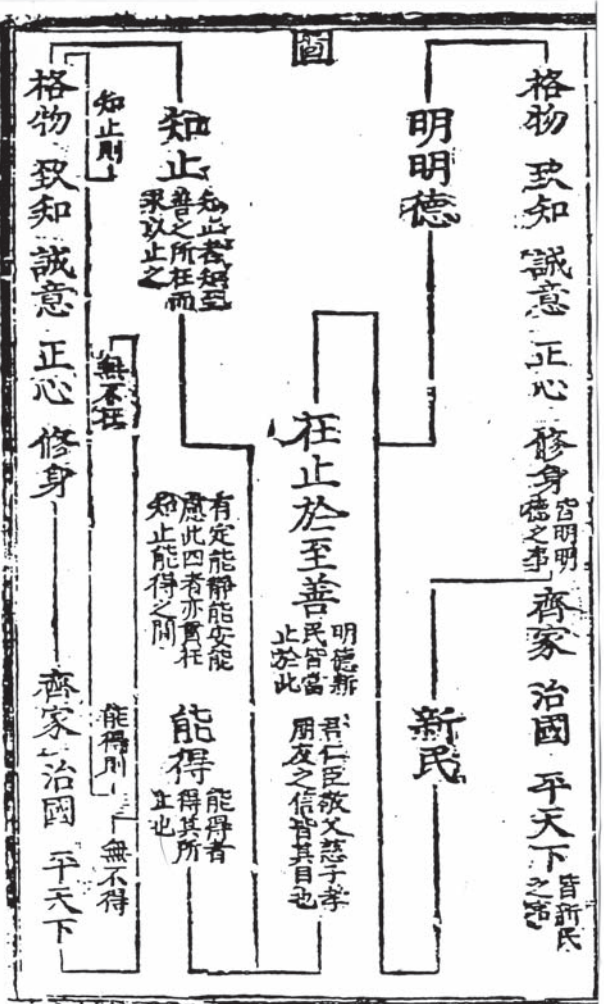
(5) 「為其職分之所當為也」 實際に為政に携わるような職位にある人物でなくとも、君子にとって、修身齊家から治國平天下に至るま

での全てが、己が分内の事でありその職分である、というのが朱熹の見解であった。『大学或問』「今大学之教、乃例以明明徳於天下為言、豈不為思出其位、犯非其分。而何以得為為己之學哉。曰。：君子之心、豁然大公、其視天下、無一物而非吾心之所當愛、無一事而非吾職之所當為。雖或勢在匹夫之賤、而所以堯舜其君堯舜其民者、亦未嘗不在其分内也。又況大学之教、乃為天子之元子衆子・公侯卿大夫士之適子与国之俊選而設。是皆将有天下国家之責而不可辭者。」

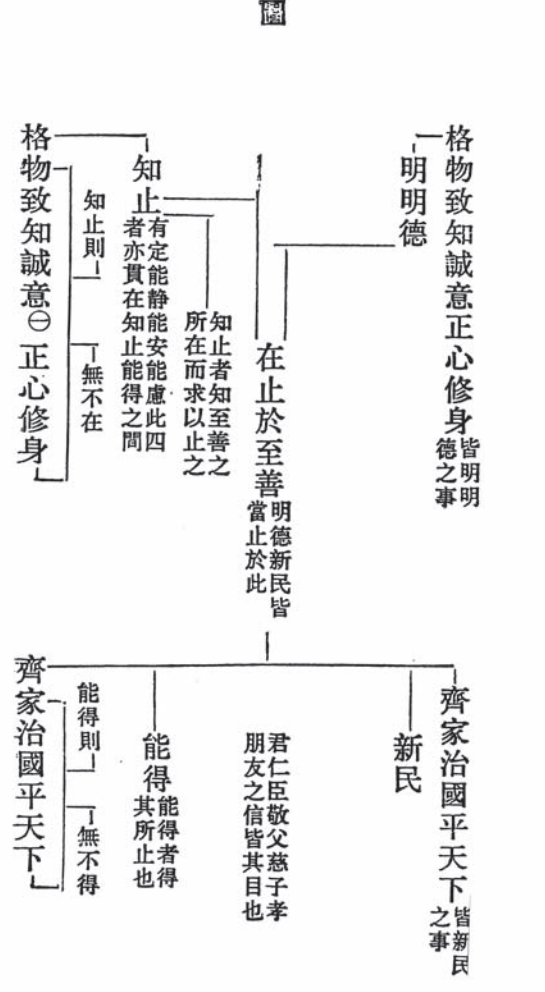
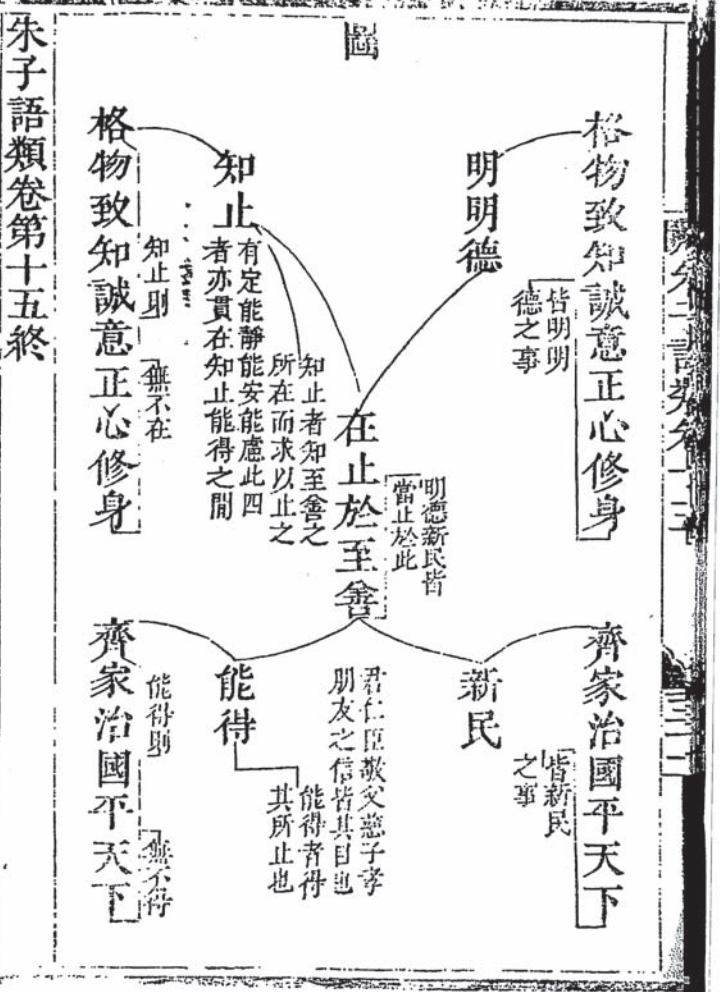
圖



圖

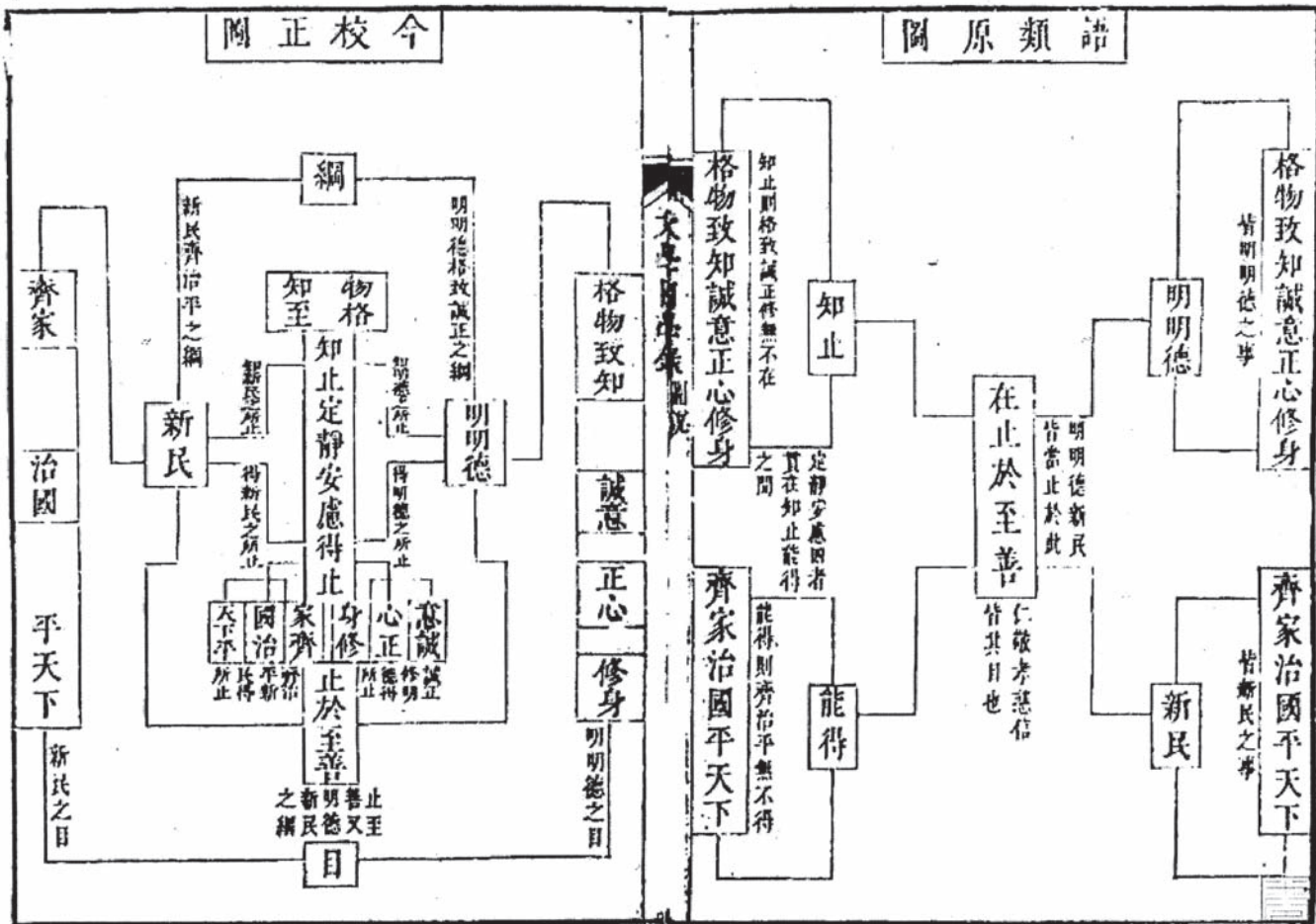


上 [成化本 『朱子語類』 卷一五 [圖]]  
下 [朝鮮鑿版本 『朱子語類』 卷一五 [圖]]



上【劉氏伝経堂叢書本『朱子語類』卷一五【図】】  
 下【中華書局本『朱子語類』卷一五【図】】





【清、王澐『大學困學錄』】

## 卷一五 卷末 図

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一五は本図を掲載しない。

○「君仁臣敬父慈子孝朋友之信」成化本、万曆本、和刻本は「敬」を「忠」に作る。

○「知止則無不在」万曆本、和刻本は「無」を「无」に作る。

〔注〕

この図は『大学章句』経の冒頭「大學之道、在明明徳、在新民、在止於至善。」「知止而后有定、定而后能静、静而后能安、安而后能慮、慮而后能得。」の二文、及び八条目の三者の關係を図解したものである。

「在止於至善」を図の中心に据えて、右半分は、八条目中の格物乃至修身が明明徳に、齊家乃至平天下が新民に対応することを示し、さらに明明徳と新民がいずれも止至善を以て完結することを示す。左半分は、知止によって格物乃至修身の全てが止至善を実現すること（「無不在」、能得によって齊家乃至平天下の全てが止至善を得ること（「無不得」）を示した上で、知止と能得がいずれも止至善に帰結することを示している。

ただし格物乃至修身と知止、齊家乃至平天下と能得が、図のように明確な対応關係を持つと言えるのかどうか、少なからず問題を含んで

いるように思われる。その点は後にも触れる。

なお『語類』が門人よる朱熹の語の筆録である以上、この図も門人の書き残したメモであるとして見ておきたい。清の王澍も同じ見解である（参考2）参照。

(1) 「格物致知誠意正心修身（小注「皆明明徳之事」）」「齊家治國平天下（小注「皆新民之事」）」「『大学章句』経、朱注「脩身以上、明明徳之事也。齊家以下、新民之事也。」「『語類』卷一四、八四条、沈僩録「如格物・致知・誠意・正心・修身五者、皆明明徳事。」

(2) 「在止於至善（小注「明德新民、皆當至於此」）」「『大学章句』経、朱注「止者、必至於是而不遷之意。至善、則事理當然之極也。言明明徳、新民、皆當至於至善之地而不遷。」

(3) 「在止於至善（小注「君仁臣敬父慈子孝朋友之信、皆其目也」）」「『大学章句』伝三章「詩云。穆穆文王、於緝熙敬止。為人君、止於仁。為人臣、止於敬。為人子、止於孝。為人父、止於慈。與國入交、止於信。」朱注「詩、文王之篇。：引此而言聖人之止、無非至善。五者乃其目之大者也。：右傳之三章。釋止於至善。」

(4) 「知止（小注「知止者、知至善之所在而求以止之」）」「『大学章句』経、朱注「止者、所當止之地、即至善之所在也。」

(5) 「能得（小注「能得者、得其所止也」）」「『大学章句』経、朱注「得、謂得其所止。」

(6) 「知止則格物致知誠意正心修身無不在」「知止」と「格物致知」の関連については以下を参照。『大学章句』経、朱注「物格知至、

則知所止矣。意誠以下、則皆得所止之序也。」「『大学或問』「知止云者、物格知至、而於天下之事、皆有以知其至善之所在。是則吾所當止之地也。能知所止、則方寸之間、事事物物皆有定理矣。」これらに徴しても、「知止」は八条目中では専ら「格物致知」と対応すると思われる。「知止」を「誠意正心修身」まで含めて対応させる考え方が何に基づくのか、未詳。賀瑞麟「朱子語類記疑」（劉氏伝経堂叢書本語類卷末）に「圖、誠意以下誤」とあるのは、あるいはこの点に関する疑義を指摘したものか。

(7)「能得則齊家治國平天下無不得」「能得」と「齊家治國平天下」の関連については以下を参照。『語類』卷一七、三六条、徐舛録(Ⅱ 381)「問。到能得處、是學之大成、抑後面更有工夫。曰。在己已盡了、更要去齊家治國平天下、亦只是自此推去。」同、三七条、徐舛録(Ⅱ 382)「問。或問、自誠意以至於平天下、所以求得夫至善而止之、是能得已包齊家治國說了。前晚何故又云。能得後、更要去齊家治國平天下。曰。以修身言之、都已盡了。但以明明德言之、在己無所不盡、萬物之理亦無所不盡。如至誠惟能盡性、只盡性時萬物之理都無不盡了。故盡其性、便盡人之性、盡人之性、便盡物之性。」以上の語に照らしても、「能得」は必ずしも「齊家治國平天下」のみと対応するものではなく、「誠意乃至平天下」の全体に関わるものである。この図が「能得」を専ら齊家治國平天下と対応させている根拠は、未詳。なお朝鮮整版本は図左の「格物乃至修身」と「齊家乃至平天下」とを直線で結び、かつ「無不在」と「無不得」をも線で結ぶことによつて、原図における「知止」と「格物乃至修身」、「能得」と「齊家乃至

至平天下」それぞれの一对一の対応関係を敢えて曖昧にしている如くである。恐らく原図に疑念を抱いたが故に、意を以て改めたのであろう。

#### 〔参考1〕

李宜哲『朱子語類考文解義』「按此圖小註排書、與舊本不同、而其系絡引屬者、又變幻失真。乃洪之為也。此等處、雖有差誤、猶當存舊而別論其說於下。雖有前人別本有可据者、又當別付於下、以示尊敬之意。而今乃漫漶舊本而輒作新圖如此、雖其十分是當、猶犯不韙之誅、況未能然乎。恐涉忘泐可怪也。」

李宜哲が『朱子語類考文解義』撰述に際して使用した語類底本は朝鮮整版本である(『朱子語類考文解義』卷首、이동인「朱子語類考文解義解題」参照)。文中の洪は朝鮮整版本の校正作業に当たった洪啓禧を指す(朝鮮整版本語類卷首「朱子文集語類校刊凡例」洪啓禧、英祖四十六年庚寅一七七〇、及び『英祖実録』英祖四十六年十月二十日壬辰条を参照)。李宜哲は旧本の図に「差誤」があることを認めた上で、洪啓禧が意を以て旧本の図を改変し「新図」を作成した行為を批判している。

#### 〔参考2〕

清、王澍『大学困学録』(四庫全書存目叢書、經部第一七三冊所収)「問。語類所載大學圖、其次第節目、詳矣。今復更定此圖、何也。曰。原圖所載、如格致誠正修爲明明德之事、齊治平爲新民之事等類、按之經傳、

固無可議。獨其所云、知止、則格致誠正修、無不在、能得、則家治平、無不得云者、與章句物格知至、則知所止矣、意識以下、則皆得所止之序者、不合、則固不容以無辨也。蓋物格知至、是謂知止之由、意識心正身修、是明明德之得所止、家齊國治天下平、是新民之得所止。今乃以格致誠正修爲知止之事、齊治平爲得止之事、則是以知止爲明德、能得爲新民、是明德但有知、新民但有行、於理有所歉而不可通矣。不知知止能得、皆貫明明德新民、即物格知至、亦匪獨明明德之事、物無不格、知無不至、則身心之理固明、而家國天下之理亦得。此知止之所以貫乎明明德新民、而非可但以爲明明德之事也。：」

王澗も図の右半分は問題なしとし、左半分に対しては疑義を呈している。「知止」「能得」と八条目の関連づけに関しては、王澗が指摘するように「物格知至、是謂知止之由、意識心正身修、是明明德之得所止、家齊國治天下平、是新民之得所止。」というあたりが穏当な理解と称すべきだろう。

王澗は右側に「語類原図」を、左側に「今校正図」を並べて対照することで原図に対する修正の意を示している。「今校正図」では、図の右端に格物致知誠意正心修身を掲げてこれを明明徳と結びつけ、左端に齊家治國平天下を掲げてこれを新民と結びつける。そして図の中央に止至善を配し、明明徳と新民のそれぞれが止至善に帰結することを示す。また図の中央には、止至善の上に知止定靜安慮得止を配し、物格知至を知止と、意識心正身修家齊國治天下平を得止と結びつけている。

なお図の作者について、王澗は同文中で以下のように述べている。

「曰。朱子於大學、直看到前人所不到處。乃其爲圖、亦復有失、何也。曰。語類一書、本當時門人所記朱子之語。非出朱子手筆。此圖、蓋亦其門人聞朱子之言、因本其意、作爲此圖、而于師說、偶或有失耳。」

『朱子語類』卷一五（86～156条）、訳注担当者

86	～	96	条	中	純	夫
97	～	103	条	焦	堉	
104	～	115	条	宇	佐	美
116	～	130	条	孫	路	易
131	～	138	条	福	谷	彬
139	～	145	条	小	笠	智
146	～	156	条・図	中	純	夫

（二〇一二年十二月三日受理）

- （うさみ ぶんり 京都大学大学院文学研究科教授）
- （おがさ ともあき 京都大学高等教育研究開発機構非常勤講師）
- （しょう こん 京都大学大学院文学研究科博士後期課程）
- （そん るい 岡山大学言語教育センター准教授）
- （なか すみお 京都府立大学文学部教授）
- （ふくたにあきら 京都大学大学院文学研究科博士後期課程）